

(4) 無脊椎動物

1) 昆虫類

①概説

青森県の昆虫相に関する調査研究は、明治時代に入ってから当時の内務省勸農局や県の試験研究機関によって農業害虫に関連して進められた。また、昆虫学に興味を持った教育関係者、同好者等が青森県昆虫学会、青森博物研究会や青森県生物学会等を結成し、博物学的知見からの調査研究も継続して行ってきた。この中で「青森県博物総目録」第2巻（1941）昆虫編が発行され、2,068種の昆虫の目録がまとめられた。その後同様な目録は発表されていない。青森県の昆虫に北限種が多い要因となっているのが津軽海峡（ブラキストン線）である。この生物地理学上の分布境界線の重要性から、県内には古くから多くの昆虫研究者が訪れ調査研究を行っている。しかし、県内の昆虫相全体の解明には至っていない。

絶滅危惧候補種選考に当たっては、無脊椎分野編集委員での協議の結果、記録の無いもの、1例だけの記録しかなく偶産の可能性のあるもの、県外、国外の学会誌、古書等に記録が掲載されていて調査不能なもの、同定に疑問があるもの、そして県内の調査空白地域がまだ多いことなどから、県内でよく調査されている昆虫類について検討することとした。なお、検討は、青森県「青森県の希少な野生生物－青森県レッドリスト改訂増補版－」（2006）、環境庁「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物」（2006）を中心に行われた。また、県内の昆虫同好者からも情報を提供してもらった。選定種の最終決定に当たっては、選定基準によって選出された候補種について、隣接する北海道、岩手県、秋田県の分布状況や、県内外の研究者からの意見等を元に編集委員での再三に渡る協議を経て最終候補種を決定し、全体会で討議され、選定種が最終的に決定された。

昆虫類については、青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック－（2000）では219種、青森県の希少な野生生物－青森県レッドリスト（2006年改訂増補版）－（2006）では271種が選定された。今回の2010年改訂版では265種類が選定された。その内訳は絶滅野生生物（EXランク）が3種類、最重要希少野生生物（Aランク）が23種類、重要希少野生生物（Bランク）が24種類、希少野生生物（Cランク）は93種類、要調査野生生物（Dランク）121種類、そして地域限定希少野生生物（LPランク）は十和田市蔦のルイヨウマダラテントウが1種である。

青森県の希少な野生生物－青森県レッドリスト（2006年改訂増補版）－刊行後から調査を行い、絶滅危惧状態が改善されず上位ランクに変更になった種類は、CランクからAランクがオオセスジイトトンボ、CランクからBランクがギンイチモンジセセリ、スジボソヤマキチョウ、キタアカシジミ、DランクからCランクがオオチャバネセセリ、スジグロチャバネセセリ、ヒョウモンチョウ、ウラギンスジヒョウモンである。反対に、改善が見られ下位ランクに変更になったのは、AランクからCランクがオナガサナエ、BランクからCランクがルリイトトンボ、モートンイトトンボ、ハグロトンボ、コヤマトンボ、ショウジョウトンボ、オオシオカラトンボである。絶滅が危惧され新たにCランクにヒメアカネが追加された。また、今回改善が顕著で、RDBから削除された種類はシオヤトンボ、ミヤマカワトンボ、オオカワトンボ、リスアカネ、ミヤマアカネ、タイリクアカネ、チョウトンボの7種類である。今回変更にならなかったものの、絶滅危惧状態が続いて今後特に生息状況の調査等が必要なものはメガネサナエ、カトリヤンマの2種である。

これら昆虫類が個体数、生息地を減らし、絶滅・希少な種類になったのは、個々に理由が考えられるが、今後生息に脅威となる要因が取り除かれ、絶滅・希少な昆虫類がなくなることを切望している。

(山内智)

②本文

トンボ目 エゾトンボ科

EX

和名 トラフトンボ

環境省：該当なし

学名 *Epitheca marginata* (Selys)

【形態的特徴】 体長：50～56mm。黒色の地に黄色の虎斑模様がある。腹側の黄色斑は短く各節の長さの約1/2。雌は翅の前縁に黒褐色条があるが、縮小している個体もある。

【選定理由】 1937年6月13日に青森市で2雄が採集された (Ishimura, 1938)。それ以降、70年以上にわたって生息が確認されていない。

【分布と生態の概要】 本州・四国・九州に分布するが東北地方では少ない。国外では朝鮮半島・中国に分布する。平地や丘陵地の池・沼に生息し、成虫は5～6月に出現する。成熟雄は池・沼でテリトリー飛翔をして、産卵に来た雌を捉えて交尾する。交尾は水上を飛びながら行い、5分程である。交尾を解いた雌は岸辺の植物に静止して、ゼラチンの細長い卵紐を放出する。雌はその塊を腹端に付けて飛びたち、水面を打って浮遊植物に付着させる。卵はゼラチンの中で発育して、20～30日で幼虫が孵化する。幼虫は終齢で越冬し、翌年の春に羽化する。

【特記事項】 1930年代の県内における生息状況の記録がなく、分布の詳細は不明である。

(奈良岡弘治)

トンボ目 トンボ科

EX

和名 ムツアカネ

環境省：該当なし

学名 *Sympetrum danae* (Sulzer)

【形態的特徴】 体長：30～33mm。未熟成虫は黄色の地に黒色斑を持つ。アキアカネに似るが、胸側の2本の黒条が融合して太くなるなど、全体が黒っぽい。雄では成熟すると全体が黒化する。雌の産卵弁は第9腹節半ばに達し、下方に突出する。

【選定理由】 Oguma (1922) と奥村 (1942) は青森を記録したが、それ以降、確認されていない。

【分布と生態の概要】 北方系の種で、岐阜県以北の本州高冷地の数か所と北海道各地に生息する。国外では、ヨーロッパからシベリア・カムチャッカを経て北アメリカまで分布する。日当りの良い湿原に生息し、成虫は7月下旬～10月上旬に見られる。卵越冬で、幼虫は5月下旬から孵化する。幼虫期間は50～60日である。羽化は日中行われ、7月下旬～9月上旬まで続く。生殖行動は10～15時に盛んである。交尾は12～15分を要し、連結で打泥、または打水産卵をする。

【特記事項】 八幡平 (小野・佐竹, 1978; 成田, 1992; 高橋, 1992) で最近まで発見されている。したがって、八甲田山系の湿原に分布していた可能性がある。

(奈良岡弘治)

チョウ目 シジミチョウ科

EX

和名 オオルリシジミ

環境省：絶滅危惧Ⅰ類

学名 *Shijimiaeoides divinus barine* Leech

【形態的特徴】 大型のシジミチョウの仲間で、瑠璃色の翅を持つことからこの和名がつけられた。

【選定理由】 生息環境の悪化とともに激減し、1978年6月の1雌 (岩木山麓) を最後に絶滅。

【分布と生態の概要】 本州 (東北・中部地方) と九州の3地域に限られた特異な分布を示し、東北地方ではすべて絶滅 (室谷, 2007)。県内では津軽地方に限られ、生息が確認されていたのは青森市三内・豆坂高原 (現青森空港付近) ・弘前市や五所川原市・鶴田町にまたがる岩木山麓など合わせて16か所。年1回の発生で、幼虫はマメ科のクララを食べ、蛹で越冬する。

【特記事項】 生息環境はアズマギク・オキナグサなど陽地性植物が多い草原で、その中にクララが繁茂する地域に限られていた。このような草原は労役用牛馬の飼料の採草地で、1960年代までは良好な環境が各所に見られた。生息地は平坦な場所が多かったことから、開拓や開発の対象になりやすく、宅地・畑・果樹園・造林地・空港・ゴルフ場・公園・産廃処分場・墓地などに変貌し、1970年代までに生息地は順次消滅していった (室谷, 1989)。

(三浦博)

トンボ目 イトトンボ科**A**

和名 カラカネイトトンボ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Nehalennia speciosa* (Charpentier)

[形態的特徴] 体長：23.5～30mm。小型で、若い成虫は胸部が金属緑色、腹部は赤銅色の美麗種。老熟するにつれて、雄は胸部が茶褐色となり、雌は全体が茶褐色に変ずる。

[選定理由] 1970年代までは各地の湿地に多数生息していたが、その後、個体数・生息地ともに著しく減少した。現在は下北郡の数か所、野辺地町・六ヶ所村・三沢市・つがる市、および深浦町に生息するが、三沢市の仏沼以外は個体数が非常に少なく、絶滅状態である。生息地ではヨシの侵入や、乾燥化により湿地が消滅しつつあり、絶滅が危惧される。

[分布と生態の概要] 北海道・東北地方と新潟県・福島県・栃木県・群馬県の高地に生息する。国外では、ユーラシア大陸の北寄りに広く分布する。スゲ類湿地に生息し、6月初め頃～9月初めまで成虫が見られる。交尾は朝5～6時から始まり3～4時間を要するが、午後の交尾は短く1時間弱である。雌は単独で10～15時頃の中に、水面のスゲの枯れ茎などに産卵する。

[特記事項] 三好信治が1907年に青森市で得た1雌（朝比奈, 1936）が日本初の発見と思われる。
(奈良岡弘治)

トンボ目 イトトンボ科**A**

和名 オオセスジイトトンボ

環境省：絶滅危惧Ⅰ類

学名 *Paracercion plagiosum* (Needham)

[形態的特徴] 体長：41.5～49.5mm。大型のイトトンボで、県内の普通のセスジイトトンボよりも二回りほど大きい。黄緑色の地に黒斑を有する。雄は成熟すると、全体が淡青色に変わる。胸部の肩の黒斑（前肩条）に黄緑色のすじが入っている。

[選定理由] つがる市屏風山地域にのみ分布し、2003年頃までは幾つかの沼に沢山見られたが、その後、急速に減少した。多産した大滝沼では2007・2008年に2頭の成虫を確認したに止まり、冷水沼でも2008年の調査では従来の1/6の成虫を確認したに過ぎない。他の沼では現在ほとんど見られない。さらなる減少が考えられ、絶滅が危惧される。

[分布と生態の概要] 利根川・多摩川・信濃川水系と青森・秋田・宮城県に生息が確認されているが、各地で減少傾向にあり、既に絶滅した産地もある。成虫は6～8月に見られる。交尾は午前中草原で多く、産卵は雌雄連結で水面のジュンサイの茎などの植物組織内に行う。

[特記事項] 個体数の著しい減少は、外来魚やウシガエルによる食害によると見られる。
(奈良岡弘治)

トンボ目 アオイトトンボ科**A**

和名 コバネアオイトトンボ

環境省：絶滅危惧Ⅰ類

学名 *Lestes japonicus* Selys

[形態的特徴] 体長：33～40.5mm。体の背面は光沢のある金属緑色、腹面は淡黄色を呈する。後頭部の後ろ側が黄白色であること、雄の尾部下附属器が小さいことなどで、他種と区別できる。

[選定理由] 1960年代までは県内各地に生息していたが、その後になくなり、現在、深浦町と六ヶ所村で生息が知られるに過ぎない（奈良岡, 2007）。これらの生息地でも著しく個体数が減少しており、絶滅が危惧される。

[分布と生態の概要] 本州・四国・九州に分布し、国外では朝鮮半島から中国に生息する。平地や丘陵地の池・沼・湿地に見られ、成虫は7月下旬～10月下旬に出現する。生殖行動は8月中旬～10月にかけて、午前と午後の二山型で、真昼には抑制される。本種の雄内移精時間は平均1分20秒位（46～156秒）で、イトトンボ類中で最も長く、これは気温と負の相関がある。交尾は20分位である。産卵は雌雄連結で、主に柔らかな水上の植物組織内に行う。

[特記事項] 生息地の環境変化は感じられないが、絶滅に近く、未知の減少要因が考えられる。
(奈良岡弘治)

トンボ目 カワトンボ科**A**

和名 アオハダトンボ

環境省：該当なし

学名 *Calopteryx japonica* Selys

[形態的特徴] 体長：50～55mm。雄の頭・胸部、および腹背が金属緑色で、腹部第9・10節腹面は白い。雄の翅は青藍色であるが、雌では淡褐色で乳白色の偽縁紋がある。

[選定理由] 1960年代までは数か所で発見されていたが、現在は県南の新井田川水系にのみ生息する。個体数が多いが、今後、河川環境の変化により絶滅する危険がある。

[分布と生態の概要] 本州と九州に分布する。国外では朝鮮半島から中国東北部、アムール川以東のシベリアなどに生息する。平地や丘陵地の水生植物の豊富な河川に見られる。成虫は6～9月に出現する。交尾時間は短く1分位である。雌は単独で水中の植物組織内に産卵する。水中に潜って産卵することも知られている。

[特記事項] 本県の各地に見られる同属のハグロトンボと似ているので、同定には注意を要する。ハグロトンボの翅は黒く、雄の腹端の腹面は白くならない。また、ハグロトンボでは、雌の翅に偽縁紋がないことにより区別できる。
(奈良岡弘治)

トンボ目 サナエトンボ科**A**

和名 ホンサナエ

環境省：該当なし

学名 *Gomphus postocularis* Selys

[形態的特徴] 体長：46～51.5mm。胴体が太短い中型のトンボ。黒色の地に黄色斑紋がある。翅胸全面に太い一対のZ字状黄紋を有する。腹部第7～9節はやや広がる。雄の尾部上附属器は下方に湾曲する。下附属器の先端上方に1個の小さな棘がある。

[選定理由] 1960年代までは県内各地に普通に見られたが、現在はほとんどの地域で絶滅し、下北地方の数か所と深浦町の一か所に生息するだけとなった(鈴樹・奈良岡, 2006)。下北では比較的に個体数が多いが、深浦町では数頭が見られるに過ぎず、絶滅状態である。

[分布と生態の概要] 日本特産種で、北海道・本州・四国・九州に分布し、佐渡島でも記録されている。平地や丘陵地、低山地の堰などに生息し、幼虫は泥底に潜っている。雌は交尾後に水辺の植物に止まって卵を放出し、それを水面に打って産卵する。

[特記事項] 水田の堰等に生息していたが、農業の近代化でほとんどの水田から姿を消した。残っている生息地でも水田の放棄、堰の改修が進んでおり、絶滅が危惧される。
(奈良岡弘治)

トンボ目 サナエトンボ科**A**

和名 ヒメサナエ

環境省：該当なし

学名 *Sinogomphus flavolimbatus* (Oguma)

[形態的特徴] 体長：40～44.5mm。小型のサナエトンボで、黒地に黄色斑を有する。腹部第3～7節に黄色の半環状斑がある。雄の尾部上附属器が白い。

[選定理由] 現在、外ヶ浜町(鈴樹・奈良岡, 1989)と深浦町(奈良岡, 1998)の2か所で生息が確認されているに過ぎない。両地域で個体数が減少しており、絶滅が危惧される。

[分布と生態の概要] 日本特産種で、本州・四国・九州に分布している。産地に限られており、特に東北地方ではまれである。主に山間の溪流や河川の上・中流域に生息する。幼虫は砂や石の下に潜って生活しており、掴むと硬直して擬死を装う。成虫は6月下旬～7月初めに羽化し、9月初めまで活動する夏型のサナエトンボである。未熟成虫は水辺を離れるが、成熟成虫は流れの浅瀬の日当りの石に静止して、雌の飛来を待つ。交尾は1時間位である。雌は交尾後、水際の植物や石に止まるか、ホバリングして卵を放出し、それを水面に打って産卵する。

[特記事項] 小型のサナエトンボ類は色彩・形態が類似しており、同定には注意を要する。

(奈良岡弘治)

トンボ目 サナエトンボ科**A**

和名 メガネサナエ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Stylurus oculatus* (Asahina)

【形態的特徴】 体長：59～63.5mm。黒色の地に黄斑を有する中型のトンボ。腹部第7～9節が膨らむ。ミヤマサナエと酷似するが、腹部第8節に大きな3個の黄斑があること、後肢腿節が前肢や中肢のものとはほぼ等しいことなどで区別できる。

【選定理由】 1960年代前半までは各地の平野部の河川で生息していたが、その後、発見されなくなった。1962年の青森市浪岡で採集されたのが最後である。現在、生息地は知られない。

【分布と生態の概要】 日本特産種で、東北地方から近畿地方に分布するが、局地的である。主に平地の湖、河川の下流域に生息する。成虫は7～9月に見られる。雄は岸辺の植物や石などに止まるか、水面上を長時間にわたってパトロールする。雌は単独で水辺の植物に止まって卵塊を放出し、それを飛びながら水面に打って産卵する。幼虫は細長く、特に腹部第9節が著しく長い。幼虫は水底の泥に潜って生活している。

【特記事項】 ミヤマサナエと混同する可能性があり、注意を要する。 (奈良岡弘治)

トンボ目 ヤンマ科**A**

和名 カトリヤンマ

環境省：該当なし

学名 *Gynacantha japonica* Bartenev

【形態的特徴】 体長：70～74mm。腹部の著しくくびれた中型の細身のヤンマである。頭部と胸部は茶褐色と緑色からなる。腹部は茶褐色の地に黄斑を有する。雄では第2腹節が鮮やかな水色となる。雌雄ともに尾部附属器が長く、第10腹節の3倍強である。

【選定理由】 1960年代前半までは各地に見られたが、その後減少し、1973年に三戸町で1雄（蹴揚ら, 1985）が記録されて以降、発見されていない。その後、明らかな確認がなく、絶滅の可能性もある。しかし、さらなる調査による裏づけが必要である。

【分布と生態の概要】 北海道南端から本州・四国・九州、および南西諸島を経て台湾まで分布する。成虫は8～10月に見られる。主に丘陵地や低山地の樹陰の多い池沼や湿地などに生息している。黄昏活動性が強く、日の出前後と日没後に活発に活動し、日中は暗がりの林の中などに休止している。雌は単独で湿った土や朽ち木に産卵する。幼虫越冬して翌年羽化する年一化型である。

【特記事項】 日中にほとんど活動しないために、発見されていないことも考えられる。

(奈良岡弘治)

トンボ目 ヤンマ科**A**

和名 ヤブヤンマ

環境省：該当なし

学名 *Polycanthagyna melanictera* (Selys)

【形態的特徴】 体長：80～87mm。大型のヤンマで、未熟のうちには黄色の地に黒色斑がある。成熟雄では複眼がコバルトブルーに輝き、黄色斑が緑や淡青色に変わる。雄の第10腹節背面に大きな黄色斑と1個の突起を有する。

【選定理由】 もともとあまり発見されないトンボであるが、最近では1986年に鱒ヶ沢町（奈良岡, 1986）、1992年に板柳町（工藤, 1996）、2000年に弘前市（山田・奈良岡, 2001）および2007年に深浦町（鈴樹, 2008）で各1頭が記録されたに過ぎない。

【分布と生態の概要】 本州・四国・九州・南西諸島に分布する。国外では中国中部に分布する。丘陵地や低山地の木陰のある池沼・水溜りに生息する。成虫は7～9月にかけて見られる。黄昏活動性が強く、早朝や夕方、あるいは曇っている時に飛翔することが多い。成熟すると、日中は藪の中の沼などで活動する。産卵は雌が単独で、水際の湿った土やコケの中に行う。

【特記事項】 黄昏活動性のために、発見されていないことが考えられる。 (奈良岡弘治)

トンボ目 エゾトンボ科**A**

和名 ハネビロエゾトンボ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Somatochlora clavata* Oguma

[形態的特徴] 体長：51～64mm。金属緑色の中型のトンボ。未熟成虫では翅胸側面に2本の黄色条があるが、成熟すると消滅する。腹部第4節以降は全体が黒く無斑である。翅の基部周辺が淡褐色となる。雌の産卵弁は長く、三角形状に斜め下方に突出する。

[選定理由] 1960年頃までは各地に見られたが、最近では1989年に東通村（市川, 2004）、2001年に深浦町（田村, 2003）、2006年につがる市（鈴樹, 2008）で各1頭が記録されたに過ぎない。

[分布と生態の概要] 日本特産種で、北海道・本州・四国・九州、および佐渡島などに分布する。産地は局限される。幼虫は丘陵地や低山地の湿地、湿原などの小流、および湧き水の水草の豊富な緩流に生息する。成虫は7～9月にかけて発見されている。未熟成虫は林間で生活するが、成熟雄は流水域をパトロールする。雌は単独で、木が覆いかぶさったような、薄暗い流れのよどみに産卵する。

[特記事項] 本属の種類はよく似ていて、同定が難しいので、注意を要する。（奈良岡弘治）

トンボ目 エゾトンボ科**A**

和名 キバネモリトンボ

環境省：該当なし

学名 *Somatochlora graeseri aureola* Oguma

[形態的特徴] 体長：51～57mm。金属緑色の中型のトンボで、本属の他種とほとんど変わらない。翅の基部が淡褐色で他種と区別できる。しかし、個体によっては翅の褐色斑が縮小する。雌の産卵弁は四角で短い。

[選定理由] 三八地方（岡田ら, 1966）と上北郡六ヶ所村（西田, 1997）にのみ発見されている。六ヶ所村では比較的個体数が多く生息しているが、三戸郡や八戸市では最近確認されていない。六ヶ所村でも環境変化により絶滅が危惧される。

[分布と生態の概要] 日本特産種で、北海道全域と青森・岩手・新潟県の一部に分布する。県内では三八・上北郡に発見される。寒冷な平地や丘陵地の薄暗い池沼や湿地に見られる。幼虫は緩やかな流れや湿地に生息する。成虫は6月下旬～9月下旬に出現する。雌は薄暗い沼岸の浅い水域などに打水産卵をする。

[特記事項] 同属のタカネトンボには翅の基部が黄褐色のものがあり、同定には注意を要する。（奈良岡弘治）

トンボ目 トンボ科**A**

和名 ハッチョウトンボ

環境省：該当なし

学名 *Nannophya pygmaea* Rambur

[形態的特徴] 体長：17～21.5mm。日本産トンボ類中、イトトンボを除いた最小のトンボで、世界でも最小の部類に属する。未熟成虫は橙黄色であるが、雄は成熟すると全体が赤化する。雌ではやや黒っぽくなる。翅の基部が淡褐色である。

[選定理由] 各地に生息するが、生息地がモウセンゴケ・ワタスゲ・トキソウなどの生育する浅い湿地に局限されており、湿地がなくなると絶滅する。最近、開拓や湿地の埋め立てなどにより、生息地、個体数ともに著しく減少している。

[分布と生態の概要] 本州・四国・九州に分布する。国外では中国からベトナム・マレーシアなど東洋の熱帯・亜熱帯地域に広範に生息する。平地から高地に産し、成虫は5月末～8月末まで見られる。交尾時間は10秒前後で、雌は直ちに単独打水産卵をする。雄が警護飛翔することもある。湿地と周辺で生活するが、まれに遠くまで移動し、休耕田で発生することがある。

[特記事項] 1962年まで岩木山南麓の百沢～岳間の湿原に多産したが、開拓により絶滅した。

（奈良岡弘治）

カメムシ目 コオイムシ科**A**

和名 タガメ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Lethocerus deyrolli* (Vuillefroy)

[形態的特徴] 国内最大の水生昆虫で体長48～65mm。体は褐色で、前脚が太く捕獲脚となり、後脚は遊泳脚となる。

[選定理由] 国内での分布は、局所的で個体数も少ない希少種である（環境省, 2006）。県内でも1978年平川市石郷、新郷村西越（阿部, 1980）以降の採集例はなく、絶滅が危惧される。

[分布と生態の概要] 本種の県内での産地はきわめて局限され、上記以外では1940年むつ市田名部（標本確認）、1947年黒石市牡丹平（成田, 1989a）、1953年八戸市（福田, 1984）、つがる市森田、黒石市（石村・佐藤, 1941）、1957年岩木川（西田, 1959）などの記録がある。本種は、水量が豊富で、水草の豊富な止水・静水域に生息する。

[生存に対する脅威と保存対策] 県内では従来津軽地方を中心に、水田地帯に普通に見られていたが（阿部, 1980）、水田地帯での農薬散布や湖沼の水質汚濁などにより激減したと思われる。

[特記事項] 灯火にも飛来することから（橋爪, 1994）、水域周辺部での灯火飛来個体にも注意が必要である。（山内智）

ハチ目 コマユバチ科**A**

和名 ウマノオバチ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Euurobracon yokohamae* Dalla Torre

[形態的特徴] 雌は体長15～24mmで、およそ150mmもある長い産卵管を持っている。体は黄赤褐色で、翅には外縁に広い褐色帯がある。

[選定理由] 南方系の希少な寄生蜂で、和田（1933）はブラキストン線を論じた中で昆虫関係の素材として第1に取り上げたが、1941年以降本県での記録が途絶えている。

[分布と生態の概要] 本州・四国・九州・台湾に分布し、青森県が分布の北限に当たる。県内では黒石市（鳴海, 1935）・青森市（Watanabe, 1937）・八戸市・黒石市・山形村（石村・佐藤, 1941）など古い記録がある。2001年に公表された森田、十腰内産の標本も1930年代産のものである（黒石市教育委員会, 2001）。生息地は寄主であるシロスジカミキリの食樹となるハンノキ・コナラ・クリなどが生育する低地の広葉樹林である。年1回発生と思われる、県内では5月頃に成虫が現れるが、詳しい生態は不明である。（山田雅輝）

ハチ目 コシブトハナバチ科**A**

和名 ルリモンハナバチ

環境省：該当なし

学名 *Thyreus decorus* (Smith)

[形態的特徴] 体長13～14mm、太型の体型で、体色は黒色に青色毛による斑紋がある。小楯板は大きく、後方に強く伸び、後胸や前伸腹節を覆い隠す。後脚に刷毛がなく、翅は外縁で褐色を帯びる。

[選定理由] 50年以上前の八戸市（石村・佐藤, 1941）と34年前の平賀町（山田, 1999）の2例しか本県での記録がなく、寄主のコシブトハナバチ類も減少している。

[分布と生態の概要] 南方系の種で、本州・四国・九州と東アジアに分布し、本県は分布上の北限に当たり、八戸市沢里と平賀町唐竹で採集されている。平地から低地にかけて生息し、成虫は8～10月に出現し、アザミなどの花から吸蜜する。Maeta *et al.* (1996) によるとシロスジコシブトハナバチ又はスジボソコシブトハナバチに労働寄生する。本県では前者は1例の記録しかなく、後者も発生事例は極めて少ない。生息地は人間の居住域や農業行為の影響を受けやすい場所が多いので保護対策は難しい。（山田雅輝）

チョウ目 セセリチョウ科**A**

和名 チャマダラセセリ

環境省：絶滅危惧Ⅰ類

学名 *Pyrgus maculatus maculatus* Bremer et Grey

- 【形態的特徴】** 暗褐色の地色に白点をちりばめた小型のセセリチョウで、他種との判別は容易。
- 【選定理由】** 本県をはじめ県外生息地でも激減あるいは絶滅している。筆者の調査では1990年代までは生息を確認できているが、個体数は極めて少なかった。
- 【分布と生態の概要】** 北海道東部・本州中部以北・四国に分布。本県では津軽・下北両半島を除く県内各地に広く分布し（室谷・阿部, 1962）、生息環境は山地草原や山間の草地に限られる。日向を好む性質があり、幼虫はバラ科のキジムシロ・キンミズヒキなどを食べる。
- 【特記事項】** 個体数は多くないが、1960年代までは毎年安定して発生していた。生息地の多くは牛馬飼料の採草地としての半人為的な草原で、定期的な草刈りで良好な環境が保持されていた。1960年代後半から農業の機械化の波は牛馬を必要としなくなり、採草が行われなくなった。草原は放置されるか開拓や開発によって、畑・果樹園・造林地に変貌した。開拓や開発を免れた小規模の草原も放置されてススキや灌木が繁茂し、もはや本種の生息環境として適さないものとなった。（三浦博）

チョウ目 セセリチョウ科**A**

和名 ホシチャバネセセリ

環境省：絶滅危惧Ⅰ類

学名 *Aeromachus inachus inachus* Ménériès

- 【形態的特徴】** 前翅長は11mm前後で本県産チョウ類の最小型種。
- 【選定理由】** 本県が北限で、1980年代後半まで確認されていたが、その後、記録が激減した。
- 【分布と生態の概要】** 本州と対馬のみに分布するが、各地域とも生息地は局所的。県内では太平洋側各地に偏った分布を示し、特に県東南地方に生息地が多い。生息地は局所的で個体数は多いものではなかったが、多産地も伝えられている（室谷, 1993）。例外的に津軽地方の大鰐町と深浦町十二湖に各1頭の記録があり因果関係に関心がもたれている。草原性であるが林縁・林間の草地や農道周辺に多く見られる。幼虫の食餌植物はオオアブラススキのみが確認されている。
- 【特記事項】** 1997～1999年まで、本種のかつての生息地周辺で調査を行った結果では、食餌植物であるオオアブラススキの繁茂する草原は著しく減少。北限の記録地であるむつ市品ノ木付近は宅地や牧草地の造成が進み、個体数の多かった田子地方は耕地整理で生息環境が消失。最後の記録地である新郷村各所では、道路の拡幅工事・駐車場造成などで草地はアスファルト化していた。（三浦博）

チョウ目 シロチョウ科**A**

和名 ヤマキチョウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Gonepteryx rhamni maxima* Butler

- 【形態的特徴】** 雄の翅表は鮮やかな濃黄色で雌は淡い黄白色。大型のシロチョウの仲間。
- 【選定理由】** 本県が北限の希少種で、1960年代まで県東南部で散在的に記録されていたが、それ以降の精力的な調査にもかかわらず、目撃・採集などの報告がなされていない。
- 【分布と生態の概要】** 本州の東北地方（本県・岩手県）と中部地方（長野・山梨県ほか）に限定された特異な分布域を示す。県内では東南部の特産種で、八戸市・十和田市・五戸町・階上町・田子町などで、すべて合わせても10数頭の記録のみ。成虫は7月上旬から羽化し成虫で越冬。県内の生態的知見は乏しいが、県外では、幼虫はクロウメモドキ科のクロツバラを食べる。
- 【特記事項】** 記録がある地域の調査では、クロツバラの自生は確認できなかった。この植物の生育環境は林縁から草原で、1960年代までは薪炭林としての雑木林や、牛馬飼料の採草地としての草原に食餌植物を含む環境が良好に保持されていた可能性がある。その後、草原はススキや灌木の侵入でブッシュ化し、林縁の道路沿いは拡幅工事や伐採が行われ生息環境が消失した可能性がある。（三浦博）

チョウ目 シジミチョウ科**A**

和名 クロシジミ

環境省：絶滅危惧Ⅰ類

学名 *Niphanda fusca* Bremer et Grey

[形態的特徴] 雄の表面は光沢のある青紫色、雌では一様に褐色のシジミチョウの仲間。

[選定理由] 本県が北限の希少種。1960年代まで県東南部に散在的に記録されていたが、それ以降、目撃・採集等の報告がない。他県でもほとんどの生息地で絶滅あるいは激減傾向にある。

[分布と生態の概要] 本州・四国・九州と国内の分布は広いが、生息地は局所的。県内では1963年、田子町で初記録以来、八戸市・三戸町・新郷村などで生息地が発見されたが1967年以降、記録が途絶えた。7月下旬～8月上旬の年1回の発生。他県の観察例では若齢幼虫はアブラムシ・キジラミ類の分泌物を吸汁し、その後、クロオオアリの巢中でアリから口移しで餌をもらって育つ。

[特記事項] 生息環境は、コナラ・クリなどの混じる雑木林の林縁やススキの混じる草原で、人手の関わりを持った地域。伐採や草地の刈り払いで樹勢の良い若木が補充され、幼虫の餌となるアブラムシやキジラミが多く発生し、生息の好条件が整っていたものと考えられる。その後、雑木林の荒廃、草地のブッシュ化・道路拡幅工事・開拓が進み、生息環境が悪化したものと考えられる。
(三浦博)**チョウ目 タテハチョウ科****A**

和名 オオウラギンヒョウモン

環境省：絶滅危惧Ⅰ類

学名 *Fabriciana nerippe* C. Felder et R. Felder

[形態的特徴] 前翅長は雄35mm、雌40mm前後で、雌はヒョウモンチョウ類で最も大型である。

[選定理由] 本県が北限の生息地となる。津軽半島を除く県内各地に散在的に記録されていたが、近年の報告がない。全国的に激減、多くの分布域で絶滅した。

[分布と生態の概要] 本州・四国・九州に分布し、東北地方では分布は広いが産地は局地的。本県でも広域に記録され、時としておびただしい個体数が発生することがある(室谷・阿部, 1962)。成虫は7月下旬から出現し、年1回の発生。生息地は平地から低山地までの日当たりの良い草原で、幼虫の食草であるスマレが多いことと、アザミ類など豊富な成虫の吸蜜源植物が必要とされる。

[特記事項] 広域な生息分布域を持っていたにも関わらず、1970年以降生息が確認されなくなり、1985年8月24日の田子町竜ヶ森の1雌(一戸, 1991)が最後の報告となった。本種の好む草原は牛馬の飼料用採草地としてのシバ草原が主なもので、農業近代化で牛馬を必要としなくなったことから、そのような採草場は、灌木の生い茂るススキ原へと変貌し、生息環境が消失した。(三浦博)

チョウ目 ジャノメチョウ科**A**

和名 ツマジロウラジャノメ

環境省：該当なし

学名 *Lasiommata deidamia interrpta* (Fruhstorfer)

[形態的特徴] 眼状紋が前翅に1個、後翅に2個あり、前翅にはさらに白色紋が2個連なる。

[選定理由] 本県が本州亜種の北限。生息環境が凝灰岩などで構成された湿潤な断崖で、林道改修などで生息地が破壊され、ごく一部に確認されているにすぎない。個体数も著しく減少している。

[分布と生態の概要] 北海道・本州・四国に分布し、本州では東北地方から中部地方に分布。県内では各所に確認されているが、いずれでも局地的である。6月中・下旬と8月中・下旬の年2回の発生で、幼虫の食餌植物はヒメノガリヤス・ヌカボなどのイネ科植物。

[特記事項] 青森市周辺では1960年代前半まで、三戸・八戸地方では1960年代後半まで生息が確認されていたが、以降の報告は激減した。岩木山・白神山地にはいくつかの産地が確認されていたが、近年はまれ。発生地の条件は、覆いかぶさる崖、幼虫の食餌植物や成虫の吸蜜源植物の存在、1日のうち陽光が短時間あたるなど、極めてデリケートな要素が必要。近年は、露岩地のコンクリート吹付・崩落防止金網・種子吹付の工法が取られたことから、本種の生息環境は根底から破壊された。
(三浦博)

和名 ミツモンケンモン

環境省：絶滅危惧Ⅰ類

学名 *Cymatophoropsis trimaculata* (Bremer)

[形態的特徴] 開張30mm内外。前翅は黒褐色で円形の3対の黄白色紋を持つ。

[選定理由] 国内での分布は青森県の他に岩手県、栃木県、群馬県、長野県から知られているが、極めて限られ希種である。近年の記録はほとんど無い（環境省, 2006；岩手県, 2001）。県内では1991年五戸町倉石（岸田, 1995）での記録がある。

[分布と生態の概要] 国内での産地は本州中北部から記録されている。県内では上記の記録以外ほとんど知られておらず、詳しい分布は不明である。その産地のほとんどは果樹園や二次林等で本種は里山に生息すると思われる（環境省, 2006）。最近、本種の生活史が解明され、食樹はクロツバラであることが確認された（高橋, 1999）。

[生存に対する脅威と保存対策] 生息地での食草クロツバラの衰退が本種の脅威となる。

（山内智）

和名 ノシメコヤガ

環境省：絶滅危惧Ⅰ類

学名 *Sinocharis korbae* Püngeler

[形態的特徴] 開張40mm内外。翅は白色で、前翅の翅底部と外縁部、後翅翅頂に褐色を帯びる。

[選定理由] 本種は、国内では青森県（板柳町、黒石市）と岩手県（野田村、盛岡市）の数か所からの記録しかなく、1975年黒石市境松（佐藤・葛西, 1978a）以降の国内での記録はほとんど知られていない。確認された生息地、個体数とも少なく、絶滅が危惧される（環境省, 2006；岩手県, 2001）。

[分布と生態の概要] 国内での分布は本州北部の青森県と岩手県の2県である（環境省, 2006）。県内では、上記の他、1930年板柳町（Matsumura, 1931）、青森県（渡邊, 1934）、1952年黒石市砂森（斎藤・北畠, 1966）の記録がある。国内での食草などの詳しい生態は不明である。

[生存に対する脅威と保存対策] 本種の国内での生態は不明であるが、確認された産地などから考え、深山ではなく里や里山に生息すると思われる。このことから環境変化が衰退要因と思われる。本種の再発見と生態解明が保護対策を立てる上からも急務である。

[特記事項] ロシアではダリアに幼虫が止まっていた記録があるが、食べていた記録ではない（環境省, 2006；岩手県, 2001）。

（山内智）

トンボ目 イトトンボ科**B**

和名 キイトトンボ

環境省：該当なし

学名 *Ceriagrion melanurum* Selys

[形態的特徴] 体長：36～44.5mm。頭と胸部は淡緑色、腹部が黄色いイトトンボ。雌では腹部が淡緑色の個体もある。雄の第7～10腹節背面に黒色斑を有する。

[選定理由] 1960年代までは各地の水田・池・沼等に普通に見られたが、現在は県内の所々に生息するに過ぎない。ほとんどの生息地で個体数が減少している。

[分布と生態の概要] 本州・四国・九州、および佐渡島・対馬・屋久島などの島嶼（とうしょ）に分布し、外国では朝鮮半島から中国中部にかけて生息する。

成虫は6月下旬～9月初めまで、平地の池沼・湿地等に見られる。雄は約10cmを直線状に飛翔して瞬間停止し、角度を変えて、また同様の飛翔と停止を繰り返すという、独特の飛び方をする。雌雄連結で水中の植物組織内に産卵する。

[特記事項] 県外では普通に見られる。本県では、水田や畑での農薬の使用、水田の近代化による乾田化などが、本種の生存に強く影響し、減少したと思われる。（奈良岡弘治）

トンボ目 サナエトンボ科**B**

和名 ミヤマサナエ

環境省：該当なし

学名 *Anisogomphus maacki* (Selys)

[形態的特徴] 体長：52.5～55mm。黒地に黄色斑のある中型のトンボ。翅胸前面に1対の黄色L字紋がある。後肢の腿節が長く、中肢腿節の約2倍である。雄の腹部第7～9節が広まり、8節の背に1対の黄色紋がある。雄の尾部付属器は短く、上器の先端に針状突起を有する。

[選定理由] 1960年代までは各地に普通に見られたが、その後、個体数・生息地ともに減少した。現在、八戸市・上北郡・五所川原市・黒石市などの数か所で発見されているに過ぎない。

[分布と生態の概要] 本州・四国・九州に分布し、外国では中国・アムール・イルクーツクに生息する。流れの緩やかな河川の中・下流に生息する。成虫は7～9月に見られる。羽化後、産地に移動し、成熟してから平野部の河川に帰ってくる。産卵は雌が単独で、川岸に止まって卵を放出し、それを付けて飛び立ち、流れに打水して行う。

[特記事項] 関東や関西地方では普通に見られる。県内では農薬の使用や水田の近代化に伴う、河川の改修などで減少したと考えられる。（奈良岡弘治）

トンボ目 ヤンマ科**B**

和名 コシボソヤンマ

環境省：該当なし

学名 *Boyeria maclachlani* (Selys)

[形態的特徴] 体長：78～82.5mm。茶褐色の地に黄色斑を有する大型のヤンマ。翅胸全面に黄色の八字状紋があるが、雌では消失することがある。腹部第3節は著しくくびれる。翅の先端に淡褐色斑がある。

[選定理由] 1960年代までは各地に見られたが、現在は青森市・むつ市・五所川原市・外ヶ浜町・東通村などの数か所から知られるに過ぎない。生息地・個体数ともに減少している。

[分布と生態の概要] 日本特産種で、本州・四国・九州に分布する。平地や低山地の木陰の多い清流に産する。成虫は7月中旬～9月末まで見られる。早朝と夕方以降に飛翔する黄昏飛翔性で、日中はあまり活動せず、暗がりに休止している。しかし、涼しくなると日中でも飛び回るようになる。雌は単独で、水際の湿った泥や朽ち木の組織に産卵する。幼虫は挺水植物の中におり、掴むと肢をちぢめ、擬死を装う。

[特記事項] 黄昏飛翔性であるために発見されにくいことが考えられる。（奈良岡弘治）

トンボ目 ヤンマ科**B**

和名 サラサヤンマ

環境省：該当なし

学名 *Oligoaeschna pryeri* (Martin)

[形態的特徴] 体長：55～63mm。黒地に黄色斑のある小型のヤンマである。雄では腹部が第5節から細くなり、成熟すると黄色斑が淡緑色となる。雌では翅の基部と先端付近に淡褐色斑をもつ個体がある。

[選定理由] 県内の所々に産し、現在、平川市・中泊町・鯉ヶ沢町・深浦町・外ヶ浜町・東通村などで確認されているが、中泊町と東通村を除いては個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 日本特産種で、北海道・本州・四国・九州、および対馬・屋久島などの島しょにも分布するが、産地はかなり限定される。成虫は5月下旬～7月初めにかけて見られる。丘陵地や低山地の湿地林に生息し、湿地の空間、小径上などをホバリングしながら飛翔する。産卵は雌が単独で、湿った土やコケ、および朽ち木に行く。幼虫は落葉などに覆われた、湿った地面や浅い滞水に住んでいる。

[特記事項] 全国的に生息地と個体数が激減している種類である。 (奈良岡弘治)

トンボ目 トンボ科**B**

和名 マイコアカネ

環境省：該当なし

学名 *Sympetrum kunckeli* (Selys)

[形態的特徴] 体長：30～36.5mm。顔面が乳白色の小型なアカトンボ。胸の側面に4本の細かい黒条斑がある。未熟成虫は橙色であるが、雄は成熟すると赤化し、雌では茶褐色または赤くなる。雌の翅の基部が淡褐色となるものがあるが、これは無斑に近いものから、ほぼ全体が茶褐色のものまで個体変異が大きい。

[選定理由] 1960年代までは県内至る所に見られたが、現在はほとんどの地域で絶滅し、上北郡と下北郡、および津軽地方の一部に生息するだけである。個体数が少なくなっており、津軽地方ではほぼ絶滅状態である。

[分布と生態の概要] 北海道・本州・四国・九州に分布し、外国では・朝鮮・中国に産する。平地・丘陵地の池・沼・湿地に生息する。産地は比較的限られる。成虫は7月中旬～10月末まで見られる。雌雄連結で打泥産卵をする。

[特記事項] 本種が著しく減少しているのは、本種が環境変化に敏感であることを思わせる。 (奈良岡弘治)

トンボ目 トンボ科**B**

和名 オオキトンボ

環境省：絶滅危惧Ⅰ類

学名 *Sympetrum uniforme* Selys

[形態的特徴] 体長：43.5～52mm。全体が橙黄色で無斑の大型のアカトンボ。成熟してもやや赤みを帯びる程度で、くすんだ黄褐色となる。翅全体も一様に淡褐色を呈する。

[選定理由] 現在、三沢市・六ヶ所村・五所川原市・つがる市にのみ知られる。小川原湖周辺と六ヶ所村の湖沼地帯では多かったが、最近では減少している。その他の生息地では個体数が極めて少なく、数頭が見られるだけである。

[分布と生態の概要] 本州・四国・九州に分布し、外国では・朝鮮半島・中国東北部に生息する。産地はかなり局地的である。平地や丘陵地のヨシなどの繁茂する池・沼に生息する。成虫は8～11月まで見られる。産卵は雌雄連結で行い、連続打水、または打泥産卵である。まれに雌単独産卵も見られる。

[特記事項] 全国で生息地・個体数ともに減少し、現在は青森県など数か所で生息が確認されているに過ぎない。 (奈良岡弘治)

カマキリ目 カマキリ科**B**

和名 ウスバカマキリ

環境省：該当なし

学名 *Mantis religiosa* (Linnaeus)

【形態的特徴】 体長50～65mm程度の他種より明らかに淡色な中型カマキリで、前脚基節の基部内面に長円形の黒色の斑紋があり、腿節内面には黒色の斑紋を欠くことから区別できる。

【選定理由】 現存する生息地は日本海側砂丘上の低茎草原に限られ、かつての主要生息環境であったと考えられる平地・低山地の草地や旧採草地からは全く確認できない。近年確認された生息ポイントは、多くが資材置場・クロマツ植林地・大豆畑などとして改変されている。山形県でも準絶滅危惧種とされている。

【分布と生態の概要】 戦前の古い記録としてShiraki (1911) の青森（県か市か不明）、石村・佐藤 (1941) の森田村・八戸、黒石市教育委員会 (2001) の森田村がある。1970年頃、市田忠夫が青森市造道の牧草地で、工藤忠が五所川原市狼野長根公園の草地で、それぞれ多数目撃している。戦後の文献上の確認例としては市田 (1986, 2000) の五所川原市 (旧市浦村) 相内、奈良岡 (2004) のつがる市 (旧木造町) 平滝沼、奈良岡 (2009) のつがる市 (旧車力村) 富蒔しかない。

(市田忠夫)

カメムシ目 タイコウチ科**B**

和名 タイコウチ

環境省：該当なし

学名 *Laccotrephes japonensis* Scott

【形態的特徴】 タガメに次いで大型の黒褐色の水生カメムシで、体長30～38mm、体幅約10mmで平べったく、体長とほぼ等しい呼吸管を尾端に備える。太く発達した前脚で水中の小動物を捕らえる。

【選定理由】 大型種であるものの水深の浅い池を好み、かつては水苗代等に生息していたものと想像される。1970年代初頭に板柳町の水田地帯に多産していたことを工藤忠が確認しているが、1980年代には全く見られなくなった。

【分布と生態の概要】 石村・佐藤 (1941) では各地に産するとされているが、戦前の標本が確認された例は、市田 (1989) による八戸市産、黒石市教育委員会 (2001) による森田村産のみである。近年では屏風山砂丘地の湖沼群での目撃例が聞かれていたものの、正式に記録されることはなく、2008年になって大高らにより平滝沼・大滝沼・大沢辺沼からの確認記録が公表された。山形県でも準絶滅危惧種として扱われている。

(市田忠夫)

カメムシ目 マキバサシガメ科**B**

和名 タイワンナガマキバサシガメ

環境省：該当なし

学名 *Nabis sauteri* (Poppius)

【形態的特徴】 体長7～10mmのやや細長いカメムシで、前翅が腹部の2/3までしか達しない短翅種であるが、まれに長翅型も出現する。近縁種よりやや濃色である。

【選定理由】 六ヶ所村尾駮沼は本州唯一の本種の既知産地であるのみならず、複数個体が確認された生息地としては国内唯一の地点である。

【分布と生態の概要】 日本の既知産地は北海道別海町 (Kerzhner, 1979) ・尾駮沼 (市田, 1998a) のみ。国外の産地も中国天津市北塘 (任, 1998)、台湾 (台南市) 安平・北朝鮮南浦・サハリン島南東部スタロドブスコエ・色丹島 (以上 Kerzhner, 1981) など数地点に過ぎず、いずれも都市近郊の大河川河口域または海岸に面した低湿地である。尾駮沼では沼縁の最も開放水面に近い場所に局所的に発達するマツバイ型の植物群落に見られる。捕食性の種で生息密度が高いものの、環境に対する許容度は極端に低いといえる。六ヶ所村の湖沼群は極めて貴重な塩性湿原であり、動植物のいずれの分類群においても希少種を莫大に有し、早急な調査と保全が必要である。

(市田忠夫)

和名 キバネツノトンボ

環境省：該当なし

学名 *Ascalaphus ramburi* MacLachlan

[形態的特徴] 体長20mm内外、前翅は透明で基部が黄色、後翅は灰褐色に黄色の斑紋がある。

[選定理由] 国内の産地は局所的であり（平嶋・森本, 2008）、大変採集例の少ない種類である。

[分布と生態の概要] 日本固有種で、本州と九州に分布している。県内では、1935年に八戸市で採集された（福田, 1984）。本種は草地に生息していて、成虫は日中飛翔し、幼虫は草むらの根元などに潜んでいる（岩手県, 2001）。

[生存に対する脅威と保存対策] 本種の生息地である草むらが、開墾等により消滅することが脅威となっている（岩手県, 2001）。今後保護対策を取るためにも、詳しい本種の分布や生態などの調査が望まれる。

(山内智)

コウチュウ目 オサムシ科

和名 マークオサムシ

環境省：絶滅危惧II類

学名 *Carabus maacki aquatilis* Bates

[形態的特徴] 体長30mm内外。体は全体が黒色で、上翅に各3条の強い隆条がある。

[選定理由] 本種は日本固有亜種で、分布は局所的である（環境省, 2006）。どこの生息地でも自然環境の劣化等で、生息地、個体数とも減少している。

[分布と生態の概要] 本種は東北地方と栃木県、新潟県の湿地帯などで記録されている（環境省, 2006）。県内では岩木川沿い（斎藤, 1956；山谷, 1939b, 1989；下山ら, 1982；阿部, 1970；阿部, 1980；富岡, 1982；山谷・草刈, 1982；樋口・丸屋, 1995；工藤, 1995）、下北半島（鈴木ら, 1951；外崎, 1952；黒沢, 1982）、八戸市（石村・佐藤, 1941；山谷・草刈, 1982）、黒石市青荷（中根, 1955）、五戸町中市（下山, 1978a）、六戸町（福田, 1984）、上北町小川原（山谷・草刈, 1982a）から記録されている（青森県, 2000）。岩木川沿いと三沢市仏沼（ダム水源環境整備センター, 1997；山内・宮, 2008）以外の産地の記録は近年無く、絶滅に瀕している。

[生存に対する脅威と保存対策] 本種は、低湿地帯に生息し、生息環境が悪化し減少している。また、岩木川流域は好採集地として広く知られており、県内外の採集者による岩木川沿いでの数十頭に及ぶ記録もあり、乱獲も大きな脅威となっている。

(山内智)

コウチュウ目 オサムシ科

和名 シモキタメクラチビゴミムシ

環境省：該当なし

学名 *Oroblemus sparsepilifer* S. Uéno

[形態的特徴] 体長3.5mm内外。複眼と後翅は退化しており、体は全体に暗赤褐色である。

[選定理由] 本種は、地中を生息場所に行っている。複眼、後翅は退化し痕跡的に認められるだけで、体形も小型で肢も非常に短い。そのため広範囲での移動ができず、特定の地域に生息が限定される。地上での環境の変化に大変敏感である。本種は、むつ市北国山で1974年に採集された1雌で新種記載（Uéno, 1975）された。その他に1985年1雌（森田・山内, 1986；山内, 1989）の記録があるが、その後確認されていない。むつ市北国山固有種である。近年林道の拡張工事で生息地の沢の一部が深く削られ、生息地の環境が大きく変化したことから、本種の絶滅が危惧される。

[分布と生態の概要] 本種は、むつ市北国山からのみ知られている。隣接した沢にも生息している可能性があるが、本属の分布範囲は大変狭いと考えられる。生態については不明である。

[生存に対する脅威と保存対策] 生息地の沢が林道拡張によって削られたことで、土壌の保水性低下、乾燥化など、生息環境の悪化が生存の脅威となっている。

[特記事項] 本種の雄の採集例はない。

(山内智)

コウチュウ目 オサムシ科**B**

和名 イワキメクラチビゴミムシ

環境省：該当なし

学名 *Oroblemus caecus* S. Uéno et A. Yoshida

[形態的特徴] 体長3mm内外。複眼と後翅は退化している。体は細長く短い細毛で覆われている。

[選定理由] 本種は地中に生息する希少な種類である。小型で、複眼と後翅が退化しており、広範囲での移動が困難である。本種は、1955年に岩木山で採集され新種記載 (Uéno & Yoshida, 1966) されたもので、岩木山以外では知られていない。岩木山固有種である。岩木山は津軽国定公園に指定されているが、登山者の増加等で生息地である錫杖清水から山頂にかけての裸地化、さらに登山道沿いが踏み固められ、環境が悪化している。近年は採集記録がなく絶滅が危惧される。

[分布と生態の概要] 本種は岩木山からのみ知られている。詳しい生態については不明である。

[生存に対する脅威と保存対策] 登山者の増加等による生息地の裸地化が進んでおり、県をはじめ関係機関で山頂付近の裸地化防止対策、登山道以外の立入禁止などを行っている。生息地の土壌環境の悪化が、生存の脅威となる。また、採集者も頻繁に入っており本種の採集は慎むべきである。
(山内智)**コウチュウ目 ハンミョウ科****B**

和名 カワラハンミョウ

環境省：絶滅危惧II類

学名 *Chaetodera laetescrpta circumscriptula* (W. Horn)

[形態的特徴] 体長15mm内外。上翅は銅緑色で白色の斑紋が外縁に沿って発達している。

[選定理由] 本種は、海岸や河原の砂原に分布するが、近年レクリエーションなどで人だけでなく車両まで砂原に踏み込み、生息環境が悪化し、激減している (大野, 2000; 環境省, 2006)。

[分布と生態の概要] 国内での分布は北海道、本州、四国、九州である。県内では、八戸市湊 (福田, 1969a)、三沢市、おいらせ町 (成田, 1988) など太平洋側の砂浜のある海岸に記録が集中している。

本種が生息する環境要因として、砂礫の大きさ、砂地の安定度、特に幼虫は草むらの空地に巣穴を作って生活していることから、植物の定着度等が重要である (大野, 2000b; 環境省, 2006)。

[生存に対する脅威と保存対策] 本種の生息地である砂原に、人や車両が入り込んで踏み荒らされることで、幼虫が住みかを失うことになる。特に車両の立ち入りの自粛が求められる。

[特記事項] 今後、日本海側に発達している砂原から確認される可能性がある。
(山内智)**コウチュウ目 ハンミョウ科****B**

和名 ヒメハンミョウ海浜型

環境省：該当なし

学名 *Cylindera elisae* (Motschulsky)

[形態的特徴] 体長は雄10.5mm内外、雌12mm内外。内陸部に普通に見られる内陸型 (雄10mm内外、雌11mm内外) とは、大型で横に広い体型を有し、上翅斑紋の幅が広いことで区別できる。

[選定理由] 海浜型は海岸の砂丘地帯に注ぐ河口部のみに生息し、幼虫は河川周辺の粘土質土壌の裸地にしか見られない。このような環境は非常に不安定で、護岸工事や河川改修によって容易に減少・絶滅するおそれがある。

[分布と生態の概要] 1980年以降、県内では日本海側の木造町 (現つがる市) ・陸奥湾内の野辺地町・太平洋側の東通村から百石町 (現おいらせ町) の海岸部で記録されている (成田, 1988; 成田, 1989b; 櫛田, 1991)。全国的にも産地が少なく、海岸部であっても内陸型しか見られない地域が多い。幼虫で越冬し、成虫は6~9月に見られる。

[特記事項] 産地内では内陸型と混棲する場合も多く、両者の中間型も見られるが、連続的ではない。海浜型と内陸型の関係は、今後明らかにしなければならない課題である。
(櫛田俊明)

ハチ目 アナバチ科**B**

和名 ルリジガバチ

環境省：該当なし

学名 *Chalybion japonicum* (Gribodo)

[形態的特徴] 体長18～20mmで腹柄のある細長な体型で、体色は黒色に瑠璃色光沢がある美しい種である。腹柄は1節からなり、前脚付節に剛毛列がない。

[選定理由] 50年前にはそれほど珍しい種ではなかったが、現在は非常に少なくなっていて、その落差が大きい。営巣場所や餌となるクモ類が減少するなど生息環境が悪化している。

[分布と生態の概要] 南方系の種で本県が分布上の北限である。八戸市・弘前市・黒石市・森田・十和田山地・板柳などからの記録があるが、いずれも古いもので、近年では青森市と小泊で認められている。成虫は7～8月に活動し、山本(1959)によるとアシや竹の筒、建物の隙間などに営巣し、コガネグモ科・ヒメグモ科などのクモ類を狩って幼虫の餌とする。かやぶき屋根などの家屋内に侵入して薄暗い所でも巣を作るので、家蜂の仲間に類別されることもある。

[生存に対する脅威と保存対策] 人間の生活圏近くに生息するので人為的な影響を受けやすい。主要な営巣場所であるかやぶき屋根の減少や、餌となるクモ類の密度低下は脅威である。(山田雅輝)

チョウ目 マダラガ科**B**

和名 ベニモンマダラ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Zygaena nippona nippona* Butler

[形態的特徴] 開長30mm内外。前翅は黒地に紅色の斑紋で金属光沢が強い、美麗種である。

[選定理由] 本種の分布は、限られた地域で局地的である(大野, 1980; 岩手県, 2001)。

[分布と生態の概要] 本種は、本州(中部以北から東北北部)に分布し、北海道(道南)は別亜種になっている。県内では、八戸市鮫(木俣, 1984)、八戸市大久保・新井田(富岡, 1974)、八戸市南郷(青森県生物学会八戸支部, 1989)、青森市朝日山(佐藤・葛西, 1975)、青森市稲山(三橋, 1979)、青森市合子沢(国際芸術センター青森, 2004)、六ヶ所村尾駈、大間町高岩(菊池, 1983)、岩木山(黒石市教育委員会, 2001)、黒石市六郷(石村・佐藤, 1941)などから記録されている。

昼飛性で草上を低く飛び、花に集まる(大野, 1980)。食草として、クサフジ(環境省, 2006)、オオバクサフジ、ツルフジバカマなども記録されている(岩手県, 2001)。

[生存に対する脅威と保存対策] クサフジなどの自生する日当たりのよい草原は、開発等で年々少なくなってきた。草地の維持が必要である。(山内智)

チョウ目 セセリチョウ科**B**

和名 ギンイチモンジセセリ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Leptalina unicolor* (Bremer et Grey)

[形態的特徴] 前翅長は15mm前後。翅表は黒いが、後翅裏面には銀色の一文字が入っている。

[選定理由] 草丈の低い草原に生息し、近年このような環境が急減し本種も著しく減少した。

[分布と生態の概要] 北海道から九州まで分布するが一般的に局所的。県内でも広く分布するが生息地は限られ、食餌植物のススキや、シバなどが生えた日当たりの良い草地である。成虫は5月下旬～6月下旬に出現、まれに8月中旬頃に2化が発生し、地表すれすれに低く飛翔する。

[生存に対する脅威と保存対策] 1960年代まで牛馬の飼料用の草刈場とされた里山は、適度な草丈の草原が保たれ本種が多産した。同じ草原性のオオルリシジミ・オオウラギンヒョウモンが生息していたころは、生息地の草原を歩くと足もとから湧き出るように沢山の個体が飛び立った。時代の趨勢は牛馬から機械に置き変わり、草刈場は耕地整理で畑地・果樹園に転用され、牧草地として残っても外来種の種子をまく単調な草原に造成され、本種の生息には不適となった。現在は畑地の縁や放置されても条件の良い荒地などに細々と生息している。このような生態系を念頭においた環境創出が必要である。(室谷洋司)

チョウ目 アゲハチョウ科**B**

和名 ヒメギフチョウ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Luehdorfia puziloi inexpecta* Sheljuzhko

[形態的特徴] 黄と黒のだんだら模様で、カタクリなどに吸蜜する姿から春の女神と愛称される。

[選定理由] 本県が本州亜種の北限地。県内では生息地は少なくなかったが、いずれも局所的で生息個体数とともに著しく減少傾向。なかには見られなくなった地域も少なくない。

[分布と生態の概要] 青森市・黒石市・平川市・大鰐町・三戸町・田子町と白神山地周辺部の西目屋村・深浦町（旧岩崎村）など広い分布域を示すが、いずれの産地も離散的で狭く限られている。年1回4月中旬～5月上旬に発生。卵は幼虫の食餌植物であるウマノズクサ科のウスバサイシン・オクエゾサイシンに産み付けられ、幼虫期を経て6月下旬頃には蛹となり、そのまま越冬する。

[生存に対する脅威と保存対策] 本種の生息環境は、広範囲にわたったミズナラなどが主体の二次林で、林床には適度な湿り気を保持し食餌植物や吸蜜源植物の群落が必要とされるが、1990年代以降、スギ植林が進み、その高木化で生息不適地となってしまった。保存には、行政などが指定した自然公園内に生息している場合、従来の里山的環境を維持することによって可能と思われる。
(室谷洋司)**チョウ目 シロチョウ科****B**

和名 スジボソヤマキチョウ

環境省：該当なし

学名 *Gonepteryx aspasia nipponica* Bollow

[形態的特徴] シロチョウ科の大型種で、雄の翅表は濃黄色、雌は黄白色。全体がAランクのヤマキチョウに似るが、翅脈が細いことや行動面で飛び方が緩やかなことなどから区別できる。

[選定理由] 本県が分布の北限である。幼虫はクロウメモドキの葉を食べるが、近年この植物を含む明るい雑木林や林縁・湿原環境が急減し、本種も著しく減少した。

[分布と生態の概要] 本州・四国に分布する。1990年代までは、県内の山地に広く分布し個体数も多かった。成虫は6月下旬～7月に出現するが盛夏に一時休眠し、秋にふたたび現れ成虫のまま越冬する。翌春、姿を現した母チョウは食樹の新葉などに産卵し、孵化した幼虫は6月までに蛹化する。

[生存に対する脅威と保存対策] 本種が普通に見られたのは各所に生息環境が整っていた年代までで、それが失われたことから多くの産地が消滅しつつある。近縁のヤマキチョウが1960年代以降、記録がなく、本種の生存も心配される。要因は里山・湿地が管理されなくなり林縁も放置、明るい空間を好むクロウメモドキが衰退したことで、このような環境回復が保全面で必要である。
(室谷洋司)**チョウ目 シジミチョウ科****B**

和名 カバイロシジミ

環境省：該当なし

学名 *Glaucopsyche lycormas lycormas* Butler

[形態的特徴] 雄の翅表は青藍色で外縁部に細い黒帯、雌は暗褐色で基部に青藍色の色彩がある。

[選定理由] 本県の津軽半島と下北半島が分布の南限。海に面した崖や急斜面が生息地で、これらは脆弱性の大きい環境である。近年、観光開発などで生息環境が狭小化し、減少が著しい。

[分布と生態の概要] 国内では北海道と本県に分布。県内では下北半島の大間町から佐井村牛滝にかけてと、津軽半島では外ヶ浜町（襲月・竜飛）から中泊町にかけての、主に海に面した急峻な崖地や急斜面のヒロハノクサフジ群落にのみ発生する。発生は5月下旬～8月下旬。

[特記事項] 上記の2生息域は、それぞれ日本海と陸奥湾に面した海岸段丘の崖地から急斜面、海浜の草地で、海浜気候により幼虫が食べるヒロハノクサフジや成虫の吸蜜源植物などの植生が維持されていた。近年、道路整備のため法面へのコンクリート吹付などが行われ、生息地の狭小化が進んでいる。この地域の海浜性植物群落そのものが重要な観光資源であり、これらの保存・復元が本種だけでなく生物全体の多様性維持につながり、早期にこのような施策の実行が望まれる。
(三浦博)

チョウ目 シジミチョウ科**B**

和名 オオゴマシジミ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Maculinea arionides takamukui* (Matsumura)

[形態的特徴] 前翅長は20～23mm前後。翅表は青藍色、裏面は灰白色でいずれにも黒斑がある。

[選定理由] 県内分布は深山溪谷の一部に限られ、近年生息環境悪化と個体数の減少が著しい。

[分布と生態の概要] 十和田湖から八甲田山系の城ヶ倉・折紙山などの溪谷地、白神山地の一部が生息地として知られ、急峻な崩壊地の植生内に生息する。年1回7月下旬～8月上旬の発生で、孵化した幼虫は4令までシソ科のクロバナヒキオコシの花穂を食べる。その後、クシケアリ類に運ばれアリの巣穴に入り、アリの幼虫を食べて育つ。アリは本種の幼虫の蜜線から出る甘露をなめ、その幼虫はチョウの幼虫に捕食される。幼虫期に植物食から肉食に転ずる特異な生態を持つ。

[生存に対する脅威と保存対策] 一般に生息地が深山のため生息環境に影響がないと思われるが、幼虫の食餌植物となるクロバナヒキオコシ群落は断崖の崩壊地に形成され、自然災害や伐採・林道建設などでこの群落が失われる脆弱性をもつ。これにより本種は生息できなくなり、白神山地では多くの生息地が失われた。このような繊細な生態系への配慮を踏まえた保全策が望まれる。

(室谷洋司)

チョウ目 シジミチョウ科**B**

和名 キタアカシジミ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Japonica onoi* Murayama

[形態的特徴] 中型のシジミチョウで、翅表は黄橙色。近似種のアカシジミとは区別が難しい。

[選定理由] アカシジミが北海道から九州まで広く分布するのに対し、本種は北海道から東北地方のカシワ林という限られた環境にのみ生息し、近年このような環境が急速に減少している。

[分布と生態の概要] 県内には屏風山一帯(つがる市)・岩木山東麓(弘前市)・青森空港周辺(青森市)などに大規模なカシワ林が多く、全国的にも屈指の産地が存在していた。成虫は6月下旬～7月に発生し、夕方の夥しい数の群飛は初夏の景物であった。9月までに食樹のカシワの越冬芽付近に産卵を終え卵で越冬。翌春、孵化した幼虫は葉を食べて成長し6月までに蛹化、羽化に至る。

[生存に対する脅威と保存対策] 上記の各産地は1990年代以降、それぞれ開畑、宅地・耕地化、空港周辺の整備によって大規模なカシワ伐採が行われ、生息環境が狭小化。これによって個体数減少が急速に進んだ。生息の条件となるカシワ林はまだ県内各所に残されているが、個体数の安定した維持にはつながっていない。本種の詳細な生態調査を行い、保護策を講ずる必要がある。

(室谷洋司)

チョウ目 ヤガ科**B**

和名 クビグロケンモン

環境省：該当なし

学名 *Viminia digna* (Butler)

[形態的特徴] 開長43mm内外、前翅の外横線は幅広の灰白条で、後翅は春の個体は白色であるが、夏の個体は淡黄色である(井上ら, 1982; 江崎ら, 1975)。

[選定理由] 国内での産地は局地的で、まれな種類である(井上ら, 1982; 江崎ら, 1975)。食草はカキツバタであるが、この群落も近年衰退してきている。県内での産地、記録とも少ない。

[分布と生態の概要] 国内での分布は本州、四国、九州である。県内ではつがる市平滝沼、六ヶ所村鷹架沼(葛西, 1987)、つがる市大滝沼(工藤, 1983)、つがる市ベンセ沼(亀田・山内, 2004)などの屏風山地区と小川原湖地区から確認されている。

[生存に対する脅威と保存対策] 屏風山地区と小川原湖地区は開発、盗掘や心ない人の湿地帯への踏み込み等により、食草であるカキツバタ群落が衰退している。

[特記事項] 本種とカキツバタ双方の保護対策が望まれる。

(山内智)

トンボ目 イトトンボ科**C**

和名 ルリイトトンボ

環境省：該当なし

学名 *Enallagma boreale circulatum* Selys

体長：32.5～38.5mm。雄が瑠璃色の地に黒斑を有する美麗種。雌は濃黄緑色の地に黒斑がある。黒色斑は平地の個体では縮小し、高山や下北の個体では発達する傾向がある。北方系のイトトンボで、岐阜県と福井県以北の本州高地と北海道に分布する。県内では、津軽地方と下北半島の各地に分布しているが、産地は局地的である。

成虫は6～9月に池・沼で見られる。産卵は、雌雄連結で水面の植物に行く。時々雌は水中に潜って産卵する。この時、雄は連結を解いて水上で待機し、浮上した雌を再連結する。

最近では生息地・個体数ともに減少している。

(奈良岡弘治)

トンボ目 イトトンボ科**C**

和名 モートンイトトンボ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Mortonagrion selenion* (Ris)

体長：24.5～29.5mm。小型のイトトンボで、雄の頭部は黒色、胸部と腹部第1・2節はおおむね緑色、腹部第3節以降は鮮やかな橙色を呈する。雌は未熟時に橙黄色であるが、成熟すると緑色になる。成虫は6月半ば～8月上旬に見られる。朝早く日の出とともに4時頃から活動し、8時頃までの間に交尾する。その後、雄は摂食行動をするだけで、ほとんど静止している。雌は9～15時頃にかけて、水面の植物内に単独産卵する。

1970年代前半までは各地の水田・池・沼などに普通に見られたが、現在は生息地・個体数ともに減少している。水田の乾田化や湿地の消失などで、ますます減少することが危惧される。

(奈良岡弘治)

トンボ目 カワトンボ科**C**

和名 ハグロトンボ

環境省：該当なし

学名 *Calopteryx atrata* Selys

体長：52～62.5mm。雄の翅は黒く、胴体が金属緑色。雌の翅と胴体は黒褐色である。翅の縁紋はない。アオハダトンボに似るが一回り大きい。日本・朝鮮・中国に分布する。

1960年代までは県内各地の水田地帯の堰などに普通に見られたが、1990年代には県内数か所に生息するだけとなった。ところが2000年代に入って、平川や岩木川など、津軽平野では一部の河川で再び発見されだしている。一頃の水質汚染等の改善が原因と考えられる。しかし、全県的には生息地が少ないままであり、今後の環境変化によっては絶滅の危惧が心配される。

成虫は6～9月に出現する。雌は単独で水面の植物に産卵する。潜水して行うこともある。

(奈良岡弘治)

トンボ目 サナエトンボ科**C**

和名 オナガサナエ

環境省：該当なし

学名 *Onychogomphus viridicostus* (Oguma)

体長：53～59.5mm。黒地に黄斑を有し、雄の尾部附属器の長いのが特徴である。下附属器は細長く左右に二又し、上方へ湾曲している。成虫は7～9月に見られる。

従来、県内の生息地は三八地方だけだったが、2004年以降、碓ヶ関・大鱈・弘前の平川、岩木川で生息が確認された(高橋私信, 2005, 2008)。また、青森市の野内川でも生息しているとの情報がある。今後の調査により、さらに分布地が確認される可能性がある。

生息地では個体数が少なくないが、平川ではヨシの侵入が著しく、生息地が狭くなっているなど、河川環境の変化によっては個体数の減少につながることが考えられる。

(奈良岡弘治)

トンボ目 サナエトンボ科**C**

和名 ウチワヤンマ

環境省：該当なし

学名 *Sinictinogomphus clavatus* (Fabricius)

県内に広く生息するが、外来魚の侵入などで、最近、生息地・個体数とも減少している。

体長：76～83mm。黒地に黄色斑を有する。腹部第8節が著しく広がって、ウチワ状を呈する。後肢が前・中肢の約2倍と長い。日本・台湾・朝鮮半島から中国・シベリア・ベトナムなどのアジア東部に広く産する。池沼・湖などに生息し、成虫は6月から9月まで見られる。羽化は夜半に行われ、羽化後間もなく暗闇の中を林に飛び立つ。成虫は前肢をたたみ、中・後肢の4本でヤジロベエ型に止まる。産卵は雌が単独で行い、ホバリングして卵を放出して打水し、水面の草に付着させる。卵は粘着性の糸に連なっている。雄は産卵雌を警護飛翔する。

(奈良岡弘治)

トンボ目 エゾトンボ科**C**

和名 コヤマトンボ

環境省：該当なし

学名 *Macromia amphigena amphigena* Selys

体長：67～75mm。中型で、黒地に黄斑がある。近縁種のオオヤマトンボに酷似するが、一回り小さく、頭部前面に黄色条が一本であることなどにより区別できる。

日本全土に生息する他、朝鮮・中国に分布する。丘陵地や低山地の河川・沼・湖などに生息し、成虫は6月から出現し、8月いっぱい見られる。雄は水面上をパトロール飛翔する。雌は単独で水面や湿った土に尾端を打ち付けて行う。

1960年代前半までは各地に普通だったが、現在は生息地・個体数ともに減少した。しかし、比較的山間の平川・岩木川・新井田川の中流域では個体数が多い。

(奈良岡弘治)

トンボ目 トンボ科**C**

和名 ハラビロトンボ

環境省：該当なし

学名 *Lyriothemis pachygastra* (Selys)

体長：30.5～37.5mm。小型の腹部が平べったいトンボである。雄の未熟成虫と雌は黄褐色の地に黒斑がある。成熟した雄では胸部が黒色、腹部が青灰色を呈する。翅の基部は黄褐色である。

北海道南部から九州まで分布し、国外では朝鮮・中国に分布する。

成虫は6月中旬～8月まで見られる。平地丘陵地の湿地や水田に生息し、県内に広く分布する。津軽地方では一時、ほとんど見られなくなったが、最近、毒性の弱い農薬使用などのためか、回復傾向にあり、少数ながら各地で見られるようになってきている。雄は湿地に縄張りを形成する。交尾後、雌は単独で産卵し、雄が近くを飛んで警護する。

(奈良岡弘治)

トンボ目 トンボ科**C**

和名 カオジロトンボ

環境省：該当なし

学名 *Leucorrhinia dubia orientalis* Selys

体長：31.5～36mm。黒地に黄褐色、または赤褐色の斑紋がある小型のトンボである。頭部前面が乳白色を呈する。翅胸前面は黄色で、中央に太い黒条がある。成熟すると、雄は黄斑が赤化し、雌は黒味が増す。

北海道と本州山岳地帯の湿地帯に分布し、県内では八甲田山系にのみ生息する。国外では朝鮮・中国からウスリー・アムールに分布する。成虫は6月下旬～8月末まで湿地に見られる。

最近、生息地が減少している。ほとんどの生息地が国立公園の中にあり、個体数は多い。湿地帯の踏み荒らしなどにより、生息地が破壊しないようにする必要がある。

(奈良岡弘治)

トンボ目 トンボ科**C****和名** ショウジョウトンボ**環境省**：該当なし**学名** *Crocothemis servilia mariannae* Kiauta

体長：41.5～48.5mm。未熟成虫は橙黄色であるが、雄は成熟すると全体が赤化し、雌は茶褐色となる。翅の基部が赤褐色を呈する。日本全土に分布するが、奄美大島以南の南西諸島には原亜種が生息する。

平地の池・沼に生息し、1960年代前半までは県内各地に普通に見られたが、生息地・個体数ともに減少した。しかし、最近、生息地が復活している所もある。また、発生地によっては個体数が多い。成虫は6月下旬～8月下旬まで見られる。交尾は飛翔しつつ行い、10秒程で終了する。雌は単独で連続打水産卵をする。雄が警護飛翔することがある。
(奈良岡弘治)

トンボ目 トンボ科**C****和名** オオシオカラトンボ**環境省**：該当なし**学名** *Orthetrum triangulare melania* (Selys)

体長：46.5～54.5mm。シオカラトンボに似るが、頑丈な感じのする中型のトンボである。未熟成虫は黄色の地に黒斑を有する。雄は成熟すると白粉を装い、全体が青灰色となる。雌の第9腹節は側片が膨らんで、やや軍配状となる。翅の基部と先端がわずかに黒褐色を呈する。

日本全土に分布し、国外では台湾・中国などに生息する。1960年代前半までは県内各地に普通に見られたが、最近では生息地・個体数ともに減少している。平地から低山地の湿地・池・沼に産する。成虫は7～9月まで見られる。雌は単独で打水産卵をする。雄はこの時に雌の近くを飛翔して警護する。
(奈良岡弘治)

トンボ目 トンボ科**C****和名** ヒメアカネ**環境省**：該当なし**学名** *Sympetrum parvulum* (Bartenef)

体長：27.5～34mm。最小のアカトンボで、マユタテアカネに似るが、胸部前面中央の三角斑と肩部分の黒色条が太くつながり鮮明なことや、雌の産卵弁が腹端より長いことなどで区別できる。

未熟成虫は黄褐色であるが、雄は成熟すると顔面が黄白色となり、腹部が赤化する。雌は橙褐色となるが赤くなるものもある。

日本全土に生息し、外国では朝鮮・中国・ウズリーに分布する。主に平地から低山地の湿地・休耕田などに生息し、7～10月まで見られる。県内に広く分布するが、湿地の減少などで、生息地・個体数ともに少なくなっている。将来、さらなる生息地と個体数の減少が懸念される。
(奈良岡弘治)

ゴキブリ目 オオゴキブリ科**C****和名** オオゴキブリ**環境省**：該当なし**学名** *Panesthia angustipennis spadica* (Shiraki)

本亜種は、国内では本州、四国、九州や奄美大島、沖縄。国外では台湾に生息する。森林性のゴキブリで産地は局所的である。東北地方では青森県、岩手県、宮城県、山形県、福島県から記録(朝比奈, 1992; 大野, 1993)され、青森県が北限である。県内では深浦町十二湖(松野ら, 1966; 朝比奈, 1988; 福田ら, 1992; 大野, 2002)などから記録されているが、採集困難な希少種である。

本種は、十二湖ではブナの朽木の中に生息しているが、朽木の腐り加減や固さ・湿り具合に好みがあり、朽木は限定される。十二湖は白神山地に属し、津軽国定公園に指定され環境は保護されているが、森林内の倒木、朽木などは撤去することなくそのままの状態に置くことが肝要である。
(山内智)

ナナフシ目 ナナフシ科**C**

和名 ヤスマツトビナナフシ

環境省：該当なし

学名 *Micadina yasumatsui* Shiraki

本種は体長42～52mmのカマキリに似た体形をし、翅は背面に折りたたんでいる。体色は緑色、前翅及び後翅前縁も緑色である。後翅の折り畳まれている部分は桃色の膜質である。北海道（西島, 1999）・本州・四国・九州に分布し、おもに低山地の古い広葉樹林に生息している。蔵館・碓ヶ関・平館・五所川原・相馬・八戸・十和田市・名久井岳・階上・十二湖で認められている。単為生殖をし、不完全変態で、幼生は6～7月に現れ、コナラ・ミズナラなどの葉を食べる。成虫は8月頃より現れ、卵は地表にばら撒くように10月頃まで産み続け、そのまま卵態で越冬する。本県では卵が1年以上かかってふ化するようで、生態の詳細は解明されていない。（山田雅輝）

カメムシ目 アメンボ科**C**

和名 ババアメンボ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Gerris babai* Miyamoto

本種は、国内では北海道や本州に分布する。止水域の池沼で、水草の繁茂する水面に生息する。生息地はかなり局所的で少ない（環境省, 2006）。県内では弘前公園から記録（日浦, 1967, 1968）されている。

生育に適した湖沼が、開発や外来魚移入などによる水質の悪化、水草減少などが進んでおり生息の脅威となっている。

（山内智）

カメムシ目 アメンボ科**C**

和名 キタヒメアメンボ

環境省：該当なし

学名 *Gerris lacustris* (Linnaeus)

ヒメアメンボと混同されていたが、微翅型を高率で発現させることなどから、別種であることが判明した。交尾器や腹部腹板の構造によりヒメアメンボやババアメンボと区別される。

これまでのところ、北海道・本県・岩手県・福島県からのみ確認されている（Usui *et al.*, 1997；碓井, 1998；碓井・疋田, 2001）。本県からは十和田市（旧十和田湖町）のみから確認されている。碓井（1998）により、蔦湖沼群の微翅型個体群がキタヒメアメンボであることが明らかにされ、普通のヒメアメンボと混生している。蔦では生息密度は高いものの、遊魚用としてニジマスなどの捕食性外来魚を放流しているため、捕食圧を受けているものと考えられる。

（市田忠夫）

カメムシ目 カタビロアメンボ科**C**

和名 エサキナガレカタビロアメンボ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Pseudovelia esakii* Miyamoto

本種は日本固有種で、本州の池沼に生息している。本種は、1958年十和田湖、1953年むつ市宇曾利湖で採集された標本によって、新種記載されたアメンボである（Miyamoto, 1959）。

本種は、湖岸沿いの石下に群生し（環境省, 2006）、生息する場所に限られる。近年、水質ばかりでなく湖岸の環境も劣悪になってきており、絶滅が危惧される（環境省, 2006）。県内で記録された地区は水質に大きな変化がないが、一部の人が湖岸まで入り込み、踏み荒らされている。またむつ市宇曾利湖湖岸では車両が乗り入れて環境が悪化してきている。

（山内智）

カメムシ目 コオイムシ科**C**

和名 コオイムシ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Appasus japonicus* Vuillefroy

本種の国内での分布は本州、四国、九州で、水田や池沼の開放的な止水域の清水に生息する（環境省, 2006；平嶋・森本, 2008）。県内では、石村・佐藤（1941）に黒石市浅瀬石、つがる市森田、八戸市に普通に分布とあり、古くは広域に分布していた。最近、深浦町赤石川（下山ら, 1991）、東通村荒沼（福田ら, 1977）、むつ市芦崎（むつ市教育委員会, 2002）などからも記録された。以前は全国的に普通に見られていたが、近年激減している（環境省, 2006）。県内でも、本種の生息域である止水の池沼が減少し、池沼を取り巻く環境も特に平地部で悪化してきており、生息地や個体数共に減少している。

(山内智)

カメムシ目 ミズムシ科**C**

和名 ミズムシ

環境省：該当なし

学名 *Hesperocorixa distanti* (Kirkaldy)

本種の国内での分布は、北海道、本州、九州である。池沼に生息するが減少してきている。県内では、古くはつがる市森田、黒石市山形（石村・佐藤, 1941）などから記録されている。近年、東通村荒沼・タカ沼（福田ら, 1997）、つがる市冷水沼・ソリ沼・大滝沼・ベンセ沼・平滝沼（大高ら, 2008）などの下北湖沼群、屏風山湖沼群から記録された。古くは県内でも各地の池沼に普通に見られていたと思うが、池沼の減少や水質汚染などによる環境の悪化から、生息地や個体数ともに減少してきたと考えられる。

(山内智)

カメムシ目 カスミカメムシ科**C**

和名 モンキカスミカメ

環境省：該当なし

学名 *Capsodes gothicus graeseri* (Autran et Reuter)

体長7mm前後の中型で黒色のカスミカメで、小楯板・前胸側縁・前翅前縁・楔状部が黄色。

北海道と本県及び岩手県の海岸に分布し、風衝を受ける草原に生息する。市田（1988）が竜飛崎と中泊町青岩から、富岡（1989）が八戸市種差海岸から報告した。安永ら（2001）によるとクサフジに寄生するというが、県内での寄主は不明である。海浜の環境は観光地化や防災上の必要などから改変されることが多く、雌に飛翔能力のない本種は良好な海浜環境を示す指標となりうる。

(市田忠夫)

カメムシ目 ヒラタカメムシ科**C**

和名 ヤセオオヒラタカメムシ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Mezira termulae* (Germer)

9～10mmの扁平なカメムシで、黒褐色で全く艶がない。雄は他種にない下ぶくれ体型となる。

本種は枯倒木を豊富に有する老齢林の指標となる種で、全国的に確認例が少なく、環境省の新レッドリストでも準絶滅危惧とされている。県内では八甲田山系・白神山系・梵珠山から確認されているが、個体数は少ない（市田, 1991）。ヒラタカメムシは枯倒木を腐朽させる真菌類に寄生するもので、特に本種はブナ極相林の指標種となるものと考えられる。本県において自然度の高いブナ林は何らかの保全が図られており、差し迫った危機にはない。ただし、生息密度が低いいため本種の発見は困難である。

(市田忠夫)

カメムシ目 ミズギワカメムシ科**C**

和名 ヒメミズギワカメムシ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Micracanthia hasegawai* (Cobben)

3～3.5mmの短翅（中翅）で卵形の種で、背面に細毛を密生する。

本県の恐山を原産地とする種で（Cobben, 1985）、青森市田代平でも確認されている（市田, 1991）。ミズゴケ上に生息する種で、7月頃に成虫となる。恐山では1988年と2007年に、田代平では1989年と1997年に市田が実際に確認している（工藤ら, 1999）。1998～1999年の田代平の調査の際には、注意して探したが確認できなかった。成虫の出現期間が短いと確認されにくいということもあるだろうが、楽観のできる現状ではない。北海道（Cobben, 1985）・秋田県（林, 2003）からも確認されているが、既知産地が少なく、環境省の新レッドリストでも準絶滅危惧とされている。

(市田忠夫)

カメムシ目 マキバサシガメ科**C**

和名 ツマグロマキバサシガメ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Stenonabis extremus* Kerzhner

体長7.5～9.5mmのマキバサシガメで、普通のハネナガマキバサシガメに比べ、やや大きく体幅も広い。色彩は灰色味が強く、後腿節端が黒色になる。

日本では北海道遠軽町の1例のみが知られていた種であるが（Kerzhner, 1981）、その後本県のむつ市・西目屋村から確認され（市田, 1991）、宮城県でも発見された（市田, 1998b）。本州では河川敷・水田地帯の灯火へ飛来した標本が得られているだけで、実際に生息する微環境は不明である。西目屋村の目屋ダムの灯火へは時にまとまった個体の飛来があるが、この生息地は津軽ダム湛水に伴い消滅することになるため、湛水前に本種が生息する微環境の解明を急ぐ必要がある。

(市田忠夫)

カメムシ目 サシガメ科**C**

和名 ゴミアシナガサシガメ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Myiophanes tipulina* Reuter

体長17mm前後の一見ガガンボを思わせる細長いカメムシで、全身が長い毛で覆われる。

戦前の記録は石村・佐藤（1941）の黒石市（旧山形村）青荷しかなかったが、市田（1989）により弘前市の1961年の記録、黒石市教育委員会（2001）により森田村の1934年の記録が報告されている。以後55年以上確認されていない。家屋性で物置などの壁面にいて他虫を捕食していたようであり、家屋構造の近代化により全国的にも急激に衰退しているが、伝統的な構造の民家などでは生存している可能性がある。環境省の新レッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類、山形県では情報不足とされている。

(市田忠夫)

コウチュウ目 ハンミョウ科**C**

和名 コハンミョウ

環境省：該当なし

学名 *Myriochila speculifera* (Chevrolat)

本種は全国的に見れば関東地方までは普通種であるが、本県は分布の北限に当たり、産地数・個体数ともに少ない。県内では平地から低山地の池沼・溜め池・河川敷などの湿った場所に局所的に生息し、幼虫は湿地周辺の裸地に見られる。このような環境は不安定で、護岸工事や河川改修によって減少するおそれがある。幼虫で越冬し、成虫は6～9月に見られる。1980年代以降、津軽地域では平賀町（現平川市）・弘前市・黒石市・木造町（現つがる市）・森田村（現つがる市）・金木町（現五所川原市）・青森市（以上、成田, 1988；成田, 1989b）の記録があるが、県南地域では恐山（北畠, 1955）の古い記録しかなく調査不足と思われる。

(櫛田俊明)

コウチュウ目 ハンミョウ科**C**

和名 ホソハンミョウ

環境省：該当なし

学名 *Cylindera gracilis* (Pallas)

本種の国内での分布は北海道、本州、四国、九州である。林や河畔などの草地で見られるが全国的に少なく（上野ら, 1985）、希種である。形態などから観察しにくい種類である可能性もある（大野, 1997）。県内では、つがる市森田（山谷, 1939a）、弘前市笹森山（齋藤, 1956）、弘前市清水・相馬、むつ市恐山（福田ら, 1952）、鶴田町廻堰（成田, 1988）、弘前市岳（成田, 1989b）などから記録されている。古くはつがる市森田、むつ市恐山では割に多かった（福田・奈良, 1952）。県内での産地は弘前市、つがる市、むつ市に集中し、三八上北地方からはほとんど知られていない。その分布は局所的で、最近の記録例は少ない。（山内智）

コウチュウ目 ハンミョウ科**C**

和名 ハンミョウ

環境省：該当なし

学名 *Cicindela japonica* Thunberg

本亜種は、本州、四国、九州、対馬、種子島、屋久島などに分布する。県内では、八戸市、平川市津軽湯ノ沢（福田・奈良, 1952）、平川市久吉（佐藤ら, 1967）、三戸町蛇沼・赤岩（山美ら, 1986）、南部町横沢（佐藤ら, 1987）、十和田市滝沢、南部町鳥舌内、五戸町浅水（成田, 1988）、南部町名久井岳、平川市古遠部（成田, 1989b）などから記録されている。県内での産地は、本県と秋田県、岩手県の県境付近に集中しており、局所的である。以前は山麓の林道、壁土の切通しなどによく見られたが（福田, 1969）、近年は道路も舗装され道路脇ではほとんど見られなくなった。近年の採集例は少ない。（山内智）

コウチュウ目 オサムシ科**C**

和名 オオワニメクラチビゴミムシ

環境省：該当なし

学名 *Kurasawatrechus nishikawai* S. Uéno

本種は地中に生息し、体長4mm内外と大変小さく、複眼と後翅は退化して無く、移動力が低い種類である。1992年大鰐町十和田山で採集された標本によって新種記載（Uéno, 1993）された。本地域以外からは確認されておらず、その後の記録もない。個体数も少ない希少種である。

本種は地上の環境変化に大変敏感で、土壌の乾燥に大変弱い種類である。環境が変化しても、微小で複眼・後翅とも痕跡的にしか無いため、良好な環境を求めて移動することも出来ず、環境の変化によっては短期間で絶滅する可能性が高い。本地域の樹木伐採や水路の分断などの環境の変化が生息に大きな脅威となる。（山内智）

コウチュウ目 オサムシ科**C**

和名 シラカミメクラチビゴミムシ

環境省：該当なし

学名 *Oroblemus yamauchii* S. Uéno

本種は、地中の浅層に生息し、体長3.3mm内外と極小で複眼と後翅は退化している。そのため移動範囲は狭く、広範囲での移動はできず生息地は極端に限定される。1992年深浦町白神岳の標本によって新種記載（Uéno, 1993）された。本地域以外での採集記録はなく個体数も少ない。世界自然遺産「白神山地」の固有種であり、本地域の環境が大変良好な状態で保たれてきた証拠となる大変貴重な希少種である（山内, 1996c）。

本種は地上環境変化に大変弱く、環境悪化で土壌環境が劣化すれば短期間で絶滅する可能性が高い。生息地は世界自然遺産登録地域で保護されている。しかし近年登山者が増加し官民一体で、登山道以外の立入やゴミ・糞尿の処理に取り組んでいるが、土壌環境の悪化が危惧される。（山内智）

コウチュウ目 オサムシ科**C**

和名 オソレヤマミズギワゴミムシ

環境省：該当なし

学名 *Bembidion negrei* Habu

本種は日本固有種で、本州の硫化水素の臭いのする温泉水の流れる水辺に生息する（森田, 1984）。生息環境が特殊なこともあり、本種の生息地は局所的である。本種は、1953年にむつ市恐山の宇曾利湖湖畔で採集された資料によって新種記載された（Habu, 1958）。県内ではむつ市恐山（森田・山内, 1986；山内, 1989）で毎年確認されている。

生息地のむつ市恐山は下北半島国定公園に指定され、観光客も年々増加している。生息地には心ない一部の人が入り込み、生息場所が踏み荒らされている。特に、湖岸近くまで車両が乗り入れられ環境が悪化している。

(山内智)

コウチュウ目 ゲンゴロウ科**C**

和名 マルコガタノゲンゴロウ

環境省：絶滅危惧Ⅰ類

学名 *Cybister lewisianus* Sharp

本種の国内での分布は本州と九州で、水生植物が繁茂した池沼に生息し、全国的に大変希少な種類である（環境省, 2006；森・北山, 1993）。県内では、森・北山（1993）が県内の標本を確認している。他の記録はあまり知られていない。本種には、開発による生息地の減少、外来魚の放流などが脅威となっている（環境省, 2006）。県内ではもともと記録も個体数も少ない種類ではあるが、池沼の環境の衰退でさらに危機的状況になっていると思われる。

(山内智)

コウチュウ目 ゲンゴロウ科**C**

和名 ゲンゴロウ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Cybister chinensis* Motschulsky

本種の国内での分布は、北海道、本州、四国、九州で、山地から平野部まで広く分布している。本種は一生を水中で過ごし、水生植物が繁茂している池沼や水田や湿地などを生息地とし、小魚や昆虫などを食べている。

各地に普通であったが、池沼の農薬などによる水質汚染や外来魚の放流などによる環境の劣化などによって全国的に激減している（環境省, 2006；森・北山, 1993）。県内では戦前は各地に普通であった（石村・佐藤, 1941）。森・北山（1993）が青森県産の標本を確認しているが、生息地や個体数ともに他県同様激減し絶滅が危惧される。

(山内智)

コウチュウ目 ゲンゴロウ科**C**

和名 オオシマゲンゴロウ (イチモンジシマゲンゴロウ)

環境省：該当なし

学名 *Hydaticus aruspex* Clark

平野部の湖沼・溜め池などを主体に分布する水生昆虫（特に肉食性のもの）は減少が著しく、本種も例外ではない。正式な報告例は少ないが、屏風山湖沼群、岩木川下流域の池沼や溜め池などに生息する（田村, 2003）。本種は国内では北海道と本州北部に分布し、本県は分布の南限に当たる。現在生息している場所での土地開発（開墾・埋め立て）や水質汚染（農薬・廃液）、護岸工事が進めば、減少・絶滅するおそれがある。中型（体長14~15mm）で美しく産地も極めて限定されることから人気が高く、採集による影響も大きい。成虫で越冬する。

(櫛田俊明)

コウチュウ目 ゲンゴロウ科**C****和名** ヒメケシゲンゴロウ北日本亜種 (アラメケシゲンゴロウ)**環境省**：該当なし**学名** *Hyphydrus laeiventris tsugaru* Nakane

平野部の湖沼、溜め池などを主体に分布する水生昆虫（特に肉食性のもの）は減少が著しく、本種も例外ではない。正式な報告例は少ないが、屏風山湖沼群・岩木川下流域・下北半島の池沼や溜め池などに生息する（中根, 1993；神奈川県立博物館編, 1995）。本亜種は北海道（渡島半島）と本州北部に分布し、本県は分布の南限に当たる。秋田県以南の本州・四国・九州には基亜種が分布する。現在生息している場所での土地開発（開墾・埋め立て）や水質汚染（農薬・廃液）、護岸工事が進めば、減少・絶滅するおそれがある。小型（体長4.6~5.0mm）だが産地が極めて限定されることから人気が高く、採集による影響も大きい。成虫で越冬する。

(櫛田俊明)

コウチュウ目 ゲンゴロウ科**C****和名** サロベツナガケシゲンゴロウ**環境省**：該当なし**学名** *Hydroporus fuscipennis* Schaum

平野部の湖沼・溜め池などを主体に分布する水生昆虫（特に肉食性のもの）は減少が著しく、本種も例外ではない。正式な報告例は少ないが、屏風山湖沼群の湿原に生息する（池田・高橋, 2003）。本種は国内では北海道と本州北部に分布し、本県は分布の南限に当たる。現在生息している場所での土地開発（開墾・埋め立て）や水質汚染（農薬・廃液）、護岸工事が進めば、減少・絶滅するおそれがある。小型（体長3.7mm前後）だが産地が極めて限定されることから人気が高く、採集による影響も大きい。成虫で越冬する。

(櫛田俊明)

コウチュウ目 ゲンゴロウ科**C****和名** ナガケシゲンゴロウ**環境省**：該当なし**学名** *Hydroporus uenoi* Nakane

平野部の湖沼・溜め池などを主体に分布する水生昆虫（特に肉食性のもの）は減少が著しく、本種も例外ではない。正式な報告例は少ないが、屏風山湖沼群の湿原に生息する（Nilsson & Nakane, 1993；池田・高橋, 2003）。本種は本州（東北地方・中部地方）に分布し、本県は分布の北限に当たる。現在生息している場所での土地開発（開墾・埋め立て）や水質汚染（農薬・廃液）、護岸工事が進めば、減少・絶滅するおそれがある。小型（体長3.5mm前後）だが産地が極めて限定されることから人気が高く、採集による影響も大きい。成虫で越冬する。

(櫛田俊明)

コウチュウ目 ゲンゴロウ科**C****和名** エゾゲンゴロウモドキ**環境省**：準絶滅危惧**学名** *Dytiscus marginalis czerskii* Zaitzev

本種は、国内では北海道、本州北部に分布する（環境省, 2006）。山間部の水のきれいな池沼に生息している（森・北山, 1993）。個体数は少なく環境の変化に非常に弱い種類である（環境省, 2006）。県内では、八戸市（中根, 1986）、むつ市川内（下山ら, 1986）、鯉ヶ沢町ノロ沼・青池・乱岩ノ森、深浦町追良瀬川（阿部ら, 1987）、深浦町十二湖（森・北山, 1993）、大鰐町十和田山（櫛田・佐藤, 1990）、十和田市蔦（櫛田, 1995）などから記録されている。近年、深浦町十二湖では心ない採集者の乱獲により、個体数が激減した。他地域でも乱獲や環境が生息に適しなくなっており、個体数減少や絶滅が危惧される。

(山内智)

コウチュウ目 ゲンゴロウ科**C**

和名 ゲンゴロウモドキ

環境省：該当なし

学名 *Dytiscus dauricus* Gebler

平野部の湖沼、溜め池などを主体に分布する水生昆虫（特に肉食性のもの）は減少が著しく、本種も例外ではない。正式な報告例は少ないが、屏風山湖沼群と岩木川下流域の池沼や溜め池などに生息する（松本ら, 1989；樋口, 1993；櫛田, 1995；阿部ら, 2002；田村, 2003）。本種は国内では北海道と本州北部に分布し、本県は分布の南限に当たる。現在生息している場所での土地開発（開墾・埋め立て）や水質汚染（農薬・廃液）、護岸工事が進めば、容易に減少・絶滅するおそれがある。大型（体長31～36mm）で産地も極めて限定されることから人気が高く、採集による影響も大きい。成虫で越冬する。

(櫛田俊明)

コウチュウ目 ガムシ科**C**

和名 エゾコガムシ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Hydrochara libera* (Sharp)

ゲンゴロウ類と同様に扁平・楕円形の形態を有し、県内では五所川原市十三湖鳥谷川河口、中泊町十三湖南岸、つがる市豊富・牛潟池・袴形池・平滝沼、東通村尻屋崎・荒沼、むつ市八忠沼で記録がある。従来は、北日本中心の分布であったが、近縁のコガムシと精査された結果、近畿、広島県・佐賀県でも確認されている（秋山, 2004；林・八木, 2000；吉富ら, 2001）。

生息域は、津軽半島・下北半島の湿原地帯であり、水生植物が繁茂する良好な止水環境と考えられ、池の富栄養化に伴う水質悪化等により、容易に生息域が狭められ、種の維持が困難になり易いものと予想される。

(佐藤隆志)

コウチュウ目 シデムシ科**C**

和名 ツガルホソシデムシ

環境省：該当なし

学名 *Lyrosoma chujoi* Mroczkowski

本種は、1953年外ヶ浜町竜飛で採集された資料によって新種記載（Mroczkowski, 1959）された。採集場所は外ヶ浜町竜飛崎の海岸の波際の石下（下山, 1978b）で、海岸と言う特殊な場所であり、生息地も局所的で個体数も少ない希少種である。県内ではこの他1992年深浦町森山（福田ら, 1994）で県内2番目の生息地が確認された。県内以外では、北海道（Shibata, 1969）と岩手県（中村, 1985）から記録されている。

生息地が海岸と特殊な場所であり、タイプ産地の外ヶ浜町竜飛崎では近年全く採集されていない。海岸では、小石や礫が自然状態で堆積した部分の環境保全の配慮も必要である。

(山内智)

コウチュウ目 コガネムシ科**C**

和名 オオチャイロハナムグリ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Osmoderma opicum* Lewis

本種は、自然度の高い地域に分布する希少種である（環境省, 2006）。樹洞内に生息し、ブナやスギに多い（大野, 1987）。本種は、本州、四国、九州に分布し、県内では、八甲田・十和田山地（古川, 1928；平山, 1936；山谷, 1936, 1943, 1977；木村, 1973；阿部, 1980；山内, 1999）、津軽半島（五所川原農林高校自然科学部, 1966；阿部・藤田, 1976；下山, 1989a）、白神山地（櫛引, 1971；阿部, 1980；下山ら, 1991）、下北半島（鈴木ら, 1951；太田ら, 1970）に分布が集中している（青森県, 2000）。この他に、岩木山（阿部, 1972）、三戸町（渡邊, 1937）、田子町雷鉢森（漆館ら, 1978）などからも記録されている。

(山内智)

コウチュウ目 コガネムシ科**C**和名 **ダイコクコガネ**

環境省：準絶滅危惧

学名 *Copris ochus* Motschulsky

本種の国内での分布は、北海道、本州、四国、九州である。牧場などの獣糞にあつまり、灯火にもよく飛来するが、生息地は激減している（川井ら, 2008）。県内では、東通村尻屋（福田ら, 1998, 2000；齋藤, 1993）、八戸市、むつ市中野沢・金谷、南部町名久井岳、六戸町犬落瀬（齋藤, 1993）等から記録されている。

本種は牛の放牧地に依存し、牛糞を餌としている。全国的にも放牧地が減少し、更に放牧方法や牛の餌の変化等から、生息環境が適さなくなっている（環境庁, 2006）。県内でも同様の傾向にあり、少なくなってきたと思われる。今後、各地域の放牧地での詳しい調査が待たれる。（山内智）

コウチュウ目 コメツキムシ科**C**和名 **キベリマルヒサゴコメツキ**

環境省：該当なし

学名 *Hypolithus littoralis convexus* (Miwa)

本亜種の国内での分布は北海道と青森県で、その生息地は海岸で特殊な種類である（大平, 1963）。産地は局所的で、採集記録が少なく希少種である。県内では、東通村野牛・岩屋、大間町大間平（荒木, 1995）などの下北半島の海浜で確認されている。

本亜種の生息地は海岸で特殊な環境であり、県内では下北半島の津軽海峡に面した地域で確認されている。太平洋沿岸、陸奥湾沿岸、日本海沿岸での分布状況や生態などについて不明な点があり、今後の詳しい調査研究が望まれる。（山内智）

コウチュウ目 コメツキムシ科**C**和名 **シモヤマヒサゴコメツキ**

環境省：該当なし

学名 *Hypolithus motschulskyi shimoyamai* Ôhira

本亜種の属するミヤマヒサゴコメツキの仲間には多くの亜種が知られている。本亜種は白神岳を中心に生息するが、隣接する二ツ森には別亜種トウホクミヤマヒサゴコメツキが生息する。白神山地で2亜種に分かれたのは赤石川・追良瀬川等の河川が関係している（山内, 1994a）。種の分化からも貴重な種類である。本亜種は、1971年深浦町白神岳の資料によって新亜種として記載（大平・下山, 1984）された。白神山地固有の種類で、生息地が限定され、個体数の少ない希少種である。深浦町笹内川（福田ら, 1993）にも記録がある。

生息地は世界自然遺産登録地域で保護されているが、近年、登山者が増加し、官民一体となって登山道以外の立入やゴミ・糞尿処理などに取り組んでいるが、生息が危惧される。（山内智）

コウチュウ目 コメツキムシ科**C**和名 **チビヒサゴコメツキ**

環境省：該当なし

学名 *Hypnoidus rivalis rivalis* (Lewis)

本亜種は、高山性で産地が局所的な希少種である。青森県がタイプ産地で、G. Lewisが1880年に岩木山で採集した2頭の標本によって新種記載（Lewis, 1894）された。

本亜種は、東北地方に分布するが、県内では岩木山と八甲田山から知られ、岩木山（Lewis, 1894）、岩木山、八甲田山（Kishii, 1962）、十和田市黄瀬范（青森県, 1993）、弘前市岩木山（大平・山内, 1994）、青森市大岳（大平・山内, 1997）などの記録がある。

これらは山頂付近の石下から発見されることが多い。生息地は、国立（定）公園に指定され保護されているが、近年の登山者の増加により、環境が悪化しており、青森県では両地域の山頂付近の表土の保全対策を積極的に行っているが、生息が危惧される。（山内智）

コウチュウ目 コメツキムシ科**C**

和名 ミチノクシモフリコメツキ

環境省：該当なし

学名 *Actenicerus nempta* Kishii

本種は、八甲田・八幡平山系の高層湿原に分布する、希少種である。本種は、青森市酸ヶ湯、十和田市谷地・猿倉と岩手県松尾村の資料に基づいて新種記載 (Kishii, 1996) された。他に県内からは青森市毛無岱 (大平・山内, 1997)、十和田市猿倉岳、平川市ズネカ森 (大平・山内, 1998) などで記録されている。

本種は、高層湿原の湿地内に残されたダケカンバやチシマザサなどの葉上から見出され、幼虫の生息場所は湿地性の傾向が強いと思われる (大平・山内, 1997)。生息地域は、十和田・八幡平国立公園内で昆虫採集の禁止区域で保護されているが、成虫・幼虫の生息地である湿地帯への入山者、山菜採取者の立入などによる環境の悪化で、生息が危惧される。

(山内智)

コウチュウ目 コメツキムシ科**C**

和名 トワダアカコメツキ

環境省：該当なし

学名 *Ampedus towadensis* Kishii

本種は青森県に分布し、その分布も局所的で採集例の少ない希少種である。本種は、十和田市谷地で採集された1雌の資料によって新種記載 (Kishii, 1987) された。県内からは、この他にむつ市屏風山 (大平・山内, 1991) の記録がある。類似の種類が多いグループで、将来更に詳しい検討が必要である (大平・山内, 1991)。

本種の詳しい分布や生態など不明な点が多く、今後の詳しい調査が待たれる。

(山内智)

コウチュウ目 コメツキムシ科**C**

和名 ツガルアカコメツキ

環境省：該当なし

学名 *Ampedus tsugaru* Kishii

本種は、岩木山に分布し、局所的で採集例の少ない希少種である。岩木山で採集された雌の資料によって新種記載 (Kishii, 1992) された。岩木山以外での記録は見られない。

生息地の岩木山山頂部付近は、津軽国定公園の特別保護地区に指定されており、動植物 (昆虫も含め) の採集は全て禁止され保護されている。近年、登山者が増加し、官民一体となって登山道以外の立入やゴミ・糞尿処理などに取り組んでいるが、環境の悪化で生息が危惧される。

(山内智)

コウチュウ目 コメツキムシ科**C**

和名 ムツチャバネコメツキ

環境省：該当なし

学名 *Ampedus mutsu* Kishii

本種は、下北半島中央部山地に分布し、局所的で採集例の少ない希少種である。むつ市薬研で採集された1雌の資料によって新種記載 (Kishii, 1991) された。むつ市薬研以外の記録はほとんど知られていない。

本種の詳しい分布や生態などは不明な点が多く、今後の詳しい調査が待たれる。

(山内智)

コウチュウ目 コメツキムシ科**C**

和名 ババアカコメツキ

環境省：該当なし

学名 *Ampedus babai* Kishii

本種は、八甲田山地と新潟県に分布し、局所的で採集例の大変少ない希少種である。本種は十和田市猿倉で採集された資料によって新種記載 (Kishii, 1966) された。県内からはこの他の記録はほとんど知られていない。

本種の生息地域は、十和田・八幡平国立公園内で保護されているが、分布や生態など不明な点が多く、今後の詳しい調査が待たれる。

(山内智)

コウチュウ目 コメツキムシ科**C**

和名 ツガルクロミズギワコメツキ

環境省：該当なし

学名 *Fleutiauxellus yezoensis tsugaru* Ôhira

本亜種は、八甲田山で発見されたもので、青森市酸ヶ湯の山道の砂礫中から採集された5雄6雌の資料を基に新種記載 (大平, 1994) された。本地域以外での追加記録はほとんどない。分布が局所的な希少種である。

本種の生息地域は、十和田・八幡平国立公園内で保護されている。分布や生態など不明な点が多く、今後の詳しい調査が待たれる。

(山内智)

コウチュウ目 コメツキムシ科**C**

和名 ハヤチネベニコメツキ

環境省：該当なし

学名 *Denticollis yasumii* Ôhira

本種は、岩手県早池峰山と弘前市岩木山の資料で新種記載 (大平, 1993) された。分布は局所的で少ない希少種である。県内では岩木山以外の記録は知られていない。

本種の生息地域の岩木山は、津軽国定公園に指定され保護されている。本種の分布や生態などについては不明な部分が多く、今後の詳しい調査研究が望まれる。

(山内智)

コウチュウ目 ホタル科**C**

和名 ゲンジボタル

環境省：該当なし

学名 *Luciola cruciata* Motschulsky

本種は、本州、四国、九州に分布し、青森県が分布の北限である。県内では、青森市八甲田山鏡沼、十和田市蔦 (中根, 1987)、中泊町下高根 (山内, 2000b)、弘前市、大鱈町、平川市、黒石市、西目屋村、青森市 (阿部, 1980)、むつ市新助川 (下山ら, 1986)、むつ市脇野沢 (山内・三上, 1998)、東通村大沼 (福田ら, 1997)、八戸市 (福田, 1984, 1988) などが記録されている。

本種には発光周期から東日本型と西日本型が知られ (大場, 2004)、遺伝的にも地域固有性が高いことが確かめられている (Suzuki *et al.*, 2002)。近年、他地域からの放飼が行われ、在来個体群との雑交により、遺伝子浸透や攪乱などから遺伝的固有種の絶滅が危惧されており、放飼は慎むべきである (山内, 2007)。

(山内智)

コウチュウ目 カミキリムシ科**C**

和名 ヒゲブトハナカミキリ

環境省：該当なし

学名 *Pachypidonia bodemeyeri* (Pic)

原生林の大木の樹洞内に生息するが個体数は少ない。樹洞を持つ大木の混在するような環境は限定され、ますます減少しつつあるように思われることから、生存が危惧される種類である。本種は、北海道、本州、四国、九州に分布するが、いずれの産地でも非常にまれである。幼虫はブナの樹洞内から発見され、成虫はノリウツギの花に来るが、生態はよく分かっていない。県内での記録は1954年8月22日の1個体（下山, 1964a）、1978年7月25日の1雄（毛塚, 1982）、1987年8月8日の1雄（三上私信, 1999）で、十和田湖周辺と弘前市相馬で採集されている。樹木の伐採による環境悪化が考えられ、大径木を有する自然林の存続が望まれる。（今純一）

コウチュウ目 カミキリムシ科**C**

和名 ミチノクケマダラカミキリ

環境省：該当なし

学名 *Agapanthia daurica sakaii* Hayashi

山地の草原に生息している種類であり、個体数は少ない。このような生息環境はもともと不安定で開発の影響も受けやすく、個体群を維持できるような地域は減少しているものと思われる。本種は本州北部に分布し、県内では五所川原市飯詰で1974年5月21日に1雌採集されている（阿部・藤田, 1976）。成虫はヨモギやハンゴンソウなどの草本の葉や茎に見出され、幼虫はハンゴンソウの茎を食べる。

遷移の進行や山地開発により、本種の生息地は減少しているものと思われる。山間地の生息環境の保全が望まれる。（今純一）

コウチュウ目 カミキリムシ科**C**

和名 ヒメビロウドカミキリ

環境省：情報不足

学名 *Acalolepta degener* (Bates)

本種は、個体数の少ない種類で低地の草原に生息する。このような生息環境は植生遷移や開発の影響を受けやすい。本種の東北地方での分布は深浦町や秋田県岩館村に限られる。県内では、深浦町で1991年7月27日に2個体（尾崎・戸, 1992）、深浦町岩崎で1992年7月25日～1992年8月29日に数10個体（三上, 1993）、深浦町岩崎で1995年7月9日に9個体（三上私信, 1999）が、海岸域で採集されている。成虫は草地のオトコヨモギやヨモギに集まり、幼虫はこの茎に穿入して加害する。

護岸工事やオートキャンプ場の建設などにより、本種の生息地は減少しつつあり、海岸の自然草地の保全が望まれる。（今純一）

コウチュウ目 ハムシ科**C**

和名 キアシネクイハムシ

環境省：該当なし

学名 *Donacia bicoloricornis* Chen

本種の国内での分布は本州（青森県、千葉県、茨城県）で、産地は局所的である（木元・滝沢, 1994）。県内では、三沢市仏沼、野辺地町巫子沼（野尻湖昆虫グループ, 1985）、深浦町追良瀬川（木元, 1989）などから記録されている。成虫も食葉性で灯火にも飛来する（小宮ら, 1986；富永, 1986）。以前に*D. simplex*トミナガネクイハムシと呼ばれていた（小宮ら, 1986）。

本種の生育に適した水草の繁茂した湖沼が、開発や外来魚移入等のため水質が悪化し、水草が減少している。生息に適した池沼が少なくなっており、生息の脅威となっている。（山内智）

コウチュウ目 ハムシ科**C**

和名 キイロカメノコハムシ

環境省：該当なし

学名 *Cassida concha* Solsky

本種の国内での分布は、東北地方（青森県、岩手県、秋田県、山形県）と京都府、山梨県で、国外では朝鮮半島、シベリア東部、中国東北部などである（木元・滝沢, 1994；安富ら, 1997, 1999）。珍しい種類で、分布は局所的で希少種である。県内では、八戸市白浜・種差～大久喜、階上町小舟渡・階上岳、黒石市黒森山（安富ら, 1997）、八戸市是川・新井田、東通村尻屋崎（安富ら, 1999）などから記録されている。本種の食草はフシグロセンノウやカワラナデシコなどのナデシコ科である。

本種は、全国的に生息地が限られているが、園芸種のナデシコからも発見（安富ら, 1999）されていることから、今後の分布や生態などについて継続した調査が望まれる。（山内智）

コウチュウ目 ハムシ科**C**

和名 ベニカメノコハムシ

環境省：該当なし

学名 *Cassida murraea* Linnaeus

本種の国内での分布は東北地方（青森県、岩手県、宮城県）で、生息地は局地的で希少種である。国内では、1933年十和田市猿倉温泉（渡邊, 1935）で初めて記録された（Kimoto, 1966）。近年は個体数が減少している。県内では、八戸市（福田, 1956, 1969b）、十和田（Kimoto, 1966）、十和田市睡蓮沼（安富, 1991）などから記録されている。県内では八甲田山地での記録が多く、湿地帯のミズギクを食草（安富, 1991）としている。

本種の生息地の一つである八甲田山地は、十和田八幡平国立公園内で採集は禁止されているが、湿地への入山者立ち入りや採集者の乱獲によって減少している。（山内智）

コウチュウ目 ハムシ科**C**

和名 スジキイロカメノコハムシ

環境省：該当なし

学名 *Cassida nobilis* Linnaeus

本種は、国内では青森県、山形県、群馬県に分布し、生息地は局所的で、国内では採集例、個体数とも大変少ない希少種である（木元・滝沢, 1994）。県内からは、八戸市、八戸市大久保（安富・富岡, 1988）などがある。国内ではアカザが食草として確認されている（安富・富岡, 1988）。近年、青森県にも記録のあった*C. velaris* チャイロカメノコハムシと同種であることがわかった（安富, 1991）。

八戸市で確認された生息地は、宅地化しており（安富・富岡, 1988）、生息地付近の食草が刈り取られることが生存の脅威となっている。今後分布や生態についての継続した調査が望まれる。

（山内智）

コウチュウ目 ハムシ科**C**

和名 オオルリハムシ

環境省：情報不足

学名 *Chrysolina virgata* (Motschulsky)

本種の国内での分布は本州である。その分布の明細は岩井・八木（2003）が詳しくまとめている。それによると県内では文献記録も含め、つがる市平滝沼・牛滝沼、五所川原市十三、東通村下田代・野牛沼、野辺地町巫女沼、六ヶ所村市柳沼・鷹架沼・二又、三沢市仏沼、八戸市市川・桔梗野の地域を上げている。この他に六ヶ所村内沼（阿部ら, 2004）が記録されており、概ね津軽半島の屏風山地区の湿地帯、下北半島から八戸市にかけての湖沼地帯に見られる。本種の食草はシロネやヒメシロネが確認されている（岩井・八木, 2003）。このような植物が繁茂する湿地は減少してきており、何らかの保護対策が望まれる。（山内智）

ハチ目 オナゴコバチ科**C**

和名 オナガアシプトコバチ

環境省：該当なし

学名 *Podagrion nipponicum* Habu

体長3～4mm位のやや細型で、雌は体長と同じくらいの長い産卵管をもつ。頭、胸部が黒色で青色光沢があり、腹部は赤褐色から黒色、後腿節が大きく膨らみ、下部に歯状突起がある。本県は分布上の北限であり、寄主であるオオカマキリの生息できる環境が減少している。本種は本州・四国・九州に分布し、八戸市（Habu, 1962）・平滝沼（田中, 1984）・黒石市から知られている。他に石村・佐藤（1941）がカマキリコバチとして黒石市・八戸市を産地としているものも本種と考えられる。オオカマキリの卵のう内で越冬し、6月頃寄主がふ化する少し前に羽化する。その後カマキリの産卵が行われる9月までの所在が判らず、これが低寄生率や個体数減少と関係ある可能性もある。

（山田雅輝）

ハチ目 アナバチ科**C**

和名 ニッポンハナダカバチ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Bembix niponica* F. Smith

体長20～23mmで豊富な体型をし、体色は黒色で、黄白色の横縞模様がある。上唇が異常に長く、前単眼は不整形である。日本固有種であり、北海道から九州、屋久島まで広く分布するが、生息環境が限定される。県内では主に日本海および太平洋沿岸に散在する砂丘地に生息し、また、陸奥湾沿岸にも一部生息地がある。従前は内陸の岩木川など大きな川の河川敷にも普通に生息していたが、河川敷の生態系が激変し、壊滅状態となった。成虫は7～9月に活動し、砂地に深く穴を掘って巣を作り、幼虫の餌として大型のアブ類を狩り、幼虫が成長するまで随時給餌する。砂があまり移動しないで、草も伸びないような適地には集団営巣地が形成されるが、そのような場所は少ない。

（山田雅輝）

ハチ目 アナバチ科**C**

和名 シモヤマギングチ

環境省：該当なし

学名 *Ceratocrabro shimoyamai* (Tsuneki)

体長7mm前後でやや太型、全体黒色で頭が大きく、腹部が短い3頭身型である。十和田山地の1個体により1958年に新種記載され、その後も青森県と福井県から数個体の記録があるだけで、極めて希少な日本固有種である。県内では十和田山地で2個体の採集記録があって以来35年間途絶えていたが、1997年に八甲田山地で再発見された。成虫は7～9月に活動し、立ち枯れたブナに穿孔して巣を作り、クロバエ科やイエバエ科の成虫を狩って幼虫の餌とする。本種の生存にはある程度腐朽して穿孔可能な太い立木が必要なので、そのような枯木が残されている原生林が主な生息地となっている。また、その詳しい生態も解明されていないなど学問的にも貴重な種である。（山田雅輝）

ハチ目 アナバチ科**C**

和名 ササキリギングチ

環境省：該当なし

学名 *Ectemnius furuichii* (Iwata)

体長9～14mm、普通形、体色は黒色で腹部に黄色斑があり、単眼は低三角形に配置され、腹部末端に褐色毛が密生している。本州と朝鮮半島に分布するが、全国的に少ない種で、青森県が北限に当たる。県内では十和田山地・八甲田山地・白神山地・戸来岳・川内町などで得られている。生息地は枯死樹が放置されるような原生林及びそれに近い広葉樹林に限定される。成虫は7～8月に活動し、広葉樹の立ち枯れた樹に穿孔して営巣し、ササキリを狩って幼虫の餌として与える。従って本種の生存にはササキリの生息も必須の条件であり、営巣素材と合わせ、両者が共存するような森林の維持が重要である。

（山田雅輝）

ハチ目 アナバチ科**C**

和名 ニトベギングチ

環境省：情報不足

学名 *Spadicocrabro nitobei* (Matsumura)

体長11~17mm、普通体型、体色は黒色で、第1~3腹節に褐色の帯状斑がある。単眼は低三角形に配置され、額印がはっきりし、腹部にも点刻が密生する。青森県を基準産地とする全国的に希少な種であり、生息条件が自然度の高い森林に限定されて環境変化の影響を受けやすい。本州に分布し、県内では白神山地・相馬・青森・十和田湖町・田子町・小泊などで生息が確認されている。成虫は7~9月に現れブナ、トチなどの枯木に穿孔して巣を作り、大型のシタバやシャクガのようなガ類の成虫を狩って、幼虫の餌とする。本種の生息地は広葉樹林が発達した山地で、適度に腐朽したための立ち枯れ樹が経年的に存在するようなところである。(山田雅輝)

ハチ目 ヒメハナバチ科**C**

和名 エチゼンヒメハナバチ

環境省：該当なし

学名 *Andrena echizenia* Hirashima et Haneda

体長8~10mmの標準的体型のハナバチで、体色は黒色、前胸はやや角張り、外皮は明瞭な皺刻がある。中胸背は滑らかで光沢があり、点刻はなく、後縁に白色帯がある。北海道と本州に分布し、県内では唯一弘前市の岩木川河川敷で認められている。生息地は河川改修のあまり行われていない極めて限定された地域である。成虫は4月下旬に出現して、ヤナギの花から花粉を集める。羽田(1989)によると営巣は河川敷の砂地に穴を掘って行い、適当な砂地があるとそこに営巣団地が形成されることもある。河川敷は上流のダム建設や河川改修で、環境が改変されることが多く、不安定な場所である。(山田雅輝)

ハチ目 ケアシハナバチ科**C**

和名 シロアシクサレダマバチ (クロツヤクサレダマバチ)

環境省：該当なし

学名 *Macropis tibialis* Yasumatsu et Hirashima

体長8.5~11mm、体色は黒色で、前翅肘室が3個あり、後脚第1付節に刷毛が生えている。雄は脚に黄斑があり、雌は頭楯に密毛があって、頬と頭頂の点刻が弱い。北海道と本州に分布し、本州では今のところ青森県だけである。県内では岩木山麓の長平・弥生・岳温泉、黒石市・菱喰山・川原平・夏泊半島などで認められているが、各地とも分布域が狭く、特定の花に依存しているため、生息できる環境条件が限られている。成虫は7月下旬~8月にかけて活動し、アワブキを訪れる。中でもクサレダマが花粉採集源として利用されている。巣は粘土質の裸地に穿孔して作る。粘土地を控えたクサレダマ生育地は極めて限定された地域しかない。(山田雅輝)

ハエ目 カ科**C**

和名 トワダオオカ

環境省：該当なし

学名 *Toxorhynchites towadensis* (Matsumura)

本種は、十和田湖の標本で新種記載(松村, 1916)された、青藍色の美麗種である。産地が局所的で希少種である。また、自然度の高い樹林に生息することから、指標昆虫の一つでもある(大野, 1989)。

本種は、北海道、本州、四国、九州に生息する日本固有種である。県内では、十和田(松村, 1916)、青森市梵珠山(石村, 1952a)、黒石市浅瀬石川流域(内田, 1962)、十和田市焼山・休屋・御鼻部山・猿倉、平川市沖揚平(阿部, 1980)、むつ市川内(下山ら, 1986)、青森市酸ヶ湯、十和田市猿倉・蔦(大野, 1989)、西目屋村大川・湯ノ沢、鯨ヶ沢町櫛石山・赤石川(阿部・山内, 1989)などの記録がある。本種は吸血性でなく、幼虫はブナ等の樹洞の水溜りに生息し他の蚊の幼虫を捕食する(石村, 1952)。(山内智)

チョウ目 メイガ科**C**

和名 ソトシロスジミズメイガ

環境省：該当なし

学名 *Nymphula distinctalis* (Ragonot)

本種の国内の分布は北海道函館の2雄の記録 (Yosiyasu, 1985) と東通村大利の記録 (佐々木・葛西, 1994) などが知られている。大変希少な種類である。

本種の日本における詳しい生態は不明であるが、ヨーロッパでは幼虫がコウホネ属、ミクリ属、ヒルムシロ属、スイレン属などを食草 (井上ら, 1982) としていることから、東通村大利では食草となる水生植物の繁茂した湖沼に生息すると推定される。この湖沼は主に農業用水等に活用されているが、湖沼の環境が維持されることが望まれる。 (山内智)

チョウ目 セセリチョウ科**C**

和名 アオバセセリ

環境省：該当なし

学名 *Choaspes benjaminii japonica* (Murray)

東洋熱帯系の暖地性の種で、国内では本州・四国・九州・南西諸島に分布し、本県が北限の希少種。県南地方 (名久井岳など) ・西海岸地方 (深浦町) ・青森市梵珠山に限定された生息圏があり、弘前市久渡寺山や青森市高野山にも記録がある。

6月と8月の年2回の発生。幼虫の食餌植物はアワブキで幼虫期に葉を筒状にして巣を作る独特の習性がある。成虫の飛翔は極めて敏捷で雄は山頂に集まり、一定の空間を占有して飛び回る習性がある。アワブキそのものが暖地性で、梵珠山や名久井岳に自生するが群落規模が小さく、さらに両地では観光地の整備として伐採が進み、生息域が縮小した。植生環境などの保全が課題である。 (室谷洋司)

チョウ目 セセリチョウ科**C**

和名 ミヤマチャバネセセリ

環境省：該当なし

学名 *Pelopidas jansonis* (Butler)

本州から九州まで広く分布し、本県がその北限。県内では平地から山地の草原に広く記録があるが、一般的に個体数は少なく散発的である。その中でも屏風山一帯 (つがる市) には多産地があった。5月と8月を中心にした年2回の発生。幼虫の食餌植物はススキ類で、蛹で越冬する。

生息環境はススキ類を含む草原で、このようなところは県内各所に存在するが個体数の減少は顕著である。上記の多産した屏風山では、1990年代に生息地そのものが耕地化などで失われた。一般に草原性チョウ類の衰退が目だっているが、それは幼虫の食餌植物の増減だけに起因するものではない。これらに共通した生息上の欠落要素は何かを調査し、保全策を考える必要がある。 (室谷洋司)

チョウ目 セセリチョウ科**C**

和名 オオチャバネセセリ

環境省：該当なし

学名 *Polytremis pellucida pellucida* (Murray)

北海道から九州まで広く分布する。県内では平地から山地にかけて各所に見られ、生息地は明るい田畑に接した草地から林縁・草原で、幼虫の食餌植物はクマイザサなどタケ科植物。発生は7～9月で、とくに成虫期の後半には個体数が夥しい普通種であった。ところが1990年代に入り個体数の減少が認められ、その後の継続観察からも衰退が確認されている (工藤, 2003)。

食餌植物などは普遍的で減少していることは認めがたく、その原因には不明な点が多いが、伝統的な里地・里山管理が行われなくなつてから植物の多様性が失われ、陽地性の草花など成虫の吸蜜源の減少などが影響している可能性があり、引き続き調査が必要である。 (室谷洋司)

チョウ目 セセリチョウ科**C**

和名 スジグロチャバネセセリ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Thymelicus leoninus leoninus* (Butler)

北海道から九州まで広く分布するが、生息地は局所的でどこにでも見られる種ではない。北海道では渡島半島など道南に限定。県内分布は全県に広いが産地は限定され、しかも生息範囲は狭い。成虫の発生は年1回で7～8月。生息環境は明るい林内や林縁で、幼虫の食餌植物となるイネ科植物を含む草地である。生息適地には多くの個体数が見られる場合がある。1980年代までは、このような産地が県内各所に見られた（一戸, 1980）。

1990年代以降、伝統的な里地・里山の管理がなされなくなり、このような生息環境そのものが失われるとか、環境悪化から個体数が激減している。（室谷洋司）

チョウ目 シロチョウ科**C**

和名 ヒメシロチョウ

環境省：絶滅危惧II類

学名 *Leptidea amurensis* (Ménétrières)

北海道・本州・九州に分布し、県内では各地に普通だったが、開発や植生変化による生息環境の悪化で、著しい減少傾向にある。他県では絶滅した所が多い。

4月下旬～9月にかけて年3回の発生。平地から低山地にかけての沼・河川の土手、田畑の縁、山間・林縁の草地などに普通に見られ、生息地には幼虫が食べるマメ科のツルフジバカマなどが密な群落をつくっていた。減少の要因は、土手や堤防のコンクリート化・耕地整理・草原の草刈り廃止・道路のアスファルト化などで草原の減少があげられる。津軽・下北両半島の海浜沿いの草地には良好な生息地が残っているが、生物多様性維持を念頭においた計画的な環境の整備が必要である。（三浦博）

チョウ目 シジミチョウ科**C**

和名 ヒメシジミ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Plebejus argus micrargus* (Butler)

国内では、北海道・本州・九州に分布する。県内では各地に確認されているが、生息地は極限され離散的である。いずれの生息地でも減少傾向にある。

年1回の発生で7月上旬より出現。成虫の吸蜜源植物はアザミ・シロツメクサ・オカトラノオなどで、幼虫の食餌植物はヨモギ・ハギ・キイチゴが確認されている（工藤, 1987）。生息環境は、道路沿いの荒地・山腹斜面・谷筋沿いの草地・休耕田周辺などで、このような場所に食餌植物が豊富である。近年、これらは駐車場・路側帯の舗装、観光地・ゴルフ場・放牧地の造成、側溝整備などで、生息地が根こそぎ掘り起こされ各所で絶滅あるいは激減の傾向にある。（三浦博）

チョウ目 シジミチョウ科**C**

和名 ウラナミアカシジミ

環境省：該当なし

学名 *Japonica saepestriata* (Hewitson)

国内では、北海道・本州・四国に分布。県内では限られた各地の低標高地、里山のコナラ・ミズナラの雑木林を生息地としている。1970年代までは各地に多産地が知られ、青森市・弘前市・黒石市などの近郊の低丘陵地のコナラ林では、夕刻になると成虫の群飛が毎日のように観察された。

年1回の発生で6月下旬～7月中旬にかけて出現。幼虫の食餌植物はコナラが主体で、コナラ中心の雑木林を生息地としている。1980年代以降、これらの多くは畑地・果樹園への転用、スギへの樹種更新、平地部の宅地化など、里に近い所からコナラ林は消失して行った。一部に残ったコナラ林は高木となり、本種の生息環境としては著しく悪化し、総じて本種も急速に減少した。

（三浦博）

チョウ目 シジミチョウ科**C**

和名 ゴマシジミ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Maculinea teleius shiriyensis* (Matsumura)

北海道から九州まで分布するが生息地は極限され、消滅あるいは減少傾向。東北地方では現在、青森・岩手両県に生息し、岩手県では数か所にまで減少。本県の分布は広いが生息環境は湿原・田畑の近傍・休耕田・荒地などで、幼虫の食餌植物のナガボノシロワレモコウが繁茂する地域に限定。

発生は7月下旬～8月。母チョウは食餌植物の花蕾に産卵し幼虫は、前半は花穂を、後半は花穂から降りてクシケアリ類の巢中に入りアリの幼虫を食べる。この特異な生態を初めて解明したのは青森市の石村清（石村, 1952b）で、観察地は青森市三内であった。現在、多くの生息地が開発やヨシ群落などへの遷移で消滅傾向。保全には開発規制や人手による遷移抑制が必要である。

(室谷洋司)

チョウ目 シジミチョウ科**C**

和名 ミヤマカラスシジミ

環境省：該当なし

学名 *Fixsenia mera* (Janson)

北海道から九州まで広く分布するが、北海道では渡島半島に限定される。県内では各所に広く分布し、成虫は年1回7～8月に発生。生息地は明るい雑木林から林縁・湿原で、幼虫の食餌植物のクロウメモドキに制約され普遍的な種ではないが、個体数は少ないものではなかった。

同じ植物に依存するスジボソヤマキチョウと同じように1990年代後半から減少が顕著で、この植物を含む生息環境の悪化が主因である。クロウメモドキの実生は各所に数多く見られるが、草刈などの管理がなされないため、林床が暗化し生長が阻害されている。あるいは田畑周辺や林縁に生長したものは機械草刈で失われてしまう。食餌植物の増殖が効果的な保全策につながる。(室谷洋司)

チョウ目 テングチョウ科**C**

和名 テングチョウ

環境省：該当なし

学名 *Libythea celtis celtoides* Fruhstorfer

国内全域に分布するが、北海道ではまれな種。隣接の岩手県では生息地が広く個体数も多い。県内では普遍的ではないが八戸市・名川町・田子町・新郷村・階上町の県南地方に広く記録され、津軽地方では青森市・平川市・黒石市・中泊町（旧小泊村）・深浦町に散発的な記録がある。発生は年1回で6月下旬に出現するが間もなく姿をかくし、そのまま越冬に入る。成虫は翌春4月上旬に再び姿を現すという周年経過を示す。幼生期の食餌植物はエゾエノキである。

1970年代までは県南地方各所で個体数も多く記録されていたが、近年は途絶えがち。エゾエノキは里山の雑木林に多いが、伐採や老木化による枯死が進むなど環境の悪化が懸念される。

(室谷洋司)

チョウ目 タテハチョウ科**C**

和名 ホシミスジ

環境省：該当なし

学名 *Neptis pryeri pryeri* Butler

本州・四国・九州に分布する。中部地方では分布域も広く各地に普通であるが、東北地方では局所的になり本県が北限。県内では県南地方の特産種で、1962年に八戸市是川で初記録がなされて以降、南部町・五戸町・三戸町などで生息地が確認。発生は6月中旬～8月下旬の年1回。

中部地方の多産地では、シモツケ類の自生する明るい疎林や林縁部に多く見られるが、県内の発生地の特徴は、一般の人家や畑地境界に植えられたユキヤナギ・コデマリなどの栽培植物に発生していることである。このような地域は常に宅地造成や伐採などの危機にさらされており、北限の種を保存する意味からも、発生地の保全などの対策が必要である。

(室谷洋司)

チョウ目 タテハチョウ科**C**

和名 オオムラサキ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Sasakia charonda charonda* (Hewitson)

「国蝶」として日本を代表する美麗種。国外では中国大陸・台湾・朝鮮半島、国内では北海道（西部）・本州・四国・九州に分布する。県内の分布は極限され、幼虫が食べるエゾエノキが激減していることから個体数も減少している。

発生は7月上旬～8月上旬までの年1回。成虫はハルニレ・ミズナラ・カエデ・サワグルミなどの樹液に集まるほか、腐果物や汚物などでも吸汁する。幼虫が依存するエゾエノキは社寺林、民家周辺、平地に接した二次林内に見出され、近年その価値がわからないままに伐採され、スギ林に樹種更新されることが多い。こうした里山も積極的に保存の方向に向かうべきと考えられる。

(三浦博)

チョウ目 タテハチョウ科**C**

和名 ヒョウモンチョウ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Brenthis daphne* (Denis et Schiffermüller)

北海道から本州に分布するが、本州では東北・北関東・中部地方に限られる。県内では各所に見られ東北地方で最も産地が多いことで知られる。しかし生息地は、幼虫の食餌植物のナガボノシロワレモコウの群落があるところに限られることから局所的。発生は7～8月までの年1回。

1990年代以降、生息地ならびに個体数が減少傾向にあり、生息環境の消滅と悪化が要因である。ナガボノシロワレモコウは平地から山地の湿原や草原に密な群落を形成するが、ヨシなどの侵入で植物遷移が進み減少が顕著。また平坦地であることから開畑・ゴルフ場・宅地化など開発の対象となり多くが失われた。保全には残存している発生地の植物遷移の抑制などの対応が必要である。

(室谷洋司)

チョウ目 タテハチョウ科**C**

和名 ウラギンスジヒョウモン

環境省：準絶滅危惧

学名 *Argyronome laodice japonica* (Ménétrières)

北海道から九州まで広く分布する。県内では平地から低山地の田畑周辺や林縁の草地に見られる。成虫は年1回7月から発生し、高温期には一時休眠し8月後半～9月にかけて再び姿を現す。

幼虫の食餌植物はスミレ類で普遍的。したがって何処でも個体数が多い普通種であった。ところが2000年代以降、個体数に減少傾向が認められるようになった。継続調査から分かったことは、本種の産卵行動を観察すると、近縁の他種に比べて日当たりのよい草地への嗜好性が強いことである。近年、生息地の草地は定期的な草刈などがなされなくなり地表の暗化が進んだ。日当たりのよい植生環境の減少が、本種の生息に負の影響を及ぼしているものと考えられる。

(室谷洋司)

チョウ目 ジャノメチョウ科**C**

和名 ヒカゲチョウ

環境省：該当なし

学名 *Lethe sicelis* (Hewitson)

日本特産種で、本州・四国・九州に分布。本県は北限の生息地で非常にまれな種である。県内の記録は新郷村平子沢・迷ヶ平と十和田市（焼山・仙人平）などで、発生地は局限されている。成虫の発生は、県外では5～6月と8～9月の年2回。県内の記録は7月下旬～8月上旬になされていることから年1回と判断される。幼虫の食餌植物はタケ科のクマイザサが確認されている。

一般に暖かい地方では平野部を生息域としているが、県内では山地に限られていることから生態上の調査が望まれる。また、北限の生息地付近にゴルフ場が造成されるなど、十分な調査が行われないまま現在に至っており、生息環境が失われる危険性ははらんでいる。

(室谷洋司)

チョウ目 シャクガ科**C**

和名 クロフカバシャク

環境省：準絶滅危惧

学名 *Archiearis notha okanoi* (Inoue)

本亜種は、岩手県繋温泉で採集された1雄によって新種記載された。岩手県以外では県内の平川市唐竹(菊池, 1981)、弘前市和徳町(杉木, 1986)で記録されている希少種である。

本亜種の幼虫はヤマナラシ属を食するが、岩手県の産地では、ゴルフ場の造成により自然生育のヤマナラシ属が伐採され、植栽されたポプラに寄生していることが知られている(井上ら, 1982; 環境省, 2006)。植栽したポプラが緊急避難的な食樹になるが、個体数や生息地が少ないだけにドロノキやヤマナラシの減少が脅威となる。

(山内智)

チョウ目 シャクガ科**C**

和名 エゾヤエナミシャク

環境省：該当なし

学名 *Philereme corrugata* (Butler)

本種は、北海道、本州、九州に分布する、大変に珍しい希少種で産地も局所的である。県内からは、つがる市高山稻荷(葛西・佐藤, 1977)、東通村大利(葛西, 1989a)の記録が知られている。

本種の幼虫はキビノクロウメモドキなどのクロウメモドキ属を食草とすることが知られている(井上ら, 1982)。生息地が限定されるだけに、生息地での食草の減少が脅威となる。

(山内智)

チョウ目 シャクガ科**C**

和名 シロマダラカバナミシャク

環境省：該当なし

学名 *Eupithecia extensaria leuca* Dietze

本亜種の、国内での分布は青森県の他、岩手県や秋田県などでしか記録されておらず、分布も局所的で個体数も非常に少ない種類である。県内からは青森市大滝平(葛西・佐藤, 1977)、三沢市仏沼(阿部ら, 2001)から記録されている。

幼虫は、ヨーロッパではヨモギ属を食草(井上ら, 1982)としているが、国内での詳しい生態は不明であり、今後の調査が待たれる。

(山内智)

チョウ目 シャクガ科**C**

和名 フチグロトゲエダシャク

環境省：該当なし

学名 *Nyssiodes lefuarius* (Erschoff)

成虫は4~5月上旬に出現し昼間活発に飛ぶ。雄の触角は特徴的な長い羽毛状で、翅は黄白色地に黒褐色の幅広い縁取りがあって美しいが、飛行中は目立たない。雌は翅が退化しており広範囲の移動産卵ができない特性がある。幼虫は多食性で、タデ・マメ・バラ・キクの各科につく。国内では北海道・本州・四国・九州に分布するがいずれも産地に限られる。県内では現在のところ岩木川下流域の河川敷、及びその周辺の田畑地でのみ見られる。このような環境の開発が進む埼玉県などでは、すでに絶滅危惧種に指定されている。本県でも以前は旧金木町の住宅周辺にも生息していたという(鈴樹, 未発表)が、現在では宅地や大型郊外店などの進出で整備が進んでいる。

(佐藤博)

チョウ目 ヤガ科**C**和名 **ダイセツヤガ**

環境省：該当なし

学名 *Xestia albuncula* (Eversmann)

本種の国内での分布は北海道（大雪山、斜里岳、知床半島など）と本州（八甲田山、岩手山、鳥海山、月山、朝日連峰、飯豊連峰、飛騨山脈、八ヶ岳、赤石山脈など）の山岳地帯で、高山性の蛾である（井上寛ら, 1982）。生息地も限られ希少種である。県内では八甲田山からのみ知られており、最近の記録では八甲田山（葛西, 1986）と青森市大岳（神保ら, 1991）がある。

本種は高山と言う特殊な環境に好んで生活し、各生息地の分布範囲は狭い。生息地の八甲田山は国立公園に指定され保護されており、入山者の増加などによる裸地化対策などに官民一体となって取り組んでいるが、環境の悪化が脅威となる。

(山内智)

チョウ目 ヤガ科**C**和名 **ヨスジカバイロアツバ**

環境省：該当なし

学名 *Herminia robiginosa* Staudinger

本種の国内での分布は北海道、青森県、秋田県の湿地帯で、極めて少ない種類である。国外ではアムール、朝鮮半島、南千島列島から知られている。県内では、つがる市平滝沼（葛西, 1983b）、つがる市屏風山（工藤, 1985）、つがる市筒木坂（亀田・山内, 2005）、つがる市ベンセ沼（亀田・山内, 2002）、つがる市大滝沼（亀田・山内, 2003）、東通村大利（葛西, 1988b）、三沢市仏沼（阿部ら, 2001）などの湿地草原から記録されている。

本種の日本における詳しい分布や生態は不明であるが、湿地草原に限って確認されている。湖沼群を含む湿地帯が開墾等で減少することが脅威となる。

(山内智)

チョウ目 ヤガ科**C**和名 **ミスジキリガ**

環境省：該当なし

学名 *Jodia sericea* (Butler)

本種の前翅は橙赤色で後翅は紅が混じった白色である（井上ら, 1982）。国内での分布は本州、四国、九州であるが、やや局地的な種類である（井上ら, 1982）。県内では、青森市梵珠山・浅虫・大谷（葛西, 1984）、青森市大釈迦・高田・谷地山（葛西・佐藤, 1979）から記録されている。

本種の産地は落葉二次林で、東北地方ではカシワ林で得られている（井上ら, 1982）。県内の産地もカシワ林が見られる地区であるが、近年各地のカシワ林は開発などで減少してきている。今後、まだ生息が確認されていない、つがる市屏風山など広域にカシワ林が残っている地区での詳しい調査が望まれる。

(山内智)

チョウ目 ヤガ科**C**和名 **ガマヨトウ**

環境省：該当なし

学名 *Archanara aerata* (Butler)

開張33mm前後。本種の前翅は黄褐色から赤褐色で、斑紋は明確でなく外横線の黒点列が目立つ（江崎ら, 1975；井上ら, 1982）。国内での分布は、北海道や本州（東北地方、関東地方）であるが、個体数は少ない（井上ら, 1982）。県内では、つがる市大滝沼・平滝沼（工藤, 1983）、東通村大利（佐藤, 1985）、三沢市仏沼（オオセッカの生態環境研究グループ, 1999）の湿地帯から記録されている。

低層湿原に生息し（井上ら, 1982）、マコモを食草（岩手県, 2001）にすることが知られているが、開発などで湿地が減少してきていることから、今後の早急な湿地の保全が望まれる。

(山内智)

和名 オオチャバネヨトウ

環境省：該当なし

学名 *Nonagria puengeleri* (Schawerda)

中型のヤガで開張は雄で40mm内外、雌は50mmを越すものもある。前翅は暗褐色で目立つ斑紋はなく後翅は黄白色。成虫は7～8月に出現する。国内では北海道・本州・九州で局地的に記録されているがまれな種である。群馬県や岡山県では絶滅危惧種、千葉県では重要保護生物に指定されている。本県でも採集例は少なく、現在のところ黒石市境松（1978）・軍馬平（1985）（佐藤, 1985）、ベンセ沼（2006）（佐藤, 未発表）で、各1個体が記録されているにすぎない。ガマの茎から幼虫が見出されたことから、ガマなどの湿原性単子葉植物の繁茂する沼地などに生息すると考えられる。このような環境は開発による環境変化が懸念され、本種の生息を危ういものにする可能性がある。

（佐藤博）

トビムシ目 シロトビムシ科**D**

和名 エビガラトビムシ

学名 *Homaloproctus sauteri* Börner

環境省：該当なし

本種の体長は4～5mmと大型種である。体色は黒褐色から黒紫色であり、眼がなく、PA0（触角後器）は小さい。跳躍器はやや発達し尾角はない。擬小眼が各体節表面に規則的に配列する。日本固有種で、国内では山梨、福岡、大阪、京都、福井、富山、群馬の各府県で採集され、県内では弘前市と黒石市青荷から雪の上・コケ類中から採集されている（Uchida, 1953）。この他、弘前市岩木山（須摩・山内, 2006）から記録されている。

(須摩靖彦)

トビムシ目 ヤマトトビムシ科**D**

和名 エサキウミトビムシ

学名 *Oudemansia esakii* (Kinoshita)

環境省：該当なし

本種は体長2.5mm内外、体は細長く口が突出する。体色は黒藍色、環節や背板・腹板の所々に白条や白点がある。小眼は8個、PA0（触角後器）はなく、跳躍器は短い。長崎県対馬の海岸波打ち際で最初に発見、その後和歌山県瀬戸白浜、潮の岬で見つかった。県内では青森市浅虫の海岸の石下で発見され（内田, 1952）、その後記録はない。最近ハワイ、香港の海岸で見つかり、太平洋沿岸で広く分布する種であることが分かった。本県は北限に位置する。

(須摩靖彦)

トビムシ目 イボトビムシ科**D**

和名 キボシアオイボトビムシ

学名 *Morulina gilvipunctata* (Uchida)

環境省：該当なし

本種の体長は2～3mmで、各節に長い剛毛の生えた半球状イボがあり、腹部末部の節にはイボ2個の突起がある。体色は青黒色で黄色の斑紋があり、眼は小眼5個、PA0（触角後器）は楕円形で200個余の副瘤がある。青森県の黒石市中野山から採集し新種記載された（内田, 1938）。その後、むつ市恐山、黒石市青荷（鳴海, 1951）や秋田県・山形県でも採集された、北方系の種である。主に森林土壌、落葉下、腐木、石下や時々キノコの傘中に集まることもある。

(須摩靖彦)

トビムシ目 マルトトビムシ科**D**

和名 コシダカマルトビムシ

学名 *Gibberathrix tsugarensis* Uchida

環境省：該当なし

本種の体長は1.8mmの球形で、胴部の背部が大きく上に突き出ているのが特徴である。体色は薄黄色の地色に紫色の模様がある。触角第3節の先端に指状突起があるのも特徴である。1属1種である。分布は青森県のみで、平川市竹館と黒石市青荷から湿った枯葉の下と湿った土から採集されたものを新種記載した（Uchida, 1952）。最近むつ市北国山からブナ林の土壌から採集された（須摩・山内, 1988）。

(須摩靖彦)

トビムシ目 マルトトビムシ科**D**

和名 ミツワマルトビムシ

学名 *Ptenothrix tricycla* Uchida

環境省：該当なし

本種の体長は2mm前後の球形で、体色は黄色の地色で、頭部は黒紫色、胴部の背面に二重の褐色の輪があり、その外の側板と肛生殖節に焦げ茶色の輪があり、全体で三重の同心円の輪を構成する美麗種である。分布は青森県のみで、黒石市青荷・山形の湿った落葉下、倒木樹皮やハイマツ樹皮から採集し、新種として発表された（内田, 1953）。その後八甲田大岳（Uchida, 1969）、むつ市恐山（須摩ら, 2003）などから記録された。

(須摩靖彦)

バッタ目 コオロギ科**D**

和名 エゾエンマコオロギ

学名 *Teleogryllus yezoemma*
(Ohmachi et Matsuura)

環境省：該当なし

河川敷の礫地に生息する種であるが、河川改修に伴い生息環境が悪化していると考えられる。松浦（1981）の簡単な分布図では弘前と鱒ヶ沢の付近に点があるが、詳細及び根拠は不明で、正式な記録はないようである。2001年の国交省の河川水辺の国勢調査で、八戸市馬淵川河川敷から確認されている。山形県でも準絶滅危惧とされている。

(市田忠夫)

バッタ目 マツムシ科 **D**

和名 カヤコオロギ
 学名 *Euscyrthus japonicus* Shiraki
 環境省：該当なし

草原性の小型コオロギで、草に登って生活し、鳴かない。かつては採草地などに生息していたと考えられるが、草原環境の衰退とともに減少しているようである。本県が北限とされる。土屋(1931)で藤代村(現弘前市)折笠山、市田(1986)で五所川原市(旧市浦村)相内、黒石市教育委員会(2001)でつがる市(旧森田村：1934年の採集標本)から記録されている。五所川原市ではその後の度重なる調査でも再確認できない。

(市田忠夫)

バッタ目 バッタ科 **D**

和名 カワラバッタ
 学名 *Eusphingonotus japonicus* (Saussure)
 環境省：該当なし

記録としては戦前の土屋(1931)による藤代村船水(現弘前市)、石村・佐藤(1941)による浅瀬石村(現黒石市)しかない。河川敷の礫地に生息する種であるが、河川改修に伴い生息環境が悪化していると考えられる。市田が黒石市に赴任した当時(1983~85年頃)旧農業試験場構内で目撃しているが、その後浅瀬石川は河川改修され、浅瀬石橋より下流には礫の河原は存在しなくなった。本県が北限とされる。岩手県で準絶滅危惧相当。

(市田忠夫)

バッタ目 ヒシバッタ科 **D**

和名 トゲヒシバッタ
 学名 *Criotettix japonicus* (de Haan)
 環境省：該当なし

湿地に生息する種で、かつては水田畦畔などにもいたようである。県内では市田・市川(2001)がつがる市(旧木造町)平滝沼から2000年に初めて記録した。個体数は少なく当該年以外には見えない。初記録となった木造町(市田・市川, 2001)の他、黒石市教育委員会(2001)により、森田村産の1937年、黒石市産の1952年の古い標本の存在が確認された。北海道からの記録は再検討が必要である。山形県でも準絶滅危惧とされている。

(市田忠夫)

バッタ目 バッタ科 **D**

和名 ショウリョウバッタモドキ
 学名 *Gonista bicolor* (de Haan)
 環境省：該当なし

本県が北限の草原性のバッタで、かつては採草地などに生息していたと考えられ、草原環境の衰退とともに減少していると思われる。弘前市、黒石市、つがる市森田、三戸町から記録されているが、過去50年以内では1991年のつがる市(旧木造町)平滝沼の記録しかない(市田, 1993)。弘前・黒石・森田の記録はいずれも戦前(石村・佐藤, 1941)、三戸のものは1953年(福田私信)。岩手県で情報不足種、山形県で準絶滅危惧。

(市田忠夫)

バッタ目 バッタ科 **D**

和名 セグロバッタ
 学名 *Eyprepoenemis shirakiacris* Bolivar
 環境省：該当なし

やや湿度の高い草原に生息する種とされる。土屋(1931)により藤代村船水(現弘前市)、石村・佐藤(1941)により中郷村・山形村(ともに現黒石市)、八戸より記録されているが、県内では戦前の確認例しかなく、65年以上確認例が知られていない。本県が北限とされる。山形県で情報不足種。

(市田忠夫)

ガロアムシ目 ガロアムシ科 **D**

和名 ガロアムシ
 学名 *Galloisiana nipponensis* (Caudell et King)
 環境省：該当なし

生きた化石といわれる原始的な昆虫であり、成虫は無翅、体長20mm位で、体型は細長なコオロギ型をし、体色は黄白色に褐色味を帯びる。本州に分布し、県内では成虫が大鰐町と弘前市で各1個体が得られている。ほかに幼生と思われる個体が石川・久渡寺・雷山などでも認められている。山地性で地中に棲み、落葉下で活動することもある。1世代に6年前後を要し、成虫は9~11月に出る(長島, 1982)。肉食性で昆虫、クモなどを餌としている。

(山田雅輝)

カメムシ目 ツノゼミ科

D

和名 ニトベツノゼミ

学名 *Centrotus nitobei* Matsumura

環境省：該当なし

新渡戸稲雄により三本木（現十和田市）で採集された1雌により記載された種で、青森県からはタイプ標本しか得られていない。その後、関東地方などでも発見されており、関東地方では林縁のやや孤立したマユミから発生することが知られている。スジボソヤマキチョウやミヤマカラスシジミなど、林縁を生活の根拠としていた他の昆虫も全国的に減少していることから、本種も生息環境が悪化していることが懸念される。

(市田忠夫)

カメムシ目 ツチカメムシ科

D

和名 シロヘリツチカメムシ

学名 *Canthophorus niveimarginatus* (Scott)

環境省：準絶滅危惧

市田（1989）は、1979年の弘前市と、1935年の八戸市での、それぞれ1頭の標本を紹介した。後者は石村・佐藤（1941）の三戸郡からの記録の根拠標本である。近年全国的に確認例が少なく、環境省の新レッドリストでは準絶滅危惧、山形県では情報不足とされている。半地下性のツチカメムシ類は、一般的な調査では検出しにくい、寄主とされるススキに半寄生するカナビキソウの開花・結実期には、調査効率が良くなると考えられる。

(市田忠夫)

コウチュウ目 オサムシ科

D

和名 チョウカイヒメクロオサムシ

学名 *Leptocarabus opaculus shirahatai* (Nakane)

環境省：該当なし

本亜種は、東北地方に分布する。高山性で産地が限られ、山頂付近の石下等から採集される。県内では、岩木山、青森市大岳、深浦町白神岳（阿部, 1970）、岩木山、八甲田山（下山, 1978a）、青森市大岳、岩木山山頂、深浦町白神岳（阿部, 1980）、青森市城ヶ倉、十和田市高田大岳、弘前市岳、深浦町白神岳（山谷・草刈, 1982b）等の記録があり、岩木山、白神岳、八甲田山で生息が確認されている。

(山内智)

カメムシ目 ナガカメムシ科

D

和名 ハマベナガカメムシ

学名 *Peritrechus femoralis* Kerzhner

環境省：準絶滅危惧

市田（1988）が木造町から記録した1例が知られるのみ。海浜に生息するカメムシで、近年全国的にもほとんど確認されていない。環境省の新レッドリストでは準絶滅危惧、山形県では情報不足とされている。海浜植物の根際で生活するという。地表性のものが多いナガカメムシ科は、植物が繁茂する夏期以降には発見がやや困難となるが、県内の海浜調査は高頻度であり、単に調査技術的な問題だけで本種の確認が少ないとは考えにくい。

(市田忠夫)

アミメカゲロウ目 センプリ科

D

和名 ウスバセンプリ

学名 *Nipponosialis jezoensis jezoensis*

(Okamoto)

環境省：該当なし

県内では、青森市田代平、大畑町三右衛門沢より記録されている。全国的にも記録が非常に少なく、原名亜種は北海道（数例）・本県（2例）・岩手県（1例）・極東ロシアから確認されている（林, 1995）が、幼虫の生息場所は明らかにされていない。恐らく細流から発生しているものと思われる。そうであれば各地に生息可能な環境は残されているものの、確認するのが困難な希少種である。北海道では希少種。

(市田忠夫)

コウチュウ目 オサムシ科

D

和名 シラカミナガチビゴミムシ

学名 *Trechiana albidivalis* S. Uéno

環境省：該当なし

本種は、世界自然遺産「白神山地」の固有種で、土中の浅層に生息している。体長6mm内外と小さく、後翅が退化して、移動力が低い。環境の変化に大変敏感な種類である。

1986・1989年深浦町天狗峠、1986年深浦町一ツ森、1989年鯉ヶ沢町乱岩ノ森、1979・1986年深浦町青池、1992・1993年深浦町白神岳、1989年鯉ヶ沢町二ツ森、そして秋田県の藤里町で採集された資料によって新種記載（Uéno, 1994）された。

(山内智)

コウチュウ目 オサムシ科**D**

和名 ミツメナガチビゴミムシ
学名 *Trechiana triops* S. Uéno

環境省：該当なし

本種は、体長6 mm内外と小さく後翅も退化して無く、広範囲での移動が困難な種類である。個体数も少ない。1992年大鰐町十和田山から採集された資料によって新種記載 (Uéno, 1994) された種類である。その後の追加記録はなく、隣接する白神山地、岩木山に同属の別種が生息している。

(山内智)

コウチュウ目 オサムシ科**D**

和名 イワキナガチビゴミムシ
学名 *Trechiana oreas* (Bates)

環境省：該当なし

本種は、東北地方北部に分布している。土中に生息し、森林の溪流近くの湿った石下から採集される。体長6 mm内外と小さく、後翅も退化して移動力は低い。採集例の少ない種類である。岩木山からG. Lewisが1880年に採集した資料によって新種記載 (Bates, 1883) された。県内では岩木山や八甲田山 (下山, 1978a) などの高山帯に分布する。隣接する白神山地と大鰐町には同属の別種が生息している。

(山内智)

コウチュウ目 オサムシ科**D**

和名 フトクチヒゲヒラタゴミムシ
学名 *Parabrosicus crassipalpis* (Bates)

環境省：該当なし

本種は、本州、四国に分布する日本固有種で、青森県が分布北限である。原生林の豊かな林床に生息するゴミムシ類である。

採集例の大変少ない種類で、県内からは、大鰐町早瀬野 (山内, 1996b) から記録されている。

(山内智)

コウチュウ目 オサムシ科**D**

和名 オオヒョウタンゴミムシ
学名 *Scarites sulcatus* Olivier

環境省：準絶滅危惧

国内での分布は、本州、四国、九州で、海岸などの砂地に生息している (上野ら, 1985)。県内でも深浦町の海岸で採集されている (下山, 1978a)。

全国的に砂浜の衰退がみられ、本種の生息する環境が少なくなっている (大野, 2000a; 環境省, 2006)。県内の生息地でも、砂浜が人為的行為によって環境が変化してきており、生息が狭まれて来ている。今後の砂浜での分布・生態などの調査が望まれる。

(山内智)

コウチュウ目 オサムシ科**D**

和名 クマガイクロアオゴミムシ
学名 *Chlaenius gebleri* Ganglbauer

環境省：該当なし

オサムシ類に共通の体形で、体色も黒色である。上翅の間室は光沢が鈍く、密生した暗色毛と金色の毛を交互に備え、縞模様となっている。青森県では岩木川河口部を中心に極限的に分布しており (佐藤・尾崎, 2000)、北海道では多く、秋田県や関東からの記録もある。

生息域は、ヨシやイネ科等の水辺植物の生えた良好な環境であり、河川改修等により、容易に生息域が消滅することが想定される。

(佐藤隆志)

コウチュウ目 ゲンゴロウ科**D**

和名 シマゲンゴロウ
学名 *Hydaticus bowringii* Clark

環境省：該当なし

平野部の湖沼、溜め池などを主体に分布する水生昆虫 (特に肉食性のもの) は減少が著しく、本種も例外ではない。かつては山形村、黒石町 (ともに現黒石市) (石村・佐藤, 1941) や森田村 (現つがる市) (阿部, 2008) など広く分布していたようであるが近年の採集記録は非常に少なく、正式な報告例は横浜町 (1999年: 阿部, 2008) と三戸町 (1991~1993年: 田沢, 2000) だけである。調査が進めばBないしCにランクされる可能性が高い。

(櫛田俊明)

コウチュウ目 コツブゲンゴロウ科 D

和名 ヒゲブトコツブゲンゴロウ
(ヒメコツブゲンゴロウ)

学名 *Noterus angustulus* Zaitzev

環境省：該当なし

平野部の湖沼、溜め池などを主体に分布する水生昆虫（特に肉食性のもの）は減少が著しく、本種も例外ではない。正式な報告例は少ないが、屏風山湖沼群（大高ら, 2008）、岩木川下流域（中根, 1993）、下北半島（堀, 2000）に分布している。平地～山地の池沼などに普通に見られるコツブゲンゴロウとは雄では触角の形状で容易に区別できるが、雌では体型がやや細い程度（体長は体幅の約2倍、コツブは2倍未満）で、区別は難しい。

(櫛田俊明)

コウチュウ目 コガネムシ科 D

和名 ミヤマダイコクコガネ

学名 *Copris pecuarius* Lewis

環境省：該当なし

本種の国内での分布は、本州、四国、九州で、高地の牛馬糞に集まることが多く、灯火にも飛来する（川井ら, 2008）。

産地が限られ少ない。県内では、青森市田代平、平川市湯ノ沢（阿部, 1980）、むつ市大室平（斎藤, 1987）、青森市寒水沢・萱野茶屋、十和田市蕨・焼山（斎藤, 1993）などの記録がある。県内では、八甲田山地の高原に広がる放牧地に記録が集中している。

(山内智)

コウチュウ目 テントウムシ科 D

和名 ババヒメテントウ

学名 *Scymnus babai* Sasaji

環境省：該当なし

本種は、体長2mm内外。国内では本州、四国、九州、国外では朝鮮半島や中国に分布（黒沢ら, 1985）する種類である。県内では、西目屋村乳穂の滝、つがる市カクレ沼（山内, 1996）から記録されている。

ヨシ湿原でのみ見られるが、少ないテントウムシである。ヨシが繁茂する湿地帯が衰退してきており、県内全域での湿地帯の調査が望まれる。

(山内智)

コウチュウ目 クワガタムシ科 D

和名 オオクワガタ

学名 *Dorcus hopei* (E. Saunders)

環境省：準絶滅危惧

本種の国内での分布は、北海道、本州、四国、九州である。県内での分布は局地的で、八甲田山地に生息しているが、個体数は少ない。県内での記録は、十和田市蕨・青撫山（山谷, 1938a）、青森県（山谷, 1938b）、八甲田山（石村・佐藤, 1941）、十和田市宇樽部、新郷村迷ヶ平、青森市酸ヶ湯（柏崎, 1974）、十和田市焼山・蕨（下山, 1985, 1988, 1989b）などである。

(山内智)

コウチュウ目 オオキノコムシ科 D

和名 カタアカチビオオキノコムシ

学名 *Tritoma kensakui* Chûjô

環境省：該当なし

本種は、日本固有種で本州に分布する。青森県が分布北限で、局地的で少ない種類である。県内では、1951・1953年平川市葛川、1951・1952年平川市井戸沢、1951年平川市小木平で採集された資料によって新種記載（Chûjô, 1955）された。他に県内では、平川市温川・大木平・砂子沢（Chûjô, 1969）から知られており、いずれも八甲田山地から記録されている。

本種は、ハチノスタケを寄食する（下山, 1960）ことが知られている。

(山内智)

コウチュウ目 テントウムシ科 D

和名 ムナグロチャイロテントウ

学名 *Micraspis satoi* Miyatake

環境省：該当なし

本種は、体長3.5mm内外で、本州に分布する。ヨシの繁茂している湿地に生息する（佐々治, 1982）が少ない。県内では六ヶ所村尾駱沼（山内, 1996a）の岸辺の湿地帯から記録されている。

県内の湿地帯が衰退してきており、県内全域での湿地帯での調査が望まれる。

(山内智)

コウチュウ目 カミキリムシ科 **D**

和名 ホクチチビハナカミキリ
 学名 *Alosterna tabacicolor* (De Geer)
 環境省：該当なし

北海道と本州に分布しており、北海道では普通であるが本州では個体数は少ない。東北地方では青森県だけに分布しており、深浦町（阿部, 1974）と中泊町小泊（下山ら, 1982）の記録がある。

（今純一）

コウチュウ目 カミキリムシ科 **D**

和名 ヤマトキモンハナカミキリ
 学名 *Judolia japonica* (Tamanuki)
 環境省：該当なし

北海道、本州、九州に分布しており個体数は少ない。県内では弘前市（鈴樹, 1986）、中泊町小泊（大西, 1992）、弘前市岩木町（工藤私信, 1999）などの記録があり、クリの花上から採集されている。

（今純一）

コウチュウ目 カミキリムシ科 **D**

和名 イガブチヒゲハナカミキリ
 学名 *Corymbia igai* (Tamanuki)
 環境省：該当なし

本州、四国、九州に分布している。東日本ではまれな種類で本県が北限である。県内では、弘前市相馬で1981年～1998年にかけて数10頭の個体が記録されているが（三上・佐藤, 1981；三上私信, 1999）、地理的にみて非常に特殊な分布のように思われる。他に1985年に大鰐町（工藤私信, 1999）、弘前市（鈴樹, 1988）で数個体記録されている。幼虫の食樹としてトウヒやサワラが知られているが、本県ではヒバである（三上, 1989）。

（今純一）

コウチュウ目 カミキリムシ科 **D**

和名 オオハナカミキリ
 学名 *Konoa granulata* (Bates)
 環境省：該当なし

北海道と本州に分布するが、東北地方では非常にまれである。県内では十和田（下山, 1964a）、八甲田山系（尾崎, 1988；尾崎・鈴樹, 1989）で数例記録がある。最近の採集例は、十和田湖町谷地1998年8月19日の1雄（工藤私信, 1999）がある。幼虫の食樹としてブナ、ダケカンバ、モミが知られている。本県ではノリウツギに訪花中のものも得られている。

（今純一）

コウチュウ目 カミキリムシ科 **D**

和名 コウヤホソハナカミキリ
 学名 *Strangalia koyaensis* Matsushita
 環境省：該当なし

本州と四国に分布するが、関東以北では非常にまれである。東北地方では青森県と秋田県で記録されているだけで、非常に特殊な分布をしている。県内では弘前市相馬で数個体記録されており（三上・佐藤, 1981；三上, 1986）、ノリウツギの花から採集される。また、幼虫の食樹としてスギやヒノキが知られているが、弘前市相馬ではヒバを食樹とすることが判明している（三上, 1989）。

（今純一）

コウチュウ目 カミキリムシ科 **D**

和名 ヒゲジロホソコバネカミキリ
 学名 *Necydalis odai* Hayashi
 環境省：該当なし

北海道、本州、四国、九州に分布するが、非常にまれである。県内では、平川市大木平、十和田での記録（下山, 1964a）があるが、この他に1996・1997年に中泊町小泊でミズナラの立ち枯れから十数頭採集されている（三上私信, 1999）。

（今純一）

コウチュウ目 カミキリムシ科**D**

和名 オニホソコバネカミキリ

学名 *Necydalis gigantea* Kano

環境省：該当なし

北海道、本州、四国、九州に分布するが、非常にまれである。他県ではクワ古木のコルク質部に幼虫が寄生するため、古木のある桑畑で採集される。しかし、桑畑は全国的に消滅しつつあり、今後さらに採集が困難になることが考えられる。県内での記録は、十和田市（三上, 1987）と五所川原市市浦（大西, 1992）の2例だけであるが、採集地での乱獲により、生息環境の悪化が危惧される。

(今純一)

コウチュウ目 カミキリムシ科**D**

和名 サドチビアメイロカミキリ

学名 *Orbium obscuripenne takakuwai* Niisato

環境省：該当なし

北海道、本州、四国、九州に分布するが少ない。県内では平川市平賀と大鰐町の記録があるが（下山, 1964b）、その後採集されていない。他県では幼虫がヤチダモやトネリコを食樹とすることが判明している。

(今純一)

コウチュウ目 カミキリムシ科**D**

和名 オダヒゲナガコバネカミキリ

学名 *Glaphyra gracilis* (Hayashi)

環境省：該当なし

本州、四国、九州に分布する。県内では十和田市猿倉温泉付近でのみ採集されており（尾崎, 1986）、ミズキの花から得られている。また、1997年にアオモリトドマツの材から脱出した記録がある（三上私信, 1999）。

(今純一)

コウチュウ目 カミキリムシ科**D**

和名 ヨコヤマヒメカミキリ

学名 *Ceresium holophaeum* Bates

環境省：該当なし

本州、四国、九州、南西諸島に分布する。南西諸島では普通種であるが本土域では少なく、東北地方では非常にまれである。県内では鱒ヶ沢町（三上, 1988）や中泊町三角山（大西, 1993）の海岸近くで記録されており、オオバクロモジ、イタヤカエデ、ヤブツバキなどの枯枝から脱出したものが得られている。

(今純一)

コウチュウ目 カミキリムシ科**D**

和名 ホソツヤヒゲナガコバネカミキリ

学名 *Glaphyra nitidus* Obika

環境省：該当なし

本州と四国に分布するが、産地は局地的である。県内では鱒ヶ沢町然ヶ岳のエゾエノキの材から脱出したものが得られている（三上, 1989）。

(今純一)

コウチュウ目 カミキリムシ科**D**

和名 ムモンベニカミキリ

学名 *Amarysius sanguinipennis* (Blessig)

環境省：該当なし

本州と九州に分布するが少ない種である。県内では階上町名久井岳（小倉, 1971）や弘前市相馬（三上・阿部, 1985）での記録があり、コナラやオオバクロモジの材から脱出したものが採集されている。

(今純一)

コウチュウ目 カミキリムシ科 D

和名 ハセガワトラカミキリ
 学名 *Teratoclytus plavilstshikovi* Zaitzev
 環境省：該当なし

北海道と本州に分布するが少ない種である。県内では佐井村の記録があり（斎藤, 1989）、幼虫はヤマブドウやノブドウに寄生することが知られている。

(今純一)

コウチュウ目 カミキリムシ科 D

和名 トウホクトラカミキリ
 学名 *Chlorophorus tohokensis* Hayashi
 環境省：該当なし

北海道と本州北部（東北地方）に分布するが、局地的で産地は少ない。県内では弘前市藍内、むつ市湯ノ沢（尾崎, 1985）、十和田市宇樽部、横浜町八郎烏帽子（西沢, 1987）でノリウツギの花上から少数の個体が採集されている。また、1990・1995・1996年に中泊町小泊のヤマブドウの枯れづるから、多数の個体が脱出した記録がある（三上私信, 1999）。

(今純一)

コウチュウ目 カミキリムシ科 D

和名 ヒトオビチビカミキリ
 学名 *Sybra unifasciata* Fujimura
 環境省：該当なし

北海道、本州、四国、九州に分布するが、全国的に少ない。県内では弘前市座頭石・久渡寺山（佐藤, 1984）で採集されている。また、弘前市相馬のマルバマンサク（三上, 1990）、五所川原市のエゴノキ（三上私信, 1999）の材から成虫が脱出した記録がある。個体数は非常に少ない。

(今純一)

コウチュウ目 カミキリムシ科 D

和名 ホンドアカガネカミキリ
 学名 *Plectrura metallica yoshihiroi* Takakuwa
 環境省：該当なし

本亜種は本州山地に分布するが、個体数は少ない。県内では八甲田山系（尾崎, 1993）やむつ市川内（下山ら, 1986）・岩木山周辺（三上私信, 1999）で採集されており、青森市酸ヶ湯のアオモリトドマツ（三上私信, 1999）やコメツガ（三上, 1990）の材から成虫が脱出した記録がある。

(今純一)

コウチュウ目 カミキリムシ科 D

和名 ヨコヤマヒゲナガカミキリ
 学名 *Dolichoprosopus yokoyamai* (Gressit)
 環境省：該当なし

本州、四国、九州に分布し、青森県が北限である。幼虫はブナの生木に寄生する。県内では深浦町白神岳（長尾, 1984）、鯉ヶ沢町櫛石山、青森市梵珠山沢内沢（村上, 1993）などで採集されているが、個体数は少ない。中泊町小泊では海岸近くにあるブナの大木から、一度に数十頭の個体が採集された記録がある（大西, 1994）。今後の調査が望まれる。

(今純一)

コウチュウ目 カミキリムシ科 D

和名 トホシカミキリ
 学名 *Saperda alberti* Plavilstchikov
 環境省：該当なし

北海道、本州に分布し、ドロノキやヤナギ類に寄生する。県内では平川市滝ノ沢（下山, 1964c）で記録されているが、その後の採集例は知られていない。今後の調査が望まれる。

(今純一)

コウチュウ目 カミキリムシ科 D

和名 ヤツボシカミキリ
 学名 *Saperda octomaculata* Bleesig
 環境省：該当なし

北海道と本州に分布するが、個体数は少ない。青森県では平川市大木平（下山, 1964c）、鯉ヶ沢町（鈴樹, 1991）で採集されており、また、青森市城ヶ倉のナナカマドの材から成虫が脱出した記録がある（三上, 1990）。今後の調査が望まれる。
 （今純一）

コウチュウ目 カミキリムシ科 D

和名 シロオビドイカミキリ
 学名 *Mimectatina fuscoplagiata* (Breuning)
 環境省：該当なし

国内では、北海道と本州に分布する。本州では中部山岳地帯と青森県で採集されているが、個体数は非常に少ない。県内での記録は、十和田市猿倉温泉付近で採取したアオモリトドマツの枯枝から脱出した2頭だけである（三上, 1997）。今後の調査が望まれる。
 （今純一）

コウチュウ目 ハムシ科 D

和名 オオヨモギハムシ
 学名 *Chrysolina angusticollis* (Motschulsky)
 環境省：該当なし

本種の国内での分布は、北海道と本州（青森県、岩手県）で（木元・滝沢, 1994）、県内では局地的で少なく、中泊町小泊（五所川原農林高等学校自然科学部, 1970）、深浦町十二湖（同, 1966）、中泊町冬部沢・褰内、外ヶ浜町算用師、金木町（下山ら, 1982）、岩木山、深浦町追良瀬川、鯉ヶ沢町真瀬岳（阿部, 1980）、東通村桑畑山（福田ら, 2001）などから記録されている。更に生息地が確認される可能性がある。
 （山内智）

コウチュウ目 ハムシ科 D

和名 クロスジカメノコハムシ
 学名 *Cassida lineola* Creutzer
 環境省：該当なし

本州に分布するが確認された地域は少なく個体数も少ない。県内では2002年の黒石市黒森山が初記録（鈴樹私信）で、同年に青森市合子沢・小館、平川市軍馬平などの低山地で相次いで生息が確認された（国際芸術センター青森, 2004）。
 成虫・幼虫は草地に自生するオトコヨモギ葉上にみられこれを食べる。オトコヨモギ群落を含む草原は県内各所にあるが、本種の生息は極限され個体数の増減も顕著である。
 （工藤周二）

ハチ目 ナギナタハバチ科 D

和名 トガシオオナギナタハバチ
 学名 *Megaxyela togashii* Shinohara
 環境省：該当なし

雌は体長14mm位、体色は黒色で触角、後脚も黒色、前・中脚は褐色で、後脚が太く長い特徴がある。触角の先端数ミリが一段と細まる。近年に新種記載され（Shinohara, 1992）、独特な形態をしているにも拘わらず、それまで存在が分からなかった希少種である。本州に分布し、県内では八甲田山蔦温泉付近で1999年に1雌が認められているだけである（山田, 2000）。本種は山地性でサワグルミを食樹としており、成虫は5～6月に出現する。
 （山田雅輝）

ハチ目 シリアゲコバチ科 D

和名 オキナワシリアゲコバチ
 学名 *Leucospis sinensis* Walker
 環境省：該当なし

体長9～12mmで、黒色に黄斑を伴うやや横太りの蜂で、雌は腹部の中ほどに達する産卵管を背面に背負い、後腿節が大きく膨らんでいる。本州・四国・九州と西南諸島に分布する南方系の蜂で、本県が分布の北限に当たる。県内では八戸市と弘前市の市街地に近い平地で得られている。成虫は8月頃に発生し、寄主であるコクロアナバチの巣筒の外側から産卵管を突き刺して中の幼虫に卵を産みつける。
 （山田雅輝）

ハチ目 セイボウ科**D**

和名 オオセイボウ

学名 *Stilbum cyanurum pacificum* Linsenmaler

環境省：該当なし

体長12~20mmの太型で、体色は緑色~董色で、第3背板後縁に4個の鋭い突起がある。本州・九州に分布し、県内では黒石市・鯉ヶ沢町で記録されている。成虫は8~9月に出現し、スズバチの幼虫に体外寄生する。スズバチはシャクガの幼虫を狩り、岩や建築物の壁面に土で固めた巣を作り、県内の平地から低山地にかけて比較的広く分布しているが、本種は極めて限定された地域でしか認められていない。

(山田雅輝)

ハチ目 ベッコウバチ科**D**

和名 フタモンベッコウ

学名 *Parabatozonus jankowskii* (Radoszkowski)

環境省：該当なし

体長15~30mmの大型普通体型の種で、体色は黒色、顔面に1対の黄斑、第3腹節に中央のえぐれた黄帯がある。本州・九州のほか、中国・朝鮮半島に分布し、本県を北限とする。青森市横内・黒石市・森田・八戸市で得られている。森林よりも平地の草地付近に生息する。成虫は年1回夏場に活動し、オニグモの成熟雌を狩り、地中に穴を掘って運び入れ、産卵してから埋め戻しておく。

(山田雅輝)

ハチ目 アナバチ科**D**

和名 ミカドジガバチ

学名 *Hoplammophila aemulans* (Kohl)

環境省：該当なし

体長は26mm内外の腹柄をもった細型体型で、体色は黒く第1腹節の末端及び第2腹節は赤褐色である。南方系の種で、本州・九州・対馬・台湾・東アジアに分布し、本県が分布上の北限である。白神・八甲田・十和田山地で認められている。成虫は8月頃に多く活動し、朽木の坑を利用して巣を作り、大型のシャチホコガ幼虫を狩って幼虫の餌とする。このため本種の生存には太い立ち枯れ樹が経年的に存在する原生林に近い森が必要である。

(山田雅輝)

ハチ目 ベッコウバチ科**D**

和名 イワタツツベッコウ

学名 *Homonotus iwatai* Yasumatsu

環境省：該当なし

体長9~13mmで、体色は黒色、透明な翅をもち、やや円筒形な体型である。頭頂部後方は強く折れ曲がって、前胸に被さり、後翅の臀脈は直角に中脈と交わる。本州・九州に分布し、県内では大野(1935)による浅虫の記録があるだけだったが、近年、岩木山麓で得られた(山田, 2000)。6月頃から成虫が出現し、カバキコマチグモの成虫に体外寄生する。

寄主のコマチグモはススキ・アシなどの葉を折り曲げて巣を作る草地生息者である。

(山田雅輝)

ハチ目 ドロバチ科**D**

和名 オオハムシドロバチ

学名 *Symmorphus captivus* (Smith)

環境省：該当なし

体長8.5~12.5mmで、普通体型、第1腹背は前面が横稜で区切られ、そこから後半中央部には浅い縦溝がある。体色は黒色で腹部に黄色の斑紋をもつ。本州・四国・韓国に分布し、本県が分布上の北限に当たる。西目屋村・黒石市・平賀町・弘前市座頭石などの低山地で得られている。成虫は7~8月頃に発生し、枯れ茎の髓部などを利用し、土で仕切って複数の育房を造る。ハムシを狩って幼虫の餌とするが、詳細な生活史は不明である。

(山田雅輝)

ハチ目 アナバチ科**D**

和名 ヤマトコトガタバチ

学名 *Lyroda nigra japonica* Iwata

環境省：該当なし

体長7~12mmで普通体型、黒色で前翅肘室が3個、両眼内縁線は並行、第1~3腹節の後縁に銀色の毛帯がある。本州・九州・四国・中国・朝鮮半島などに分布し、本県は分布上の北限に当たる。成虫は7~8月に活動し、砂地に穿孔して巣を造り、ヒシバツタを狩って幼虫の餌とする。県内ではTsuneki (1983) が記録した木造町館岡の1雄と下山 (1967) がミツメトガリアナバチとして示した平滝沼の3個体が知られているだけである。

(山田雅輝)

ハチ目 アナバチ科**D**

和名 コウノスジガバチモドキ

学名 *Trypoxylon konosuense* Tsuneki

環境省：該当なし

体長10～13mmの長い腹柄がある細長な体型で、体色は黒色で赤褐色斑がなく、頭楯の中央1/3が強く突出して、その先端部がやや反り返ることで近縁の他種から区別できる。埼玉県鴻巣産の2個体と木造町産の1個体によって1968年に新種記載されたもので、その後宮城県などからも記録された。成虫は8月に活動し、ススキの枯れ茎の髓内に巣を作り、クモを狩る。

(山田雅輝)

ハチ目 アナバチ科**D**

和名 シモヤマジガバチモドキ

学名 *Trypoxylon shimoyamai* Tsuneki

環境省：該当なし

体長7～9mm、短い腹柄のある細い体型で、体色は黒く、赤褐色斑がない。眼間上下比は3：2、触角間隆起は瘤状で低い。北海道、本州に分布し、十和田を基準山地とする。本州では青森県の他に埼玉・神奈川・石川・福井の4県から得られている全国的にも少ない種である。県内では十和田山地だけから記録されている。成虫は9月に活動し、竹筒などに巣を作り、オニグモ科やコガネグモ科のクモを狩る。

(山田雅輝)

ハチ目 アナバチ科**D**

和名 エゾアリマキバチ

学名 *Pemphredon morio* Van der Linden

環境省：該当なし

体長5.5～7.5mm、黒色で触角基部間の前額に瘤がある。北方系の種で北海道・朝鮮半島・ユーラシアに分布することが知られていた。近年、黒石市の2か所で発見され、4個体が採集されている。今のところ数少ない南限種である。低地に生息しており、詳細な生態は不明であるが、同属の他種はいずれもアブラムシ類を狩り、材や髓中に巣を作ることが知られている。成虫は6月と8月に得られている。

(山田雅輝)

ハチ目 アナバチ科**D**

和名 アギトギングチ

学名 *Ectemnius martjanowii* (F. Morawitz)

環境省：情報不足

体長10～17mm、普通体型、体色は黒色で第2腹節に黄斑があり、雄は大型になると長大な大顎を持ち、顔が角型に変形し、頬下に突起を持つようになる。本州・千島・シベリア・朝鮮半島などに分布する北方系の種であるが、北海道からの記録はまだない。1984年に十和田湖の宇樽部と休屋で採集され、その後記録がない。比較的高地に生息し、8～9月に成虫が出る。詳しい生態はまだ不明である。

(山田雅輝)

ハチ目 アナバチ科**D**

和名 キスケギングチ

学名 *Rhopalum guttatum* Tsuneki

環境省：該当なし

体長4～5mmの腹柄を持った細長な体型で、額印は不明瞭、尾域は狭三角形で縦稜を欠き、光沢もない。腹柄は全体黒色で前伸腹節正中線の細溝を欠く。本州に分布し、青森・埼玉・福井の3県以外からは記録がない。県内では平賀町から2雄が記録されているだけである。成虫は7～8月に活動し、萱ぶき屋根などに巣を作り、ユスリカの仲間を狩って幼虫の餌とする。

(山田雅輝)

ハチ目 アナバチ科**D**

和名 コシジロギングチ

学名 *Rhopalum succineicollarum* Tsuneki

環境省：該当なし

体長7～8mmの腹柄を持った細長な体型で、体色は黒色、腹柄の基部半分はアメ色を呈し、前胸にも淡褐色斑がある。尾域には縦稜がなく、頭楯先端が褐色である。北海道・本州・四国・九州に分布し、県内では平賀・黒石市・梵珠山・相馬など低地や低山地での採集記録があるが、個体数は少ない。成虫は6～7月に活動し、古木などの甲虫脱出孔などを利用して巣を作り多数のチャタテムシを狩って幼虫の餌として貯える。

(山田雅輝)

ハチ目 アナバチ科**D**

和名 キュビギングチ

学名 *Towada flavitarsus* (Tsuneki)

環境省：該当なし

体長5～6.5mmの普通体型で、体色は黒色、脚に黄斑部が多い。雌は尾域が三角状で平坦に近い。頭楯は三角状に突出し、前伸腹節心形域の囲いはない。北海道・青森・栃木・埼玉・福井・神奈川・広島などで記録されている。県内では十和田山地から得られている。成虫は6～8月に活動し、南部(1973)によるとスギの枯木に穿孔して営巣し、その穴を塞ぐのに樹脂を使い、獲物はブユ・ミズアブ・オドリバエ・ショウジョウバエ等の成虫を狩る。

(山田雅輝)

ハチ目 アナバチ科**D**

和名 マエダテツチスガリ

学名 *Cerceris pedetes* Kohl

環境省：情報不足

体長17mm内外、やや細めの体型、体色黒色で各腹節に黄帯がある。頭楯に左右の角状突起を持った付属片があり、頭楯基盤にもそれと並んで突起がある。北海道・本州・シベリア・朝鮮半島・中国・旧北区東部に分布する。県内では秋田県境に当たる大鰐・碓ヶ関・平賀の低山地で8～9月にえられているが、分布域が狭く、個体数も非常に少ない。河川周辺の砂地に営巣し、ゾウムシ類を狩るとされる。

(山田雅輝)

ハチ目 ケアシハナバチ科**D**

和名 シロスジフデアシハナバチ

学名 *Dasypoda japonica* Cockerell

環境省：該当なし

体長13mm内外、普通体型、体色は黒色で、各腹節後縁に白色毛が並ぶ。後脚付節にも刷毛が発達する。本州・九州・シベリア・中国・朝鮮半島に分布し、本県は国内での分布北限に当たる。県内では尾駮沼周辺と十三湊周辺で得られているが、生息地は極めて局限されている。9月頃成虫が現れ、砂地に穴を掘って巣を造り、ハチジョウナ・ブタナ・アキノノゲシ・ヤクシソウなどキク科の花を好んで訪れる。雌はハギ類も好む。

(山田雅輝)

ハチ目 アナバチ科**D**

和名 ハクトウアワフキバチ

学名 *Gorytes hakutozanus* Tsuneki

環境省：該当なし

体長11～13.5mmの普通体型で、体色は黒色、腹節第1～4に黄帯を持つ。前翅肘室は2個で、無柄、縁紋は小さく、黒斑がない。北海道・朝鮮半島・樺太が分布地となっていたが、近年青森県でも発見された。県内では相馬・黒石・岩木山で認められている。成虫は6月頃に活動し、土中に短い穴を掘り、ヤマトキタヨコバイの成虫を狩って幼虫の餌とする。獲物や営巣場所と関連してその生息場所は非常に限定されている。

(山田雅輝)

ハチ目 コハナバチ科**D**

和名 ヤスマツフシダカコンボウハナバチ

学名 *Lipotriches yasumatsui* (Hirashima)

環境省：該当なし

体長8～9.5mmの普通体型で、体色は黒色である。前翅基脈は強く湾曲し、第3肘室は第1肘室と同長、縁紋は大きい。腹部腹面に刷毛が発達する。九州と本州に分布し、本県が北限である。岩木山麓・碓ヶ関・青森市で得られているが、極めて少ない。成虫の発生時期は8月上旬から9月中旬で、地中に深く穴を掘って巣を作る。ハナバチでは珍しくススキなどイネ科の花から花粉を集める。また、雄はハッカの花からも採集されている。

(山田雅輝)

ハチ目 ハキリバチ科**D**

和名 クズハキリバチ

学名 *Megachile pseudomonticola* Hedicke

環境省：該当なし

体長19～20mm、やや太型で、腹面に花粉収容毛を持つ。体色は黒色で、雌は胸部や第1腹節に黄褐色毛が目立ち、翅の先端部は暗色化している。本州・九州・屋久島に分布し、本県が分布上の北限に当たり、黒石市と岩木山百沢だけで得られている。成虫は8月に現れ、クズの花を好んで訪れる。黒石市の事例では古いリンゴ樹の空洞部に貯まった虫糞などによる腐熟土中にクズの葉片を運んで育房を造っていた。

(山田雅輝)

ハチ目 コシブトハナバチ科**D**

和名 カグヤキマダラハナバチ
 学名 *Nomada kaguya* Hirashima

環境省：該当なし

体長6.5～7mm普通体型で、体色は黄褐色に黒斑を持ち、前伸腹節背面の左右に毛飾があり、小楯板に黄斑がある。本州・九州・四国に分布しており、本県は分布上の北限に当たる。森林よりも開けた草地に生息し、岩木山から3個体得られただけである。成虫は8～9月に活動し、ヤスマツフシダカコンボウハナバチに労働寄生する。

(山田雅輝)

ハチ目 コシブトハナバチ科**D**

和名 オカモトキマダラハナバチ
 学名 *Nomada okamotonis* Matsumura

環境省：該当なし

体長8～12mmの普通体型、体色は黒色で黄斑を持ち、触覚間隆起の表面が扁平となり縦稜がない。雌では小楯板に黄斑があり、両眼内縁線は平行である。北海道・本州・九州に分布し、県内では弘前市内と岩木山麓で認められている。成虫は7～8月頃活動し、ヒロズキバナヒメハナバチに労働寄生する。寄主は明るい草地に生息し、粘土質の裸地に穴を掘って巣を作る。

(山田雅輝)

ハチ目 コシブトハナバチ科**D**

和名 ハイイロヒゲナガハナバチ
 学名 *Eucera sociabilis* Smith

環境省：該当なし

体長15mm内外、やや太めの体型、体色は黒色で、前翅肘室は2個、雌の胸背の毛は黄褐色で中、後脚の第1付節内縁の剛毛は黒褐色である。雄は体長と同じくらいの長い触角を持ち第2、3腹節背後縁の毛は単純な毛だけで、毛飾がない。北海道・本州・シベリア・中国に分布し、県内では深浦町だけで得られている。成虫は6～7月に現れ、グミ・クサフジなどの花を訪れ、地面に穴を掘って巣を作るが、詳しい生態は不明である。

(山田雅輝)

ハチ目 ミツバチ科**D**

和名 ニセハイイロマルハナバチ
 学名 *Bombus pseudobaicalensis* Vogt

環境省：該当なし

体長34～49mmの太型で、体は灰色の体毛に覆われ、胸部は中央部で黒色毛が多く、腹部は各節の黒帯が目立つ。中脚基付節の後縁末端角は尖り、第5腹節脊は点刻がなく、やや光沢がある。雄は触角鞭節の下縁が強く突出する。北方系の種で北海道・本州のほか、シベリア・ウスリー・サハリン・中国北部・朝鮮半島に分布し、本州では東北北部に限られる。県内では毛無山(Ito & Munakata, 1979)と五戸町だけで得られている。

(山田雅輝)

チョウ目 メイガ科**D**

和名 ヒメキテンシロツトガ
 学名 *Calamotropha fulvifusalis* (Hampson)

環境省：該当なし

本種の国内での分布は、北海道と本州の湿地で、少ない種類である。県内ではつがる市大滝沼(工藤, 1983)、つがる市ベンセ沼(亀田・山内, 2004)などのつがる市屏風山地区の湿地から記録されている。

県内には多数の湿地帯が点在しており、今後更に生息地が確認される可能性が高く、今後の調査が待たれる。

(山内智)

チョウ目 メイガ科**D**

和名 モリオカツトガ
 学名 *Chrysoteuchia moriokensis* (Okano)

環境省：該当なし

本種は、北海道と本州(東北地方・関東北部・北陸)の湿地に局地的に分布し、生息地は少ない(岩手県, 2001)。県内では東通村大利(佐々木, 1993)から記録されている。

県内には多数の湿地帯が点在しており、今後更に生息地が確認される可能性が高く、今後の調査が望まれる。

(山内智)

チョウ目 カギバガ科**D**

和名 マンレイカギバ

学名 *Microblepsis manleyi* (Leech)

環境省：該当なし

本種は国内では、本州、四国、九州に分布しているが、個体数は少ない。県内では古くから知られていて八甲田山湯ノ澤（渡邊, 1935）、青森市駒込（石村・佐藤, 1941）から記録されていた。その他に深浦町十二湖（葛西・佐藤, 1981）の記録がある。

本種の幼虫はカマツカを食草としている（井上ら, 1982）ことから、今後の調査で更に生息地が確認される可能性が高い。（山内智）

チョウ目 シャクガ科**D**

和名 ヨツモンマエジロアオシャク

学名 *Comibaena procumbaria* (Pryer)

環境省：該当なし

本種の国内での分布は、本州、四国、九州、西表島で、県内では少ない（井上ら, 1982）。県内からは深浦町十二湖（葛西・佐藤, 1977）、野辺地町烏帽子岳（葛西, 1989c）から記録されている。

幼虫はヤマイモ、ヤマハギ、マルバハギなどを食する（井上ら, 1982）。県内でも他の地域から生息が確認される可能性が高く、今後の調査が望まれる。

（山内智）

チョウ目 シャクガ科**D**

和名 シラナミナミシャク

学名 *Glaucorhoe unduliferaria* (Motschulsky)

環境省：該当なし

本種は国内では、北海道と本州に分布しているが、少ない種類である。県内では田子町白萩平（葛西, 1989a）から1979年に記録されている。

今後の調査による本種の新たな生息地の確認とその生態の解明が望まれる。

（山内智）

チョウ目 トガリバガ科**D**

和名 ナガトガリバ

学名 *Euparyphasma maxima* (Leech)

環境省：該当なし

本種の国内の分布は、本州、四国、対馬で、青森県が北限にあたる、国内での個体数は少ない。県内では南部町名久井岳、深浦町十二湖（佐藤・葛西, 1975）で記録されている。

本種の幼虫はヤマボウシを食べる（井上ら, 1982）ことから、今後の調査で更に生息地が確認される可能性がある。

（山内智）

チョウ目 シャクガ科**D**

和名 チャホシホソバナミシャク

学名 *Brabira kasaii* Sato

環境省：該当なし

本種は、1984年に東通村大利で採集された7雄2雌によって新種記載された（佐藤, 1986）。東通村大利をタイプ産地とするシャクガであるが、その分布や生態等については不明である。今後の調査で本種の更なる生息地の確認とその生態の解明が望まれる。

（山内智）

チョウ目 シャクガ科**D**

和名 ギフウスキナミシャク

学名 *Idiotephria debilitata* (Leech)

環境省：該当なし

本種の国内での分布は、北海道、本州、四国、九州で、産地は限定される（井上ら, 1982）。県内では、つがる市ベンセ沼（亀田・山内, 2005）、つがる市平滝沼（亀田・山内, 2007）、青森市月見野（亀田・山内, 2006）、青森市高田・新城（葛西, 1989a）、青森市朝日山（佐藤, 1970）から記録されている。

幼虫はカシワやコナラを食するが（井上ら, 1982）、県内の産地もカシワ林やコナラ林である。これらの林は近年減少しており、早急な調査が望まれる。

（山内智）

チョウ目 シャクガ科

D

和名 キジマソトグロナミシャク
学名 *Eulithis pyropata* (Hübner)

環境省：該当なし

本種は国内では、北海道、本州、四国などに分布している。どこの産地でも個体数は少ない（井上ら, 1982）。県内では、鱒ヶ沢町二ツ森（高橋, 1988）、青森市滝沢、十和田市焼山・子ノ口（葛西, 1989a）から記録されている。今後の調査で本種の分布や生態などについての解明が望まれる。

（山内智）

チョウ目 シャクガ科

D

和名 ホソスジハイイロナミシャク
学名 *Hydrelia shioyana* (Matsumura)

環境省：該当なし

本種は、北海道と本州に分布する。本種は高山に生息する種類で、産地が限定される。県内では、十和田市睡蓮沼（山内・亀田, 1999）から記録されている。八甲田山系地域から今後新たな生息地が確認される可能性があり、今後の調査が待たれる。

（山内智）

チョウ目 シャクガ科

D

和名 カバシャク
学名 *Archiearis parthenias* (Linnaeus)

環境省：該当なし

褐色の地に白紋の前翅とオレンジ色の後翅をもつ。成虫は4月下旬～5月に姿を見せ、昼間活発に飛び、ヤナギの花などに吸蜜するが採集例は少ない。県内では青森市田代平（工藤, 未発表；室谷, 未発表）・大鱒町高野新田（横山, 2003）などの記録があり、東北では岩手県雫石で記録されている。食樹としてシラカンバなどのカンバ類が知られている。いずれにしても採集例が少なく、今後生活史や生息環境についての調査が必要である。

（佐藤博）

チョウ目 シャクガ科

D

和名 トビスジトガリナミシャク
学名 *Zola terranea* (Butler)

環境省：該当なし

本種は国内では、本州、四国、九州に分布する。青森県が国内での北限であるが、採集記録は少ない。県内では、つがる市平滝沼（葛西, 1989a）からの記録がある。

幼虫はセンニンソウを食することが知られている（井上ら, 1982）。センニンソウは海岸近くの林沿いなどに見られる植物で、今後の海岸沿いでの調査で、更に生息地が確認される可能性がある。

（山内智）

チョウ目 シャクガ科

D

和名 ヒメウラベニエダシャク
学名 *Heterolocha laminaria sutschanska*
Wehrli

環境省：該当なし

本種は国内では、北海道と本州に分布する。本州では青森県と岩手県（土井, 2005）以外あまり知られていない。

県内での分布は、青森市雲谷（亀田・山内, 2006）、青森市田茂木野・矢田（葛西・佐藤, 1980）、青森市高田・滝沢、東通村大利（葛西, 1988a）の青森市と東通村から記録されている。今後の調査で更に生息地の確認が期待される。

（山内智）

チョウ目 スズメガ科

D

和名 イブキスズメ
学名 *Hyles gallii* (Rottemburg)

環境省：該当なし

本種の国内での分布は、北海道、本州、対馬で、分布はきわめて局所的で少ない（井上ら, 1982；松浦, 1992）。県内では古くから記録されており、青森県（齋藤, 1935）、黒石市（石村・佐藤, 1941）などの報告がある。この他に青森市朝日山（佐藤・葛西, 1975）、野辺地町烏帽子岳（佐藤・葛西, 1981a）などから知られている。

幼虫の食草はカワラマツバやヤナギランなどである（松浦, 1992）。今後の詳しい調査で更に生息地の確認が期待される。

（山内智）

チョウ目 スズメガ科**D**

和名 ミスジビロードスズメ

学名 *Rhagastis trilineata* Matsumura

環境省：該当なし

本種は国内では、本州、四国、九州、屋久島に分布し、青森県が北限である。本種の産地は少ない（井上ら, 1982）。県内では十和田市蔦（佐藤・葛西, 1981a）、鱈ヶ沢町二ツ森（下山ら, 1991）で確認されている。

幼虫はヤマアジサイを食草としているが（井上ら, 1982）、県内でもよく見られる植物であり、今後の調査で更に生息地が確認される可能性がある。

(山内智)

チョウ目 シャチホコガ科**D**

和名 ヘリスジシャチホコ

学名 *Neopheosia fasciata japonica* Okano

環境省：該当なし

本種の国内での分布は、本州、四国、九州で、関東以北では少ない種類である（井上ら, 1982）。青森県が分布の北限である。県内では東通村大利（葛西, 1985）から記録されている。

国内での本種の生態は不明であるが、本亜種のタイプ産地である盛岡市では多数確認されている（土井, 2005）。青森県でも今後の調査で更に生息地が確認される可能性がある。

(山内智)

チョウ目 コブガ科**D**

和名 キタオオコブガ

学名 *Rhynchopalpus subgigas* (Inoue)

環境省：該当なし

本種は、北海道と本州に分布する。本州では青森県以外あまり知られていない、少ない種類である。県内では青森市新城・滝沢・矢田（葛西, 1989b）から記録されている。

本種の詳しい生態などについてはわかっていないが、深山ではなく里山などで確認されている。今後の詳しい調査で、本種の分布や生態などについての解明が望まれる。

(山内智)

チョウ目 スズメガ科**D**

和名 コウチスズメ

学名 *Smerinthus tokyonis* Matsumura

環境省：該当なし

小型で、後翅に目立つ眼状紋があり特徴的。成虫は6月～7月に出現する。本州・四国・九州に分布するが、東北では岩手県以南とされていた。本県での最初の記録は、津軽湯の沢（1972）（松岡, 未発表）である。その後蔦ダム（1989）（佐藤, 未発表）で採集されたが、いずれも1個体のみできわめて記録例が少ない種である。食樹はツツジ科のベニサラサドウダンが知られているが、本県における生活史や生息環境についての調査が必要である。

(佐藤博)

チョウ目 シャチホコガ科**D**

和名 アマギシャチホコ

学名 *Eriodonta amagisana* (Marumo)

環境省：該当なし

本種は、本州、四国、九州に分布するが、少ない種類である。青森県が分布の北限である。県内では十和田市蔦（佐藤・葛西, 1978b）、新郷村迷ヶ平（亀田・山内, 2006）から記録されている。

本種は、山地のブナ林から知られているが（井上ら, 1982）、青森県でも同様である。今後、記録のない白神山地などのブナ林での詳しい調査が望まれる。

(山内智)

チョウ目 ヤガ科**D**

和名 オオモリケンモン

学名 *Molybdonycta omorii* (Matsumura)

環境省：該当なし

本種は日本固有種で、北海道と本州（東北地方）に分布するが、少ない種類である（井上ら, 1982）。県内では、青森市朝日山（佐藤・葛西, 1975）から記録がある。隣接する岩手県では各地で記録されている（土井, 2005）。今後、更に生息地が確認される可能性があり、里山などでの分布と生態の詳しい調査が待たれる。

(山内智)

チョウ目 ヤガ科**D**

和名 ネジロシマケンモン

学名 *Craniophora oda* (Lattin)

環境省：該当なし

本種の国内での分布は、本州（青森県、岩手県、新潟県、兵庫県、広島県）で、局地的に分布し大変少ない種類である（岩手県, 2001）。県内では十和田市焼山（葛西, 1987）からの記録がある。

本種の生態などについては不明であるが、今後の調査による本種の分布とその生態などの詳しい解明が待たれる。

(山内智)

チョウ目 ヤガ科**D**

和名 ウスハイイロケンモン

学名 *Subleuconycta palshkovi* (Filipjev)

環境省：該当なし

本種の国内での分布は、北海道、本州、九州で、採集例の少ない種類である。本州では青森県以外あまり知られていない。県内では十和田市焼山で7月に採集された1雄が知られている（葛西・佐藤, 1980）。

本種の生態などについては不明であるが、今後の調査による本種の分布と生態などの詳しい解明が待たれる。

(山内智)

チョウ目 ヤガ科**D**

和名 オオシラホシヤガ

学名 *Eurois occulta* (Linnaeus)

環境省：該当なし

本種の国内での分布は、北海道と本州で、特に本州での記録は大変少なくまれな種類である（井上ら, 1982）。県内ではつがる市亀ヶ岡で2頭記録されている（松野, 1987）。

本種の北海道での観察では、イネ科・広葉草本の雑草地から得られた幼虫が、タンポポ、白クローバをよく食べたという（鳥倉, 1985）。このことから県内の同様な雑草地での詳しい調査で、今後、更に生息地が確認される可能性がある。

(山内智)

チョウ目 ヤガ科**D**

和名 タテスジケンモン

学名 *Simyra albovenosa* (Goeze)

環境省：該当なし

本種の国内での分布は北海道と本州である。本州では青森県以外あまり知られていない。県内では、東通村小田野沢・大利（葛西, 1985）、東通村野牛（佐々木, 1993）、六ヶ所村鷹架沼（葛西, 1987）、六ヶ所村内沼（阿部ら, 2004）、三沢市仏沼（オオセッカの生息環境研究グループ, 1999）、小川原湖、下北半島（工藤, 1985）の湿地帯で確認されている。今後まだ確認されていない津軽半島などでの詳しい調査が待たれる。

(山内智)

チョウ目 ヤガ科**D**

和名 ヘリボシキノコヨトウ

学名 *Stenoloba oculata* Draudt

環境省：該当なし

本種の国内での分布は、北海道南部、本州、九州で、少ない種類である。県内では十和田市葛（杉, 1974）での1雄が記録されている。

本種が属するキノコヨトウ亜科の幼虫は地衣類を食するが、今後の詳しい調査によって、本種の分布と生態などの解明が待たれる。

(山内智)

チョウ目 ヤガ科**D**

和名 クロヤガ

学名 *Euxoa nigrata* Matsumura

環境省：該当なし

本種は国内では、北海道と本州に分布するが、少ない種類である。県内では青森市城ヶ倉（佐藤・葛西, 1980）、鱒ヶ沢町赤石川（山内・阿部, 1987）で記録されている。

成虫は夜間だけでなく、昼間にも吸蜜活動をすることが知られている（井上ら, 1982）。夜間採集だけでなく、昼間の採集で確認される可能性もあり、今後の詳しい調査が待たれる。

(山内智)

チョウ目 ヤガ科 **D**

和名 オイワケクロヨトウ
 学名 *Lacanobia aliena amurensis* (Staudinger)
 環境省：該当なし

本種は国内では、北海道と本州に分布しているが、生息地は局所的（井上ら, 1982）で大変少ない種類である。県内では平川市軍馬平（葛西・佐藤, 1980）の記録がある。

県内の産地同様、分布地の多くは高地の草原（井上ら, 1982）で、今後の調査で更に生息地が確認される可能性が高い。

（山内智）

チョウ目 ヤガ科 **D**

和名 ギンモンセダカモクメ
 学名 *Cucullia jankowskii* Oberthür
 環境省：該当なし

本種は東北アジア温帯に分布する蛾で、国内では北海道、本州、四国、九州に生息しているが、産地は局地的で少ない（井上ら, 1982）。県内ではつがる市屏風山、七戸町榎林（佐藤・葛西, 1981b）で確認されている。

幼虫の食草はヨモギ属と言われており（井上ら, 1982）、今後の調査で更に生息地が確認される可能性が高い。

（山内智）

チョウ目 ヤガ科 **D**

和名 セプトモクメヨトウ
 学名 *Auchmis saga* (Butler)
 環境省：該当なし

本種は、北海道、本州、四国、九州に分布しているが、その産地はかなり局地的で少ない（井上ら, 1982）。隣県の岩手県でも数か所の産地しか知られておらず（土井, 2005）、どこでも発見例の少ない種類である。県内ではつがる市高山稲荷（葛西・佐藤, 1979）、野辺地町烏帽子岳（佐藤, 1985）の記録が知られている。今後、県内での分布や生態などの詳しい調査が待たれる。

（山内智）

チョウ目 ヤガ科 **D**

和名 シロオビヨトウ
 学名 *Hadena compta* (Denis et Schiffermüller)
 環境省：該当なし

開張27mm内外で、前翅は灰黒色に白色の帯を表す。成虫は8月に出現する。北海道・本州に分布するが産地は局地的である。東北では本県の他秋田県、岩手県に分布するが少ない。幼虫はカワラナデシコの種子を食べることが確認されている（小木, 1997）。本県では屏風山や鷹架沼などで記録され、湿潤地帯が生息地と思われる。このような地域におけるナデシコ類の減少や、鷹架沼周辺の開発は、生息環境改変の危険性を有している。

（佐藤博）

チョウ目 ヤガ科 **D**

和名 ハマセダカモクメ
 学名 *Cucullia scopariae* Dorfmeister
 環境省：該当なし

本種の国内での記録はほとんど無く希少種である。県内では1977年8月に深浦町岩崎の海岸沿いで1雄が記録されている（井上ら, 1982）。

国内での生態等については不明であるが、ヨーロッパでの本種の食草がハマヨモギであることや、深浦町の採集記録から、本種は海岸地帯に局地的に生息すると推測される。各地の海岸での調査で新生息地が確認される可能性があり、今後の詳しい調査が待たれる。

（山内智）

チョウ目 ヤガ科 **D**

和名 エゾスジヨトウ
 学名 *Doerriesa striata* (Staudinger)
 環境省：該当なし

本種は国内では、北海道と本州の湿地帯に分布しているが、少ない種類である。本州中部ではモウセンゴケが繁茂する低湿地で見ついている（工藤, 1985）。県内では東通村大利（葛西, 1985, 1988；佐々木, 1993）で確認されている。

県内での低湿地帯でモウセンゴケの生えている地域での詳しい調査が待たれる。

（山内智）

チョウ目 ヤガ科

D

和名 ヨコスジヨトウ

学名 *Mesoligia furuncula* (Denis et Schiffermüller)

環境省：該当なし

本種は国内では、北海道と本州に分布する。北海道では普通に見られる。本州では東北地方で見ついているが少ないようである（井上ら, 1982）。県内ではつがる市平滝沼（葛西, 1983b）、つがる市屏風山（工藤, 1985）で確認されている。

本種はヨーロッパではイネ科植物の茎を食べる（井上ら, 1982）が、本県の生息地である屏風山地区にも多くのイネ科植物があることから、今後の詳しい調査が待たれる。（山内智）

チョウ目 ヤガ科

D

和名 シロミミチビヨトウ

学名 *Oligia leuconephra* Hampson

環境省：該当なし

本種の国内での分布は、北海道と本州（東北地方）である。東北地方では青森県、岩手県、秋田県、宮城県、福島県で確認されているが、青森県や秋田県では少なく、岩手県では比較的多い。県内では、つがる市屏風山（佐藤, 1985）で記録されている。

今後の調査で更に生息地が確認される可能性がある。（山内智）

チョウ目 ヤガ科

D

和名 ウスクモヨトウ

学名 *Eremobina pabulatricula fraudulenta* (Staudinger)

環境省：該当なし

本種の国内での分布は、北海道と本州（青森県、岩手県、山梨県）である。本州での採集記録は数例しかなくきわめて少ない（岩手県, 2001）。県内では田子町白萩平（葛西・佐藤, 1980）から確認されている。

北海道東部では普通に見られ、幼虫はヨーロッパでは草原のイネ科植物についているという（井上ら, 1982）。このことから、草原での調査で新生息地が発見される可能性が高く、今後の詳しい調査が望まれる。（山内智）

チョウ目 ヤガ科

D

和名 ウスキモンヨトウ

学名 *Photedes fluxa* (Hübner)

環境省：該当なし

本種の国内での分布は北海道と本州（青森県）の湿地帯であるが、個体数はとても少なく貴重な種類である。県内では東通村小田野沢の湿地から1雄が唯一記録されている（山内, 2000a）。

詳しい生態は不明であるが、県内には多くの湿地帯があり、今後の調査で更に生息地が確認される可能性がある。（山内智）

チョウ目 ヤガ科

D

和名 ハイイロヨトウ

学名 *Parastichtis suspecta* (Hübner)

環境省：該当なし

本種は国内では、北海道と本州（青森県、岩手県）に分布しているが、少ない種類である。県内では青森市萱野茶屋、十和田市焼山・平川市軍馬平（葛西, 1983a）、黒石市黒森山（葛西・佐藤, 1979）、青森市魔ノ岳（佐藤, 1985）で確認されている。

国外では、幼虫が一時期ハコヤナギ（ヤマラナシ）の芽を食べることが知られている（井上ら, 1982）、この植物は県内山地に見られるので、今後の調査で更に生息地が確認される可能性が高い。（山内智）

チョウ目 ヤガ科

D

和名 ホソバウスキヨトウ

学名 *Chortodes elymi* (Treitschke)

環境省：該当なし

本種の国内での分布は、北海道北部・東部、本州で、採集例の大変少ない希少種である。県内では1986年東通村尻屋崎（杉山, 1986）で記録されたが、本州の他県での記録はほとんど知られていない。

本種は海岸のハマニンニクなどの*Elymus*属が食草（井上ら, 1982）で、生息地が海岸に限定される。各地の海岸での調査で新生息地が確認される可能性があり、今後の詳しい調査が待たれる。（山内智）

チョウ目 ヤガ科**D**

和名 ヒメシロテンアオヨトウ

学名 *Trachea melanospila* Kollar

環境省：該当なし

本種の国内での分布は、北海道と本州で、その産地は大変少ない（井上ら, 1982）。県内では、八甲田山大岳（神保ら, 1991）、十和田市子ノ口（葛西, 1988c）の二ヶ所で記録されている。隣接する岩手県では多くの産地が確認（土井, 2005）されており、県内でも八甲田山系を中心に新産地が確認される可能性があり、今後の詳しい調査が待たれる。

(山内智)

チョウ目 ヤガ科**D**

和名 ヒメシロシタバ

学名 *Catocala nagoides* Wileman

環境省：該当なし

本種の国内での分布は、北海道と本州であるが、その分布はやや局地的である（井上ら, 1982）。県内ではつがる市大滝沼（工藤, 1983；亀田・山内, 2003）、つがる市平滝沼（亀田・山内, 2002）、弘前市岳・悪戸（柳田, 2004）などから記録されている。

本種の幼虫はカシワで生育し、採集地はカシワが残っている場所である。つがる市屏風山一帯に大規模なカシワ林が残っているが、近年少なくなっている。今後の詳しい分布の調査が望まれる。

(山内智)

チョウ目 ヤガ科**D**

和名 ウゴウンモンツマキリアツバ

学名 *Pangrapta suaveola* Staudinger

環境省：該当なし

本種の国内での分布は、東北地方（青森県、秋田県、岩手県、山形県）などであるが、どこでもその産地は局地的である（井上ら, 1982）。県内では、青森市新城・矢田、東通村大利（葛西, 1988a）、鱈ヶ沢町長沼（亀田・山内, 2005）、弘前市岩木山柴柄沢（亀田・山内, 2008）などで記録されている。今後、分布や生態などの詳しい調査が望まれる。

(山内智)

チョウ目 ヤガ科**D**

和名 アルプスギンウワバ

学名 *Syngrapha ottolenguii* (Dyar)

環境省：該当なし

本種は、北海道と本州の高山地帯のハイマツ地帯に生息する種類で、高山蛾と呼ばれている。県内では八甲田山（神保, 1994）、八甲田山仙人岳（工藤, 1989）、八甲田山大岳（神保ら, 1991；葛西, 1986）と、八甲田山の高山帯から記録されている。

本種は準昼間・夜間活動性種で昼間に飛び回ることから、目につきやすい種である。今後、八甲田山系全域での分布状況の詳しい調査が必要である。

(山内智)

チョウ目 ヤガ科**D**

和名 フシキキシタバ

学名 *Catocala separans* Leech

環境省：該当なし

国内では本州と対馬に分布するがいずれも産地は局地的。東北では岩手県盛岡市・福島県館岩村などが産地として知られている。本県産20種の本属中、もっとも採集例の少ない種で、現在のところ旧岩木町百沢で得られた2個体（松野, 未発表）しか記録がない。食樹はクヌギが知られるが、クヌギが分布していない本県では何を食樹としているか。低山地雑木林が生息地と思われるが、採集例がきわめて少なく情報収集が必要。

(佐藤博)

チョウ目 ヤガ科**D**

和名 ハスオビアツバ

学名 *Zanclognatha obliqua* Staudinger

環境省：該当なし

本種は、北海道と本州（東北、関東）の湿地帯に局地的に分布するが、本州での記録は少ない。県内では三沢市仏沼（阿部ら, 2001, 2005；オオセツカの生息環境研究グループ, 1999）、つがる市平滝沼（葛西, 1983b；亀田・山内, 2003）、つがる市ベンセ沼（亀田・山内, 2004）、つがる市屏風山（工藤, 1985）、東通村大利、六ヶ所村鷹架沼（葛西, 1988b）の湿地帯から確認されている。各地の湿地帯での詳しい調査が待たれる。

(山内智)

和名 カサイヌマアツバ

学名 *Zanclognatha perfractalis* Bryk

環境省：該当なし

本種は、湿地帯に分布する蛾で、個体数の少ない種類である。1981年、1982年つがる市平滝沼湖畔で採集された (Owada, 1992)。国内では青森県以外に宮崎県、群馬県、岩手県で、国外では朝鮮半島などで確認されている。岩手県では多くに産地が知られており (土井, 2005)、秋田県でも海岸沿いの湿地で確認されている (高橋, 1994; 梅津, 2004)。県内でも、各地の湿地の調査で新たな生息地が確認される可能性があり、今後の調査が待たれる。

(山内智)

和名 十和田市蔦のレイヨウマダラテントウ个体群

環境省：該当なし

学名 *Epilachna yasutomii* (Katakura)

[形態的特徴] 体長6.5～7.0mm。上翅は濃赤褐色で28の黒色斑紋をもつ。

[選定理由] 本種は、十和田市蔦で発見（福田, 1970）され、本地域をタイプ産地として新種記載（Katakura, 1981）された。本種には、レイヨウボタンを主食とするタイプと、ジャガイモが主食で害虫化した東京西郊型が知られている（安富, 1974, 1976, 1977；片倉, 1988）。本種は食性の地域分化が著しく、昆虫の害虫化から多くの研究が行われているが、タイプ産地個体群の食性との比較は研究上必要である。近年、環境変化がないのにタイプ産地での個体数が異常に減少し危機的状況にある。

[分布と生態の概要] 本種は、北海道から本州中部以北にレイヨウボタンを主食とする個体群、関東地方南部から西は岐阜県までジャガイモを主食とする個体群が分布するが局所的である。県内では、産地が点在している（安富, 1974；富岡, 1983, 1986；山内, 1994b, 1996）。

[生存に対する脅威と保存対策] 十和田市蔦は、十和田八幡平国立公園に指定され食草は保護されているが、昆虫採集は禁止されていない。減少原因は明確でないが、採集が原因の一つと思われる。
(山内智)

③引用文献

- 阿部 東 1970. 青森県オサムシ. YAMASE, 9: 23-28.
阿部 東 1972. 岩木山. 月刊むし, 16: 5-7.
阿部 東 1974. 青森県産天牛類の覚え書き. 甲虫ニュース, 31/32: 13-14.
阿部 東 1980. 日本の重要な昆虫類, 青森県. pp. 1-56. 環境庁.
阿部 東 2008. 青森県におけるゲンゴロウ類3種の採集記録. Cellastrina, 43: 37.
阿部 東・藤田 宏 1976. 青森県下の興味深いカミキリ2種. Elytra, 4(2): 39.
阿部 東・今 純一・三上春文・梁瀬友宏・山内 智 2001. 小川原湖周辺の無脊椎動物 (1). 青森県立郷土館調査研究年報, 25: 9-14.
阿部 東・今 純一・三上春文・梁瀬友宏・山内 智 2004. 小川原湖周辺の無脊椎動物 (4). 青森県立郷土館調査研究年報, 28: 39-46.
阿部 東・今 純一・三上春文・梁瀬友宏・山内 智 2005. 小川原湖周辺の無脊椎動物 (5). 青森県立郷土館調査研究年報, 29: 11-18.
阿部 東・小田良孝・工藤貢次 2002. ゲンゴロウ科 (Dytiscidae) 3種の染色体. Jpn. J. Ent. (N. S.), 5(4): 145-154.
阿部 東・山内 智 1987. 白神山地自然環境調査報告書 (赤石川流域), 昆虫. pp. 104-187. 青森県.
阿部 東・山内 智 1989. 白神山地自然環境調査報告書 (大川・暗門川流域), 昆虫. pp. 84-144. 青森県.
秋山美文 2004. 広島県のエゾコガムシの記録. 甲虫ニュース, 145: 19-20.
青森県 1993. 南八甲田山地総合学術調査報告書. 238pp.
青森県 2000. 青森県の希少な野生生物. 283pp.
青森県生物学会八戸支部 1989. 笹原氏が南郷村に寄贈した蛾の標本. 青森県生物学会八戸支部会報, 24: 1-2.
荒木 哲 1995. キベリマルヒサゴコメツキを本州北端で採集. 月刊むし, 287: 37-38.
朝比奈正二郎 1936. カラカネイトトンボ青森に産す. 昆虫, 10(1): 52.
朝比奈正二郎 1988. 日本産ゴキブリ分類ノートXVII. 衛生動物, 35(1): 53-62.
朝比奈正二郎 1992. 日本産ゴキブリ類. 中山書店, 東京. 253pp.
Bates, H. W. 1883. Supplement to the geodephagous Coleoptera of Japan, chiefly from the collection of Mr. George Lewis, made during his second visit, from February, 1880 to September, 1881. Trans. Ent. Soc. London, 1883. pp. 205-290.
Chûjô, M. 1955. Erotylid-beetle of Aomori Prefecture, collected by Mr. K. Shimoyama (III). Entom. Rev. Japan, 6(6): 43-44.
Chûjô, M. 1969. Erotylidae. Fauna Japonica, Academic Press of Japan. 316pp.
Cobben, R. H., 1985. Additions to the Eurasian saldid fauna, with a description of fourteen new species (Heteroptera, Saldidae). Tijds. Ent., 128(4): 215-270.
ダム水源環境整備センター 1997. 陸上昆虫類調査. 平成8年度高瀬川水環境現況総合調査業務報告書, II. pp. 311-321.
土井信夫 2005. 岩手県の大形蛾類 付蝶類リスト. 240pp.
江崎悌三・一色周知・六浦 晃・井上 寛・岡垣 弘・緒方正美・黒子 浩 1975. 原色日本蛾類図鑑 (下). 保育社, 大阪. 304pp., 136pls.
福田 彰 1956. 青森県産ジンガサハムシ亜科について. 進化, 8(3/4): 9-11.
福田 彰 1969a. 三八地方の甲虫 (1). 青森県生物学会八戸支部研究資料10. 4pp.
福田 彰 1969b. 三八地方の甲虫 (2). 青森県生物学会八戸支部研究資料12. 4pp.
福田 彰 1970. ルイヨウボタンを食草とするオオニジュウヤホシテントウ群の未記録の一型について. Kontyu, 38(4): 348-352.
福田 彰・阿部 東・菊池幸夫・今 純一・山内 智 1992. 白神山地自然調査概要 (2) 昆虫・蜘蛛. 青森県立郷土館調査研究年報, 16: 21-36.
福田 彰・阿部 東・菊池幸夫・今 純一・山内 智 1993. 白神山地自然調査概要 (3) 昆虫・蜘蛛. 青森県立郷土館調査研究年報, 17: 34-56.
福田 彰・阿部 東・菊池幸夫・今 純一・山内 智 1994. 白神山地自然調査概要 (4) 昆虫・蜘蛛. 青森県立郷土館調査研究年報, 18: 15-25.
福田 彰・阿部 東・菊池幸夫・今 純一・山内 智 1997. 下北丘陵自然調査概要 (2) 無脊椎動物. 青森県立郷土館調査研究年報, 21: 19-27.
福田 彰・阿部 東・菊池幸夫・今 純一・山内 智 1998. 下北丘陵自然調査概要 (3) 無脊椎動物. 青森県立郷土館調査研究年報, 22: 16-25.
福田 彰・阿部 東・菊池幸夫・今 純一・山内 智 2000. 下北丘陵自然調査概要 (5) 無脊椎動物. 青森県立郷土館調査研究年報, 24: 16-20.
福田 彰・阿部 東・菊池幸夫・今 純一・山内 智 2001. 下北丘陵の無脊椎動物. 下北丘陵の自然, pp. 73-100. 青森県立郷土館.
福田 彰・奈良典明 1952. 青森県産はんみょう科について—青森県の昆虫 (I) —. 進化, 4(2): 11-15.
福田 進 1984. 八戸と昆虫. 八戸市教育委員会. 56pp.
福田 進 1988. 根城の自然と虫たちの60年. わたしたちの根城, 根城地区連合町内会. pp. 52-54.
五所川原農林高校自然科学部 1966. 十二湖昆虫採集目録. やませ, 6: 9-66.
五所川原農林高校自然科学部 1970. 中山山脈昆虫リスト. YAMASE, 9: 40-55.
Habu, A. 1958. One new *Bembidion*-species from North Japan. Kontyû, 26: 64-67.
Habu, A. 1962. Chalcididae Leucospididae and Podagrionidae. Biogeographical Society of Japan. 232pp. 19pls.
羽田義仁 1989. 福井県のハナバチ上科について (2). 福井虫報, 4: 11-19.
橋爪秀博 1994. タガメのすべて—水生動物との共生を願って—. トンボ出版, 大阪. 32pp.
林 文男 1995. センブリの分類を一段落させて. 兵庫陸水生物, 46: 1-24.
林 正美 2003. ヒメミズギワカメムシの秋田県からの発見および長翅型の記録. Rostris, 51: 21-23.
林 成多・八木 剛 2000. 日本におけるエゾコガムシの分布. 甲虫ニュース, 132: 7-8.
樋口 誠 1993. ゲンゴロウモドキ青森県の記録. 月刊むし, 264: 38.
樋口 誠・丸屋良博 1995. 猛暑で極端に減少・小型化したマークオサムシ. 月刊むし, 291: 34.
平嶋義宏・森本 桂 2008. 新訂 原色昆虫大図鑑, III, 北隆館, 東京. 654pp.
平山修次郎 1936. オオチャイロハナムグリ. 虫の世界, 1(5/6): 17.

- 日浦 勇 1967. 日本産水棲・半水棲半翅類の分布の研究Ⅰ. 大阪市立自然科学博物館研究報告, 20: 65-81.
- 日浦 勇 1968. 日本産水棲・半水棲半翅類の分布の研究Ⅱ. 大阪市立自然科学博物館研究報告, 21: 13-17.
- 小木広行 1997. *Hadena*属(ヤガ科)3種の幼虫と食草. 蛾類通信, 193: 289-290.
- 堀 繁久 2000. 日本新記録のアナバネコツゲンゴロウ(新称). 知床博物館研究報告, 21: 33-38.
- 池田都志也・高橋 誠 2003. 青森県におけるサロベツナガケシゲンゴロウの記録. 月刊むし, 394: 2.
- 井上 寛ほか 1982. 日本産蛾類大図鑑. Vol.1: 1-968; Vol.2: 1-556, 1-392pls. 講談社, 東京.
- 市川裕二 2004. 東通村のハネヒロエゾトンボ. *Ladybird*, 4: 15-16.
- 市田忠夫 1986. 津軽半島北部のウスバカマキリ・カヤコオロギ・その他若干の直翅類の記録. *Celastrina*, 17:25-26.
- 市田忠夫 1988. 青森県のカメムシ(I). *Celastrina*, 20: 113-145.
- 市田忠夫 1989. 青森県のカメムシ(II). *Celastrina*, 22: 29-38.
- 市田忠夫 1991. 青森県のカメムシ(III). *Celastrina*, 26: 44-54.
- 市田忠夫 1993. 木造町でシヨウリョウバツタモドキ採集. *Celastrina*, 28: 72.
- 市田忠夫 1998a. 本州から初めて記録されるタイワンナガマキバサシガメ. *Rostria*, 47: 29-30.
- 市田忠夫 1998b. 北上川下流域の興味深いカメムシ類. *インセクトマップオブ宮城*, 9: 25-27.
- 市田忠夫 2000. その後のウスバカマキリ. *Celastrina*, 35: 139.
- 市田忠夫・市川顕彦 2001. 青森県平滝沼でトゲヒシバツタを採集. 月刊むし, 364: 49.
- 一戸清志 1980. 青森県および秋田県・岩手県北部におけるスジグロチャバナセセリ属の分布. *Celastirina*, 4: 2-15.
- 一戸清志 1991. オオウラギンヒョウモンを子田町で採集. *Celastrina*, 26: 74.
- 石村 清 1952a. トワダオオカの幼虫期について. 衛生動物, 3(1/2): 12-19.
- 石村 清 1952b. 日本産ゴマシジミの生活史. 生態昆虫, 4(10): 27-34.
- 石村 清・佐藤哲男 1941. 青森縣博物總目録, 第2巻節足動物 昆蟲編. 青森県博物研究会々報, 10/11:28-108.
- Ishimura, K., 1938. A List of Odonata from Aomori prefecture (Northern Honsyu). 青森博物研究会会報, 6: 4-22, Pl. 2.
- Ito, M. and M. Munakata 1979. The bumblebee in southern Hokkaido and northernmost Honsyu, with notes on Blakiston zoogeographical line. *Low Temp. Sci. Ser B*, 37: 81-105.
- 岩手県 2001. いわてレッドデータブック. 614pp.
- 岩井大輔・八木 剛 2003. 日本におけるオオルリハムシの地理的分布. 昆虫ニューシリーズ, 6(2): 105-110.
- 神保一義 1994. 高山蛾—高山を舞う蛾たち. 築地書館, 東京. 191pp.
- 神保一義・柳田慶浩・葛西 充 1991. 岩木山・八甲田山の高山帯の蛾類. 蛾類通信, 62: 204-207.
- 亀田 満・山内 智 2002. 青森県屏風山周辺の蛾類(I). 青森自然誌研究, 7: 53-58.
- 亀田 満・山内 智 2003. 青森県屏風山周辺の蛾類(II). 青森自然誌研究, 8: 29-34.
- 亀田 満・山内 智 2004. 青森県屏風山周辺の蛾類(III). 青森自然誌研究, 9: 53-60.
- 亀田 満・山内 智 2005. 青森県屏風山周辺の蛾類(IV). 青森自然誌研究, 10: 53-59.
- 亀田 満・山内 智 2006. 青森県八甲田山の蛾類(IV). 青森自然誌研究, 11: 33-34.
- 亀田 満・山内 智 2007. 青森県屏風山周辺の蛾類(V). 青森自然誌研究, 12: 35-44.
- 亀田 満・山内 智 2008. 青森県岩木山の蛾類. 青森自然誌研究, 13: 25-34.
- 環境省 2006. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物. 246pp.
- 神奈川県立博物館編 1995. 阿部光典ゲンゴロウ類コレクション標本目録. 神奈川県立博物館自然部門資料目録, 8: 5-66. 神奈川県立生命の星・地球博物館.
- 柏崎春生 1974. オオクワガタの採集. *ビートル*, 3: 22.
- 葛西 充 1983a. 青森県蛾想記その2. 「ハイイロキリガ」. 誘蛾燈, 92: 114-116.
- 葛西 充 1983b. 青森県蛾想記その3. 「ヨスジカパイロアツバ」. 誘蛾燈, 94: 218-221.
- 葛西 充 1984. 青森県蛾想記その4. 「ミスジキリガ」. 誘蛾燈, 96: 100-103.
- 葛西 充 1985. 青森県蛾想記その6. 「エゾスジヨトウ」. 誘蛾燈, 102: 151-152.
- 葛西 充 1986. 青森県蛾想記その7. 誘蛾燈, 103: 7-14.
- 葛西 充 1987. 青森県の蛾(VIII). 誘蛾燈, 109: 81-85.
- 葛西 充 1988a. 青森県の蛾(XI). 誘蛾燈, 111: 17-21.
- 葛西 充 1988b. 青森県の蛾(XII). 誘蛾燈, 112: 51-56.
- 葛西 充 1988c. 青森県の蛾(VI)の追加記録. 誘蛾燈, 113: 99-100.
- 葛西 充 1989a. 青森県の蛾(XIII). 蛾類通信, 151: 5-12.
- 葛西 充 1989b. 青森県の蛾(XIV). 誘蛾燈, 115: 35-37.
- 葛西 充 1989c. 青森県の蛾(XV). 誘蛾燈, 116: 65-68.
- 葛西 充・佐藤 博 1977. 青森県産シャクガ科の記録. 誘蛾燈, 67: 4-8.
- 葛西 充・佐藤 博 1979. 青森県の蛾(II). 誘蛾燈, 75: 4-7.
- 葛西 充・佐藤 博 1980. 青森県から採集された注目すべき蛾. 蛾類通信, 106: 83-84.
- 葛西 充・佐藤 博 1981. 青森県の蛾(V). 誘蛾燈, 86: 125-128.
- Katakura, H. 1981. Classification and evolution of the phytophagous ladybirds belonging to *Eenosepilachna vigintioctomaculata* complex. *J. Fac. Sci., Hokkaido Univ. Ser. IV. Zool.*, 22(4): 301-378.
- 片倉晴雄 1988. オオニジュウヤホシテントウ. 文一総合出版, 東京. 160pp.
- 川井信矢・堀 繁久・河原正和・稲垣政志 2008. 日本産コガネムシ上科図説第1巻食糞群(普及版). 昆虫図書六本脚, 東京. 198pp.
- 蹴揚洋子・米田幸子・小池 忍 1985. 三戸地方のトンボ. *Paulownia*, 17: 101-112.
- Kerzhner, I. M., 1979. New Heteroptera from the Far East of the USSR. *Trudy zool. Inst.*, 81: 14-65. (in Russian)
- Кержнер, И. М. 1981. Полужеткокрылые Семейства Nabidae. Фауна СССР, Наскские Хоботные, Том XIII, Вып 2 326pp.
- 毛塚尚利 1982. ヒゲブトハナカミキリを青森県で採集. 月刊むし, 136: 34.
- 菊池昭雄 1983. 青森県のベニモンマダラ. *Celastrina*, 12: 17.
- 菊池昭雄 1981. 青森県でクロフカバシャクを採集. 誘蛾燈, 84: 88.
- 木俣 繁 1984. 故白畑孝太郎氏所蔵蛾類標本(1). 誘蛾燈, 96: 87-94.
- 木村帝一 1973. 野内川周辺の昆虫. やぶなべ, 19: 11-22.
- Kimoto, S. 1966. The Chrysomelidae of Japan and the Ryukyu Islands. XI. *J. Fac. Agr., Kyushu Univ.*, 13(4): 635-671.

- 木元新作 1989. キアシネクイハムシの記録について. 昆虫と自然, 24(13): 5-6.
- 木元新作・滝沢春雄 1994. 日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説. 東海大学出版会, 神奈川. 530pp.
- 岸田泰則 1995. ミツモンケンモン青森県に産す. 蛾類通信, 185: 161.
- Kishii, T. 1962. Elateridae of Islands Rishiri-to, Rebun-to and Todo-jima "The snappers of islands(Ⅲ)". Bull. Heian High School, 7: 1-31.
- Kishii, T. 1966. Some new forms of Elateridae in Japan(Ⅳ). Bull. Heian High School, 10: 1-11.
- Kishii, T. 1987. Some new forms of Elateridae in Japan(XIX). Bull. Heian High School, 31: 1-20.
- Kishii, T. 1991. Notes on Elateridae from Japan and its adjacent Area(10). Bull. Heian High School, 35: 1-21.
- Kishii, T. 1992. Notes on Elateridae from Japan and its adjacent Area(11). Bull. Heian High School, 36: 1-30.
- Kishii, T. 1996. Notes on Elateridae from Japan and adjacent Area(14). Bull. Heian High School, 39: 1-40.
- 北島 宏 1955. 湯ノ股、恐山を歩いて. 進化, 7(3/4): 25-27.
- 古川晴男 1928. 昆虫夜話. 自然研究, 3: 44-48.
- 国際芸術センター青森 2004. 国際芸術センター青森の森環境調査報告書, 120pp.
- 小宮義璋・大桃定洋・高桑正敏 1986. ネクイハムシ類1985年の採集, 観察記録. 甲虫ニュース, 71: 5-6.
- 工藤広悦 1983. 青森県屏風山の蛾. 誘蛾燈, 91: 33-39.
- 工藤広悦 1985. 沼沢地の蛾. 月刊むし, 174: 8-15.
- 工藤広悦 1989. 穂高から八甲田-高山帯及び亜高山帯の蛾. 誘蛾燈, 115: 19-21.
- 工藤 忠 1987. 下北半島でのヒメシジミの幼虫生態. Cellastrina, 19: 21-23.
- 工藤 忠 1995. 岩木川下流のアシ原に生息するマークオサムシについて. Cellastrina, 30: 18-20.
- 工藤 忠 1996. 板柳中央病院に舞い込んだヤブヤンマ. Cellastrina, 31: 79.
- 工藤 忠 2003. 日本産蝶類県別レッドデータ・リスト(2002年) 青森県. 日本産蝶類衰亡と保護5. pp. 8-10.
- 工藤 忠・鈴樹亨純・尾崎俊寛・榎田俊明・市田忠夫・山本直樹・波多野良次・菊地昭雄, 1999. 青森市田代湿原昆虫調査(1997~98年). Cellastrina, 34: 45-72.
- 黒石市教育委員会 2001. 山谷文吾氏寄贈昆虫標本目録. 130pp.
- 黒沢良彦 1982. マークオサムシの分布北限. 甲虫ニュース, 56: 8.
- 黒沢良彦・久松定成・佐々治寛之 1985. 原色日本甲虫図鑑(Ⅲ). 保育社, 大阪. 500pp.
- 榎引顕弘 1971. 暗門川・赤石川昆虫リスト. やませ, 10: 56-88.
- 榎田俊明 1991. 青森県のハンミョウ類(Ⅲ). Cellastrina, 26: 55-67.
- 榎田俊明 1995. 東北地方のゲンゴロウモドキ類. Cellastrina, 30: 75-87.
- 榎田俊明・佐藤隆志 1990. 青森県のゲンゴロウモドキ類. Cellastrina, 25: 27-37.
- Lewis, G. 1894. On the Elateridae of Japan. Annls. Mag. nat. Hist. Ser. 6. 13: 184-185.
- Maeta, Y., K. Goukon, N. Sugiura and R. Miyanaga 1996. Host records of cleptoparasitic bees in Japan. Jpn. J. Ent., 64(4): 830-842.
- Matsumura, S. 1931. A new species and a new genus of Noctuidae from Japan. Ins. Mats., 5(4): 210-211.
- 松本英明・荒木 哲・森 正人 1989. 北海道のゲンゴロウモドキ類. 月刊むし, 225: 19-25.
- 松村松年 1916. 新日本千虫図解2. 警醒社書店, 東京. 474pp.
- 松野武敏 1987. 青森県のオオシラホシヤガ. 蛾類通信, 140: 227.
- 松野武敏・唐牛良明・近藤 格・斎藤光夫・須摩靖彦・斎藤和夫 1966. 十二湖のオオゴキブリ. 東北昆虫, 4: 1-2.
- 松浦寛子 1992. 日本の珍しい蛾8. イブキスズメ. やどりが, 148: 14.
- 松浦一郎 1981. 珍説進化論(3) 翔んだ翔んだタマゴが翔んだ エゾエンマ *Teleogryllus yezoemma* 分布の謎. ぱったりぎす, 35: 820-824.
- 三上隆司 1986. 青森県におけるコウヤホソハナカミキリの追加記録. 月刊むし, 190: 30-31.
- 三上隆司 1987. 青森県でオニホソコバナカミキリを採集. 月刊むし, 195: 38.
- 三上隆司 1988. ココヤマヒメカミキリ青森県の記録. 月刊むし, 214: 28.
- 三上隆司 1989. 青森県津軽地方のカミキリムシ(1) 食樹と生態について(上). Cellastrina, 23: 5-12.
- 三上隆司 1990. 青森県津軽地方のカミキリムシ(1) 食樹と生態について(下). Cellastrina, 24: 17-24.
- 三上隆司 1993. 青森県西海岸におけるカミキリ3種の食樹観察. 昆虫と自然, 28(5): 18-24.
- 三上隆司 1997. シロオビドイカミキリを青森県にて採集. 月刊むし, 322: 27.
- 三上隆司・阿部 東 1985. 青森県産カミキリ4種の寄生植物について. 月刊むし, 175: 41-42.
- 三上隆司・佐藤 稔 1981. 青森県初記録のカミキリ3種. 月刊むし, 130: 27.
- 三橋 渡 1979. ベニモンマダラの産地. ケルクス, 12: 14.
- Miyamoto, S. 1959. Veliidae of Japan and adjacent territory III. Kontyu, 27(1): 81-85.
- 森 正人・北山 昭 1993. 日本のゲンゴロウ. 文一総合出版, 東京. 217pp.
- 森 正人・北山 昭 2002. 改訂版 図説日本のゲンゴロウ. 文一総合出版, 東京. 232pp.
- 森田誠司 1984. 恐山のミズギワゴミムシ. 甲虫ニュース, 66: 7.
- 森田誠司・山内 智 1986. 恐山のゴミムシ類. むつ市文化財調査報告書, 12: 76-86.
- Mroczkowski, M. 1959. *Lyrosoma chujoi* sp. n. from Japan. Ent. Rev. Japan, 10(2): 49-50.
- 村上義千代 1993. ココヤマヒゲナガカミキリを採集. Cellastrina, 28: 74.
- 室谷洋司 1989. 青森県におけるオオルリシジミの衰亡. 日本産蝶類の衰亡と保護. 1: 90-97. 日本鱗翅学会・日本自然保護協会.
- 室谷洋司 1993. 日本産蝶類県別レッドデータ・リスト(1992年), 東北地区2青森県. 日本産蝶類の衰亡と保護. 2: 24-26. 日本鱗翅学会・日本自然保護協会.
- 室谷洋司 2007. 東北地方のオオルリシジミ~発見から分布解明, そして絶滅までの経過~. Butterflies, 44: 2-19.
- 室谷洋司・阿部 東 1962. 青森県の蝶類. 青森蝶同好会, 296pp.

- むつ市教育委員会 2002. 芦崎の自然. 100pp.
- 長尾 康 1984. ヨコヤマヒゲナガカミキリの青森県における記録. 月刊むし, 166: 3.
- 長島孝雄 1982. ガロアムシの生活史. インセクトリウム, 13(2): 4-9.
- 中村裕之 1985. 岩手県のツガルホソシテムシの記録. 月刊むし, 174: 41.
- 中根猛彦 1955. 原色日本昆虫図鑑(上). 保育社, 大阪, 274pp.
- 中根猛彦 1986. 北日本のゲンゴロウ類同定についての覚え書. 東北の自然, 22: 16-19.
- 中根猛彦 1987. 日本の雑甲虫覚え書1. 北九州の昆虫, 34(3): 173.
- 中根猛彦 1993. 日本の雑甲虫覚え書10. 北九州の昆虫, 40(1): 1-8, pl. 1.
- 南部敏明 1973. 樹脂を使用するキユビギングチバチの習性. 生物研究, 17(3/4): 55-60.
- 奈良岡弘治 1986. ヤブヤンマ健在. *Celastrina*, 18: 33.
- 奈良岡弘治 1998. 深浦町のヒメサナエ. *Celastrina*, 33: 57.
- 奈良岡弘治 2004. 平滝沼でウスバカマキリを採集. *Celastrina*, 39: 88.
- 奈良岡弘治 2007. コバネアオイトトンボの生殖行動と他の日本産*Lestes* 2種との比較. *Tombo*, 50(1/4): 59-64.
- 奈良岡弘治 2009. つがる市車力村のウスバカマキリ. *Celastrina*, 44: 48.
- 成田 弘 1992. 栗駒山西部山麓で採集されたトンボ類. 秋田自然史研究, 28: 6-10.
- 成田俊明 1988. 青森県のハンミョウ類. *Celastrina*, 20: 61-112.
- 成田俊明 1989a. 黒石市におけるタガメの古い記録. *Celastrina*, 22: 44.
- 成田俊明 1989b. 青森県のハンミョウ類(II). *Celastrina*, 23: 31-44.
- 鳴海良平 1935. 1935年度決算膜翅目の部. テレアコ, 1(12): 1-13.
- 鳴海良平 1951. 津軽産粘管目目録. 進化, 3(3): 8-10.
- Nilsson, A. N. and Nakane, T. 1993. A revision of the *Hydroporus* species (Coleoptera: Dytiscidae) of Japan, the Kuril Islands and Sakhalin. *Ent. Scand.*, 23: 419-428.
- 西島 浩 1999. 大千軒岳・岩部. 昆虫類の多様性保護のための重要地域(第1集). p. 12. 日本昆虫学会自然保護委員会.
- 西田 彰 1997. 青森県でキバネモリトンボを採集. 月刊むし, 322: 12.
- 西田鉄郎 1959. 岩木川生物調査報告. 昆虫班. *Blakiston*, 6(1): 11-16.
- 西沢登志樹 1987. トウホクトラカミキリの採集2例. *Celastrina*, 19: 44.
- 野尻湖昆虫グループ 1985. アトラス日本のネクイハムシ. pp. 182
- Oguma, K. 1922. The Japanese dragonflies fauna of the family Libellulidae. *Deutsch. Entomol. Feitschr.*, 1922: 96-112.
- 小倉住夫 1971. 名久井岳に於いてムモンベニカミキリを採集. 月刊むし, 5: 36.
- 岡田一二三 1966. 三八地方を中心としたトンボ類について. 青森県生物学会八戸支部例会発表要旨. 3pp.
- 奥村定一 1942. 千島の蜻蛉類(II). 昆虫, 16(1): 12-19.
- 小野泰正・佐竹邦彦 1978. 岩手県におけるムツアカネの新生息地について. 東北昆虫研究, 16: 14.
- 大場信義(編) 2004. ホタルの点滅の不思議. 横須賀市自然・人文博物館. pp. 200.
- 大平仁夫 1963. キベリマルコメツキについて. *Kontyu*, 31: 79-83.
- 大平仁夫 1994. エゾクロツヤミズギワコメツキの形態について. *Elytra*, 22(1): 153-157.
- 大平仁夫・下山健作 1984. 青森県のコメツキムシ若干種について. 青森県立郷土館調査研究年報, 9: 53-61.
- 大平仁夫・山内 智 1991. 下北半島のコメツキムシ類について. 青森県立郷土館調査研究年報, 15: 11-25.
- 大平仁夫・山内 智 1994. 岩木山のコメツキムシ類について(1). 青森県立郷土館調査研究年報, 18: 77-90.
- 大平仁夫・山内 智 1997. 八甲田山のコメツキムシ類について(1). 青森県立郷土館調査研究年報, 21: 73-81.
- 大平仁夫・山内 智 1998. 八甲田山のコメツキムシ類について(2). 青森県立郷土館調査研究年報, 22: 51-59.
- 大野喜右衛門 1935. *Homonotus iwatai* Yasumatsuの生態に就いて. 関西昆虫学会報, 4: 60-72.
- 大野正男 1980. 日本産主要動物の種別文献目録(6) べにもんまだら. 東洋大学紀要教養課程篇(自然科学), 23: 51-55.
- 大野正男 1987. 日本産主要動物の種別文献目録(19) オオチャイロハナムグリ(1). 東洋大学紀要教養課程篇(自然科学), 31: 145-179.
- 大野正男 1989. トワダオオカの分布総説. 日本の生物, 3(12): 48-51.
- 大野正男 1993. オオゴキブリの分布. 月刊むし, 263: 29.
- 大野正男 1997. 日本産主要動物の種別知見総覧(44) ホソハンミョウ(1). *Field Biologist*, 7(2): 36-56.
- 大野正男 2000a. 日本産主要動物の種別知見総覧(53) オオヒョウタンゴミムシ(1). 東洋大学紀要教養課程篇(自然科学), 44: 133-162.
- 大野正男 2000b. 日本産主要動物の種別文献目録(54) カワラハンミョウ(1). 東洋大学紀要教養課程篇(自然科学), 44: 163-201.
- 大野正男 2002. 日本産主要動物の種別知見総覧(56) オオゴキブリ(1). 東洋大学紀要自然科学篇(自然科学), 46: 85-141.
- 大西伸一 1992. 津軽半島北西部のカミキリ(I). *Celastrina*, 27: 65-75.
- 大西伸一 1993. 津軽半島北西部のカミキリ(II). *Celastrina*, 28: 17-26.
- 大西伸一 1994. 津軽半島北西部のカミキリ(III). *Celastrina*, 29: 35-44.
- オオセッカの生態環境研究グループ 1999. 北国の草原湿地帯のシンボルであるオオセッカの好む環境に関する研究-三沢市仏沼-. pp. 49-55.
- 大高明史・小笠原嵩輝・木村直哉・小林 貞・谷田一三・上西 実・安倍 弘・富川 光・櫛田俊明 2008. 青森県・屏風山湖沼群の底生無脊椎動物相. *Celastrina*, 43: 49-78.
- 太田祐司・井辻一雅・白根敬児 1970. 下北半島葉研・奥葉研の採集記録. エゾシロ, 42: 8-9.

- Owada, M. 1992. Synonymic notes on the herminiine moths (Noctuidae) of Japan, with descriptions of three new species. *TINEA*, 13(18): 183-203.
- 尾崎俊寛 1985. トウホクトラカミキリ雑記. *Celastrina*, 15: 2-7.
- 尾崎俊寛 1986. 青森県未記録のカミキリ2種について. *Celastrina*, 18: 33-34.
- 尾崎俊寛 1988. 市田忠夫氏採集の青森県産カミキリムシ(1). *Celastrina*, 21: 25-34.
- 尾崎俊寛 1993. コウチュウ目. 南八甲田山地総合学術調査報告書. pp.105-185. 青森県.
- 尾崎俊寛・一戸清志 1992. 東北地方未記録のヒメビロウドカミキリについて. *Celastrina*, 27: 63-64.
- 尾崎俊寛・鈴樹亨純 1989. 青森県におけるオオハナカミキリの追加記録. *Celastrina*, 22: 45-46.
- 任樹芝 1998. 半翅目 異翅亜目 姫蟻科. 中国動物誌, 昆虫綱第13巻. 251pp, 15pls.
- 斎藤和夫 1956. 全国採集地案内・青森. 新昆虫, 9(6): 12-13.
- 斎藤和夫・北畠 宏 1966. 青森県のノシメコヤガ. 蛾類通信, 42: 387-388.
- 斎藤仁志 1987. 下北地方の食糞性コガネムシ類(1). *Celastrina*, 19: 25-26.
- 斎藤仁志 1989. 下北半島でのカミキリムシ3種の記録. *Celastrina*, 23: 48.
- 斎藤仁志 1993. 青森県の食糞性コガネムシ類. *Celastrina*, 28: 47-60.
- 斎藤清吾 1935. 県産天蛾に付きて. テレアコ, 1(2): 26-29.
- 佐々木明夫 1993. 青森県下北で得た蛾数種. 誘蛾燈, 134: 89-91.
- 佐々木明夫・葛西 充 1994. 日本産ソトシロスジミズメイガについて. 蛾類通信, 181: 87-89.
- 佐々治寛之 1982. ヨシ湿原のテントウムシ類. 昆虫と自然, 17(9): 32.
- 佐藤 博 1985. 青森県の蛾(VI). 誘蛾燈, 101: 117-124.
- 佐藤 博 1970. 青森市街の *Orthosia* の採集記録. 蛾類通信, 63: 44-45.
- 佐藤 博・葛西 充 1975. 青森県の蛾類. 蛾類通信, 84: 402-403.
- 佐藤 博・葛西 充 1978a. 青森県でノシメコヤガ再発見. 蛾類通信, 98: 634.
- 佐藤 博・葛西 充 1978b. 青森県の蛾(I). 誘蛾燈, 72: 33-39.
- 佐藤 博・葛西 充 1980. 青森県の蛾(III). 誘蛾燈, 79: 11-15.
- 佐藤 博・葛西 充 1981a. 青森県の蛾(IV). 誘蛾燈, 84: 55-60.
- 佐藤 博・葛西 充 1981b. 青森県の蛾(I)及び(II)の追加記録. 誘蛾燈, 84: 60.
- 佐藤隆志 1984. 久渡寺・座頭石のカミキリムシ(5). *Celastrina*, 13: 18-20.
- 佐藤隆志・尾崎俊寛 2000. 青森県におけるクマガイクロアオゴミムシの採集例. *Celastrina*, 35: 23-24.
- 佐藤光明・白岩康夫・手代木渉・奈良典明・室谷洋司 1967. 青森県動物誌. 東奥日報社, 青森. 361pp.
- 佐藤光昭・袴田裕国・渡部悟司・諏訪内敬・藤田弘安昭 1987. 名川町の昆虫1986. *Paulownia*, 19: 41-49.
- 佐藤力夫 1986. 日本産 *Brabira* 属の1新種とホソバナミシヤク奄美大島亜種の記載. 蛾類通信, 134: 129-131.
- Shibata, T. 1969. Some reports on the burying beetles from Japan. *I. Ent. Rev. Japan*, 21: 47-54.
- 下山健作 1960. 十和田湖周辺のオオキノコムシ類. 昆虫学評論, 11(2): 49-58.
- 下山健作 1964a. 青森県, 特に十和田湖周辺のカミキリムシの生態(1). 昆虫学評論, 16(2): 67-76.
- 下山健作 1964b. 青森県, 特に十和田湖周辺のカミキリムシの生態(2). 昆虫学評論, 17(1): 28-38.
- 下山健作 1964c. 青森県, 特に十和田湖周辺のカミキリムシの生態(3). 昆虫学評論, 17(2): 77-84.
- 下山健作 1967. 青森県西津軽郡平滝沼採集記. 生物研究, 11(3/4): 52-55.
- 下山健作 1978a. 青森県の歩行虫類I. 昆虫学評論, 32(1/2): 135-150.
- 下山健作 1978b. 青森県のシデムシ科目録. さやばね, 4: 7-10.
- 下山健作 1985. 昆虫. 平賀町誌. pp.115-150. 平賀町.
- 下山健作 1988. 青森県のクワガタムシ科. 青森県生物学会誌, 25: 6-9.
- 下山健作 1989a. 青森県のコガネムシ類数種. *Saikaku*, 7: 31-32.
- 下山健作 1989b. 青森県のクワガタムシ. 昆虫と自然, 24(10): 2-5.
- 下山健作・福田 彰・阿部 東・菊池幸夫 1982. 昆虫. 津軽半島の自然. pp.107-453. 青森県立郷土館.
- 下山健作・福田 彰・阿部 東・菊池幸夫・山内 智 1986. 昆虫・蜘蛛. 下北半島の自然. pp.84-142. 青森県立郷土館.
- 下山健作・福田 彰・阿部 東・菊池幸夫・山内 智 1991. 昆虫・蜘蛛. 赤石川の自然. pp.71-176. 青森県立郷土館.
- Shinohara, A. 1992. The sawfly genus *Megaxyela* (Hymenoptera, Xyelidae) in East Asia. *Jpn. J. Ent.*, 60(4): 783-796.
- Shiraki, T., 1911. Phasmiden und Mantiden japans. *Annot. Zool. Jap.*, 7: 291-331, pl.12.
- 杉 繁郎 1974. ヘリボシキノコヨトウを青森県で採集. 蛾類通信, 80: 331.
- 杉木 隆 1986. 青森県のクロフカバシヤク. 青森の蝶, 9(2/3): 31.
- 須摩靖彦・山内 智 1988. 釜臥山周辺のトビムシ相. むつ市文化財調査報告, 14: 163-178.
- 須摩靖彦・山内 智 2006. 釜木山のトビムシ類, 特にトビムシ類の垂直分布について. 青森自然誌研究, 11: 49-58.
- 須摩靖彦・山内 智・野田坂佳伸 2003. 青森県恐山山地のトビムシ類, 特にカバイロユキノミの多型について. 青森自然誌研究, 8: 19-24.
- 鈴樹亨純 1986. 弘前市でヤマトキモンハナカミキリを採集. *Celastrina*, 18: 32.
- 鈴樹亨純 1988. 久渡寺・座頭石のカミキリムシ(6). *Celastrina*, 21: 2-10.
- 鈴樹亨純 1991. 岩木山で採集したヤツボシカミキリとジュウニキボシカミキリ. *Celastrina*, 26: 72.
- 鈴樹亨純 2008. ハネビロエゾトンボとヤブヤンマの記録. *Celastrina*, 43: 40.
- 鈴樹亨純・奈良岡弘治 1989. 青森県のヒメサナエ. *Celastrina*, 23: 13-14.
- 鈴樹亨純・奈良岡弘治 2006. 再発見されたホンサナエ. *Celastrina*, 41: 1-3.
- 鈴木正雄 他 1951. 青森県下北郡恐山地方生物調査記(2). 進化, 3(2): 1-7.

- Suzuki, H., Y. Sato and N. Ohba 2002. Gene diversity and geographic differentiation in mitochondrial DNA of the Genji firefly, *Luciola cruciata* (Coleoptera: Lampyridae). *Mol. Phylogenet. Evol.*, 22: 193-205.
- 杉山徹朗 1986. ホソバウスキヨトウを青森県尻屋崎で採集. 誘蛾燈, 106: 141.
- 高橋雅彌 1988. 青森県道周辺の蛾類, 秋田自然史研究, 23: 7-14.
- 高橋雅彌 1992. 秋田県の蜻蛉Ⅲ, 秋田自然史研究, 28: 11-24.
- 高橋雅彌 1994. 秋田県の各種植生における蛾類 3. 秋田県中央部における湿地の蛾類. 秋田自然史研究, 30: 25-37.
- 高橋 滋 1999. 日本でもミツモンケンモンの生活史. 蛾類通信, 203: 43-46.
- 田村隆宏 2003. 青森県で採集したハネビロエゾトンボ. 月刊むし, 391: 48.
- 田村隆宏 2003. 青森県車力村で採集したゲンゴロウ類. 月刊むし, 386: 45-46.
- 田中一裕 1984. カマキリの卵の寄生蜂オナガアシブトコバチについて. *Celastrina*, 13: 21-23.
- 田沢治美 2000. シマゲンゴロウの記録. 黒蜩, 2: 2.
- 富永 修 1986. 東北地方のネクイハムシ, アトラス以後. 東北の自然, 7: 4-7.
- 富岡康浩 1974. 八戸市で採集されたベニモンマダラ, ケルクス, 4: 7-8.
- 富岡康浩 1982. ほこりまみれの気になる記録. おとしぶみ, 7: 4-5.
- 富岡康浩 1983. ルイヨウマダラテントウとオオニジュウヤホシテントウの産卵時期ならびに卵塊卵粒数について. *Celastrina*, 11:6-12.
- 富岡康浩 1986. 「東京西郊型エピラクナ」の起源およびルイヨウマダラテントウの食性の地理的変異についてⅡ. 昆虫と自然, 21(11): 18-21.
- 富岡康浩 1989. 三八地方のカメムシ. *Ladybird*, 3: 9-45.
- 外崎 誠 1952. 下北地方昆虫覚え書. *Blakiston*, 1(1): 28-30.
- 鳥倉英徳 1985. 雑草地で越冬するヤガ科幼虫3種. 誘蛾燈, 99: 16-18.
- Tsuneki, K. 1983. Revision of the holotype of *Odontolarra (Lyroda) nigra* Cameron, with remarks on its subspecies and the description of a closely related new species from Japan. *SPJHA*, 25: 57-62.
- 土屋正雄 1931. 青森県の直翅目. 自刊. 55pp.
- Uchida, H. 1952. A new genus of Sminthuridae from Japan (Collembola). *MUSHI*, 24(1): 1-4.
- Uchida, H. 1953. On three new species and a new form of Japanese Sminthuridae, with special reference to the dentalsetae. *Annot. Zool. Jap.*, 26(1): 1-13.
- Uchida, H. 1969. Studies on the arboreal Collembola I. Results of faunal survey of Mt. Hakkoda area, IBM main area. *Sci. Rep. Hirosaki Univ.*, 16(1/2): 19-29.
- 内田 一 1938. 日本産トビムシ2新種クロマルトビムシとキボシアオイボトビムシ. *Zool. Mag. Tokyo.*, 50(3): 132-134.
- 内田 一 1952. 無翅昆虫雑記 (I). 進化, 10: 31-34.
- 内田 一 1953. トビムシモドキ科 (昆虫, 粘管目) の3属 *Tetradontophora*, *Lophognathella*, *Homaloproctus* 間の関係について. 動物学雑誌, 62(2): 55-58.
- 内田 一 1962. 郷土を科学する, 昆虫編. 陸奥新報, 5497: 4.
- Uéno, S. 1975. Occurrence of a new endogean trechine beetle in the Shimokita peninsula, northern Japan. *Bull. Natn. Sci. Mus. Ser. A. (Zool.)*, 1(2): 115-118.
- Uéno, S. 1993. Two new endogean trechines (Coleoptera, Trechinae) from the Shirakami Mountains, Northeast Japan. *Elytra*, 21(1): 179-186.
- Uéno, S. 1994. New oculate *Trechiana* (Coleoptera, Trechinae) mainly from non-volcanic mountains of northern Honshu, northeast Japan. *Elytra*, 22(1): 23-44.
- Uéno, S. and A. Yoshida, 1966. A presumptive prototype of the *Trechoblemus* complex. *Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo*, 9(2): 76-83.
- 上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝 1985. 原色日本甲虫図鑑 (Ⅱ). 保育社, 大阪. 514pp.
- 梅津一史 2004. 雄物川河口付近の砂浜で採集した蛾類. 秋田自然史研究, 48: 14-21.
- 漆館智恵子・久保 瞳・中島晶子・戸花 豊・水梨勝広 1978. 昆虫班活動報, 1978. *Paulownia*, 11: 44-66.
- Usui, T., S. Miyamoto & M. Hayashi 1997. Occurrence of *Gerris (Gerris) lacustris* (Heteroptera., Gerridae) in Hokkaido, Japan. *Jpn. J. Ent.*, 65: 217-218.
- 碓井 徹 1998. *Gerris (Gerris) lacustris* キタヒメアメンボ (新称) の本州北部からの発見. *Rostria*, 47: 43-44.
- 碓井 徹・疋田直之 2001. キタヒメアメンボの本州における新産地. *Rostria*, 50: 37-39.
- 和田干蔵 1933. わが郷土のブラキストン線. 青森師範学校郷土号, 1: 161-178.
- Watanabe, C. 1937. A contribution to the knowledge of the braconid fauna of the Empire of Japan. *Jour. Fac. Agric. Hokkaido Imp. Univ.*, 42: 1-188.
- 渡邊福壽 1934. 青森県特産の昆虫類 (1). 青森博物研究会時報, 1(2): 1-7.
- 渡邊福壽 1935. 十和田八甲田の動物. 114pp. 青森営林局.
- 渡邊福壽 1937. 森林動物相調査報告一輯金亀子科鞘翅目. 101pp. 青森営林局.
- 山田雅輝 1999. 青森県の有剣蜂相 6 コシブトハナバチ科の種類と分布. 青森自然誌研究, 4: 39-45.
- 山田雅輝 2000. 青森県から初めて記録するハバチ亜科の10種. 青森自然誌研究, 5: 52-54.
- 山田雅輝・奈良岡弘治 2001. 弘前市弥生産のヤブヤンマ. 青森自然誌研究, 6: 108.
- 山本大二郎 1959. 青色のハチ, ルリジガバチの生活. 日本昆虫記 I. 講談社, 東京. pp. 7-77.
- 山内 智 1989. むつ市の昆虫類. むつ市史自然編. pp. 284-328.
- 山内 智 1994a. 昆虫類. 白神山地の自然, 青森県. pp. 91-105.
- 山内 智 1994b. 青森県西津軽郡におけるルイヨウマダラテントウの食性とジャガイモ畑への侵入. 日本応用動

物昆虫学会誌, 38(3):191-193.

- 山内 智 1996a. 青森県のテントウムシ科. 青森自然誌研究, 1: 17-23.
- 山内 智 1996b. フトクチヒゲヒラタゴミムシの産地について. 青森自然誌研究, 1: 24.
- 山内 智 1996c. 世界遺産白神山地考察(26) 白神山地の固有種. れぢおん青森, 210: 53.
- 山内 智 1999. オオチャイロハナムグリの記録. 青森自然誌研究, 4: 58.
- 山内 智 2000a. ウスキモンヨトウ. 青森県の希少な野生生物—青森県レッドデータブッカー. 青森県, P. 257.
- 山内 智 2000b. 中里町のゲンジボタルの記録. 青森自然誌研究, 5: 8.
- 山内 智 2007. ゲンジボタルの生態と保全. 希少野生生物保護・保全対策報告書. pp. 29-30. 青森県.
- 山内 智・阿部 東 1987. 昆虫類, 白神山地白神環境調査報告書(赤石川流域). pp. 104-188. 青森県.
- 山内 智・亀田 満 1999. 青森県八甲田山の蛾類. 青森自然誌研究, 4: 35-38.
- 山内 智・三上春文 1998. 下北郡のゲンジボタルの新生息地について. 青森自然誌研究, 3: 59.
- 山内 智・宮 彰男 2008. 青森県三沢市仏沼のマークオサムシの記録. 青森自然誌研究, 13: 66.
- 山谷文仁 1936. 十和田昆虫採集旅行記. 昆虫界, 4: 811-817.
- 山谷文仁 1938a. 青森県産昆虫目録(承前). 昆虫世界, 42(5): 17-20.
- 山谷文仁 1938b. 青森県産鋏形虫科に就いて. 虫の世界, 2(7/8): 19-21.
- 山谷文仁 1939a. 青森県産ハンミョウ科目録. 虫の世界, 3(3/4): 11-14.
- 山谷文仁 1939b. 泥炭より採集せるオサムシに就いて. 関西昆虫雑誌, 5(3): 8-11.
- 山谷文仁 1943. 青森県の昆虫採集案内. 昆虫世界, 47: 141-142.
- 山谷文仁 1977. オオチャイロハナムグリとオニホソコバナネカミキリの話. Coreana, 17: 18-20.
- 山谷文仁 1989. マークオサムシ. 東日本のオサムシ, pp. 61-71. 東日本オサムシ研究会.
- 山谷文仁・草刈広一 1982a. 東北地方のオサムシ. 月刊むし, 136: 22-28.
- 山谷文仁・草刈広一 1982b. 東日本のオサムシ分布地点表(1)青森県. 東日本オサムシ研究会連絡紙, 2: 18-23.
- 山美幸子・船場善幸・袴田裕国・米内祐逸・佐藤光昭 1986. 三戸町西部方面の昆虫1985. Paulownia, 18: 34-45.
- 柳田則明 2004. 青森県で採集された若干の蛾類の記録. インセクトマップ宮城, 21: 15-18.
- 安富和男 1974. オオニジュウヤホシテントウ群の問題点. 動物分類学会会報, 47: 1-4.
- 安富和男 1976. 東京西郊Epilachnaの分布地域と食性について. Kontyu, 44(1): 111-114.
- 安富和男 1977. オオニジュウヤホシテントウ群に関する問題点をめぐって. 昆虫と自然, 12(11): 14-19.
- 安富和男 1991. カメノコハムシ類に関する思い出と諸問題. 青森の蝶, 10(2): 114-123.
- 安富和男・富岡康浩 1988. スジキイロカメノコハムシ記録と食草. 昆虫と自然, 23(13): 8.
- 安富和男・富岡康浩・蒔田増美 1997. キイロカメノコハムシに関する知見. 昆虫と自然, 32(6): 31-34.
- 安富和男・富岡康浩・蒔田増美 1999. キイロカメノコハムシに関する知見(第2報). 昆虫と自然, 34(10): 32-34.
- 安永智秀・高井幹夫・川澤哲夫・中谷至伸 2001. 日本原色カメムシ図鑑第2巻. 全国農村教育協会. 353pp.
- 横山裕正 2003. 青森県におけるカバシヤクの採集記録. Cestrastrina, 38: 16.
- Yoshiyasu, Y. 1985. A systematic study of the Nymphulinae and the Musotiminae of Japan. Scient. Rep. Kyoto Prefect. Univ. (Agric.), 37: 1-162.
- 吉富博之・松井英司・堀繁久・秋田勝巳・山川雄大 2001. レッドデータ水生昆虫類の分布記録I エゾコガムシの分布記録のまとめ. 甲虫ニュース, 135: 7-9.